

原 著

陰 莖 癌 ニ 就 テ

金澤醫學專門學校病理學教室(主任中村博士)

金澤醫學專門學校醫學士 和田 龜 俊

目 次

- 一、緒 言
  - 二、實驗例記載
    - 一、臨床的記載
    - 二、肉眼の所見
    - 三、顯微鏡の所見
  - 三、考 案
    - イ、頻 度
      - ロ、陰莖癌ト年齡トノ關係
      - ハ、陰莖癌ト職業トノ關係
      - ニ、陰莖癌ノ臨床的經過
      - ホ、陰莖癌ノ發生部位
- 原 著 和田ニ陰莖癌ニ就テ

- ヘ、陰莖癌ノ分類
- ト、癌腫實質細胞
- チ、癌腫組織ノ増殖
  - 其ノ一 核分割像
  - 其ノ二 癌腫組織ノ血管ニ對スル態度
  - 其ノ三 癌腫組織ノ末梢神經纖維ニ對スル態度
  - 其ノ四 陰莖癌ノ轉移形成
  - 其ノ五 陰莖癌ノ一般増殖狀態殊ニ癌腫組織周邊部ニ於ケル増殖蔓延狀態
  - 其ノ六 陰莖癌ノ發生原因(内因及外因の關係)
- リ、所謂部分的自然治癒現象

原著 和田 陰莖癌ニ就テ

- 一、巨體細胞ノ出現
- 二、癌腫細胞巢内ニ於ケル白血球ノ集簇
- 三、細菌ノ感染

- 四、癌腫組織間質ニ於ケル反應性病變
- 又、「メラニン色素ニ就テ
- 四、結論

## 一、緒 言

余ハ陰莖癌トシテ當教室所藏標本、外科下平教授、皮膚科土肥教授ノ好意ニヨリ其ノ教室ニ保存セラルル標本ノ貸與ヲ受ケ得タルモノ、其他聖靈病院院長淡中學士ノ好意ニヨリ貸與セラレタル同院貯藏標本合セテ二十四例ニ就キ研究ヲ企テ、殊ニ其ノ組織學的検査ヲ行フニ當リ癌腫増殖蔓延狀態、「メラニン色素ノ問題及ビ癌腫部分の自然治癒現象ニ關シ、聊カ興味アル事實ニ接シタルヲ以テ、茲ニ項ヲ逐テ記述ヲ試ミ學者ノ教ヲ乞ハントス、之ガ腫瘍病理ノ上ニ多少トモ貢獻スル所アラバ幸之レニ過ギズ。

## 二、實驗例記載

### 第一 例 附屬醫院皮膚科教室貯藏標本

松原 某 三十九歳。

### 臨床的記載

遺傳的關係不詳、舉子七人、其ノ中六人生存、一人ハ生後一週間ニシテ死亡、患者ハ大正八年正月頃陰莖龜頭ニ糜爛面ヲ生ゼシ事アリ、同年二月中旬頃傷ヲ生シ漸次増悪シ、同年四月十九日皮膚科ヲ訪フ、組織的検査ト臨床上ノ所見ヨリ陰莖癌兼包莖ト診斷セラル。

### 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ五・七釐ノ部ニテ切斷セラル、包皮ハ冠狀溝ノ部ニ於テ

後方ニ翻轉シ包皮縁ハ土堤狀ニ隆リ腫瘍狀ヲナス、殊ニ背側及左右側ニ於テ著シ、其ノ表面粗糙ニシテ他ノ部ニ比シ色淡クシテ著シキ凹凸不平ヲ認メシメズ、所々斑狀ニ褐色ノ調ヲ示セル部アリ、龜頭先端ヨリ其ノ大部分ハ面平滑ナレドモ龜頭背側面冠狀溝ニ近キ部ハ腫瘍狀ニ隆起シ少シク凹凸不平粗糙ナリ、此ノ部ニ於テ肥厚セル包皮縁ニ相移行セリ。背側面正中線ニ近ク指頭面大ノ物質欠損部アリ、龜ノ部ハ肉眼上病變最モ強キ部ナリ、猶又左側冠狀溝ノ部ニ大豆大ノ物質欠損ヲ示セリ。上述病變強キ部ノ中央ヲ通り正中線ニ於テ矢狀斷ヲ施シ其割面ニ於テ檢スルニ、上述物質欠損部

ノ縁ハ不平ナリ。冠狀溝ニ一致セル部ハ深部ニ向ツテ掘鑿ノ狀ヲ示ス、上皮細胞層ハ不整ノ肥厚ヲ示シ不羈ノ増殖ヲナシテ深部ニ向テ進入セル像ヲ呈シ其ノ部ノ色ハ周圍健康部ノ色ト異リ灰白色ニシテ質脆シ病變未ダ海綿體ニ及バズ、白膜部ニテ停止セルヲ認ム。

### 顯微鏡の所見

肉眼上病變甚ダ顯著ナリシ部ノ包皮内板及ビ冠狀溝ノ一部ヨリ製作セル標本ニ就テ檢スルニ、包皮内板及冠狀溝ノ健康像ハ何處ニモ之レヲ認ムル事ヲ得ズ、殆ンド腫瘍細胞ノ爲メニ侵蝕セラル。然ドモ侵襲ハ海綿體ノ部ニ及バズ、本腫瘍ニ於テ主トシテ増殖セル細胞ハ正常上皮層ニ於テ見ル棘細胞層ヲ形成セル上皮細胞型ノモノナルモ、其ノ形態等ニ於テ多様異型ヲ示セリ。一見圓柱形ノ基底細胞ノ如キ造構ヲ有スルモノ、ミヨリ成ルガ如キモ、油浸裝置ニテ詳細ニ檢査スレバ所々微細棘ヲ有スル細胞ヲ明ラカニ認メシム。核ハ甚ダ大ニシテ圓形或ハ橢圓形或ハ富稜形ニシテ一定ノ型ヲ呈セズ、可染質ニ富ミ其ノ支心ハ多クハ稠密ナル網狀ヲナスモ亦塊狀ヲナシテ存ス。核ハ一方ニ壓縮セラレ半月形ヲナセルモノアリ、核小體ハ殆ンド總テ之レヲ見ル、其數ハ一定セズ一個、二個、三個、四個ヲ算スルモ亦核支心ト融合セシモノ又假性核仁ニ屬ス可キモノ存在ス、核ノ破壊セラレ顆粒狀トナレルモノモ存ス。

上述ノ如キ多様ノ核ヲ有スル腫瘍細胞ハ表層ニ向ヒ又深部ニ向ヒ不羈ノ増殖ヲ營ミ、表層ニ向テハ顆粒層、角質層ヲ強く壓縮セリ。深部ニ向テハ腫瘍細胞ハ胞集ヲ作り眞皮組織層ニ向テ侵入セリ。間質ハ眞皮組織既存結締織及増殖セル結締織之レヲナス。間質組織ニ於テ小圓形細胞、白血球、プラスマ細胞ノ浸潤ヲ示シ、猶所々限局性ニ多核白血球集簇セル部存ス、其部ニ於テハ多核白血球ノ腫瘍細胞間ニ竄入セルヲ認ム、腫瘍細胞増殖ノ旺盛ナル部ニ於テ往々赤白血球ハ組織内ニ遊出セリ。血管ハ腫瘍細胞索

ノ爲メニ壓縮セラレ腔ハ狹小トナリ一部ニ於テハ却テ血管腔ハ擴張ス、而シテ所々血管ノ新生ヲ來シ猶間質中ノ血管主トシテ動脈管ニハ壁ニ結締織ノ増殖ヲ來セリ。猶又圓形細胞ノ浸淫ヲ認メシム、靜脈管ニ於テ所々壁ヲ破リ腔内ニ腫瘍細胞ノ進入増殖ヲ認ム。腫瘍細胞胞集間ニハ細長ニシテ單核幼弱ナル結締織細胞又ハ紡錘形ニシテ紡錘形ノ核ヲ有スル細胞ヨリ成レル部アリ。

本例ニ於テ核分割像甚ダ饒多ニシテ一視野(ライツ顯微鏡接眼1、接物7)中少クとも二個—三個ノ分割像ヲ認ム。カ、ル核分割像ヲ認メシムルハ所々散在性ニハ非ズシテ、多クハ集簇性ニ存ス。分割像ノ時期的關係ニ就キテハ甚ダ種々多様ナリ。主ナルハ母星期ニ屬スルモノニシテ、子星期ニ屬スルモノモ可ナリ多數ニ存ス。三極性ノ分割、不相對性分割又其他ニ種々不規則分割像ト認ムベキモノ存在セリ。核分割像ノ部位的關係ヲ檢スルニ、主トシテ基底細胞型ノ細胞ニ多數ニ認ム、猶腫瘍細胞ノ増殖旺盛ニシテ、不規則ナル部ニ於テハ種々ノ不規則核分割像ヲ可ナリ多數ニ認ム、而シテ分割像中ニハ明ラカニ、分割ヲ呈シナガラ變性ニ陷レルモノモ亦存ス。

腫瘍化セル病變部ト健康組織トノ境界部ニテハ小圓形細胞、プラスマ細胞、多核白血球等ノ浸潤強度ニシテ、此部ノ血管ハ腫瘍細胞増殖ノ爲メ壓迫セラレ其腔ハ變形セリ、此部ニテハ結締織ハ束狀トナリ、幼弱結締織細胞多數ニ存セリ。而シテ腫瘍組織トノ境界部ニ於ケル包皮部ノ表皮層ハ壓迫牽引セラレ、僅少ノ棘細胞層ト非薄ナル顆粒層及角化層ヲ殘セルノミ。猶所ニヨリテハ表皮層ヲ認メズシテ肉芽組織ヲ以テ置換セラル。此部ニ隣セル健康表皮層ニ於テ白血球ノ竄入セル像顯著ナリ。腫瘍組織トノ境界部ニ於ケル龜頭表皮ニ於テモ其各層ハ共ニ非薄トナリ表皮細胞間白血球ノ進入一層強シ、腫瘍細胞増殖ノ像ニ就キテハ試ニ染色標本テ肉眼的ニ檢シテ

モ、周邊部ニ對シ其ノ増殖甚ダ不羈ノ狀ニアリ。鏡下ニ之ヲ檢スルニ腫瘍細胞ハ主トシテ細索狀ノ胞巢ヲ形成シテ周圍組織ニ侵入セリ、表皮層ニ近キ部ニテハ表面ニ沿ヒテ横ニ盛ナル増殖ヲ營メルモ、真皮深部ニ對スル増殖ハ稍々其ノ趣ヲ異ニシ先ヅ胞巢ハ不整トナリ基底細胞型ノ細胞ハ形ヲ變ジ紡錘形又細長ナル形ヲナシテ強固ナル結締組織ノ間隙ニ進メルモノ存スルモ主トシテ血管周圍ノ淋巴腔ヲ通シテ進入セリ其ノ方向モ不整ナリ、平滑筋纖維又ハ血管等ニ遭遇シテハ其方向ヲ轉ジ、周圍ニ向ヒ、壓迫シツツ或ハ浸潤性ニ侵入セリ。腫瘍細胞ニ隣接セル表皮ハ可ナリ反應性ニ増殖ヲ營メリ、カ、ル表皮ノ増殖ハ正常表皮ニ向テ近ヅクニ從テ弱シ、表皮細胞ハ異型ノ像ヲ示サズ（カ、ル周邊部ノ表皮増生ノ像アルモノヲ以下側性増殖トシテ記載セン）

周邊部表皮ニシテ腫瘍増殖部ニ隣接シ真皮組織中炎性變ヲ呈セル部ニテ健康上皮部ニ比シテ上皮細胞中ニ「メラニン色素消失セリ、而モ其部真皮乳頭内ニハ極少數ナルモ」メラニン色素ヲ含メル紡錘形ノ細胞存在セリ。上皮細胞内「メラニン色素含有ノ度及ビ真皮内「メラニン色素含有セル細胞ノ數ハ病變部ヲ遠ザカルニ從テ増加セリ」メラニン色素ハ健康上皮ニ於

テハ基底細胞層及棘細胞層ノ上皮細胞中主トシテ核ノ周圍原形質中ニアリ然レドモ上皮細胞「メラニン色素含有ノ度ハ真皮内所謂「クロマトフォール」細胞ノ數トハ必ラズシモ並行セズ。

腫瘍細胞ノ角化傾向甚ダ弱クシテ全汎ニ巨リテ僅ニヶ所ニ角化アルヲ認ム、癌珠ハ之ヲ認ムルコトヲ得ズ。

腫瘍細胞ノ増殖盛ナル部ニ於ケル胞巢中角化變性ヲ來セル部ニ白色球ノ集簇ヲ認ム。其ノ部角化層ハ破壊セラレ角質片、有核角化細胞ハ白血球ノ間ニ混在ス。カ、ル時白血球ノ集簇ノ爲メ擴大シ、胞巢ハ遂ニ破レ周圍ヨリ進入セル肉芽性變ニヨリテ置換セラレ。此部巨態細胞ヲ認メズ。腫瘍間質中ニ存在セル末梢神經纖維ニシテ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ蒙ラザルモノニアリテハ、其ノ周圍ニ圓形細胞ノ浸潤強ク、纖維周圍ノ結締組織ノ多少増生セルモノヲ認ム。而ルニ腫瘍細胞ノ神經纖維ニ迫リタルモノニアリテハ、腫瘍細胞ハ先ヅ纖維ヲ圍繞シ、纖維束間ヨリシテ進入シ遂ニ侵蝕セシガ如キ像ヲ示スモノアルモ、主トシテ周圍ヨリ亂入性ニ侵蝕セリ。而シテ腫瘍細胞ニ侵襲セラレタルモノト、セラレザルモノトヲ問ハズ、纖維ノ周圍ニ空隙ノ存スル事ハ屢々見ラル所ナリ。

## 第二例 當病理學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

### 肉眼的所見

陰莖ハ先端ヨリ五糎ノ部ニテ切斷セラレ、包莖ノ狀ニアリ、包皮ハ強ク肥厚シ殊ニ背側ニ肥厚最モ強シ。背面正中線ヨリ少シク左ニ偏シ小兒手掌面大ノ部表面大ナル凹凸アリテ、不平ニシテ突出隆起セル灰白色稍々花椰菜ニ比ス可キ形ヲ示セル腫瘍狀部アリ。其他正中線ニ於テ包皮緣尿道口ニ一致セル部ハ包皮緣肥厚シ噴火口狀ヲ呈シテ突出セル、小指頭面大ノ腫瘍

狀物存ス。猶包皮右側ニ於テモ鳩卵大ノ外方ニ突隆セル灰白色ノ表面粗糙ナル部アリ、亦腹側ニ於テモ小指頭大、豌豆大ノ腫瘍狀ニ隆起セル部アリ、背側面上述大腫瘍ノ周圍ニ大豆大、小豆大ノ多數ノ腫瘍存セリ、上記大腫瘍狀部ノ中央ヲ通り割テ施シ剖面ニ於テ檢スルニ、其部ハ上皮層ハ乳嘴狀ニ強ク増殖ヲ示シ深部ニ於テハ地圖狀ノ像ヲ呈シ、包皮内面ノ増殖ト相聯絡セリ、病變部ハ肉眼上、灰白色ヲ呈シ、健康部ト明ラカニ區別シ得、包皮内面、龜頭表面ノ上皮層ハ不整ノ増殖ヲ營ミ爲メニ龜頭ノ形狀及包皮内



面ノ性狀其他相互ノ關係甚ダ亂サレタリ。

## 顯微鏡的所見

肉眼上大腫瘍狀ヲナシテ外方ニ隆起セシ部ニ於テハ上皮細胞ハ胞巢狀ナシ、索狀又網狀ニ不羈ノ増殖ヲ營ミ、包皮内板及龜頭部ノ増殖旺盛ナル部ト相聯絡セリ腫瘍ヲ構成セル上皮細胞ハ主トシテ扁平多角形ニシテ細棘ヲ有スル正常上皮ニ於ケル棘細胞層ヲ形成セル細胞ニ一致ス、核ハ大ニシテ圓形或ハ橢圓形可染質ニ乏シク其ノ支心ノ網狀ヲナセルモノハ少シ、核膜ヲ明カニ認メ得、核小體ハ一個又ハ二個ヲ有スルモノ多ク、小體ヲ必ラズ核ノ中心部ヨリ離レタル部ニ証明ス。一細胞ニシテ二ツノ核ヲ有スルモノチ可ナリ多數ニ認ム。核ガ空胞狀ヲ呈シ其ノ可染質ハ核ノ一方ニノミ集リ居ルモノ亦甚ダ多シ。カ、ル空胞變性核ヲ有スル細胞ハ主トシテ棘細胞層ノ一部ニ多數ニ存スルモ、基底細胞層ニ一致セル部ニモ所々散見ス。斯クノ如キ腫瘍細胞ノ角化セルモノガ求心性ニ集リ、互ニ壓迫シ、重疊シ、蕈根狀ヲ呈シ、所謂癌珠ヲ形成セル部アリ。腫瘍細胞間ニ中性多核白血球「エオジン嗜好性白血球」ヲ竄入セル像顯著ナリ。

而シテ猶基底細胞型ノ上皮細胞モ多少ノ度ニ於テ増殖シ其ノ部ニ於テモ細胞間ニ中性白血球「エオジン嗜好性白血球」ヲ竄入セルヲ認ム。増殖セル上皮細胞ノ胞巢ノ間質ヲ成セル組織ハ眞皮組織之レヲナシ、此部組織ハ甚ダシク鬆粗トナリ小圓形細胞、多核白血球、「エオジン嗜好性細胞」、「ブラスマ細胞等」ノ浸潤強度ナリ。此部ニ於ケル血管ハ其腔一般ニ擴張シ、血管周圍ニ結締組織ノ増生ヲ認ムルモノ存スルモ顯著ニハ非ズ。其他間質ニ於テ新生血管及結締組織ノ増生ヲ認ム、腫瘍細胞ノ角化傾向ハ甚ダ強ク所々所謂癌珠ヲ形成セルヲ認メシム。

核分割像ハ第一例ニ比シテ甚ダ少ク、分割像ヲ認メシムルモノニアリテハ、母星期、子星期ニ屬スルモノ多數ヲ占メ、多極性又ハ甚ダ不規則ナル

分割像ハ之レヲ証明スル事ヲ得ズ。而シテ棘細胞層ノ部ニ於テハ直接核分割像ヲ認ムルコトアリ。核分割像ヲ認ムル部ノ部位的關係ニ就テハ基底細胞層ノ細胞ニ於テ甚ダ多數ニ存在セリ。

「メラニン色素」ノ狀態ヲ檢スルニ、上皮細胞ノ索狀網狀ニ増殖ヲ營メル部即チ側性増殖ト認ムベキ部ニ於テ上皮細胞中ニ多量ノ「メラニン色素」ヲ含有セリ。此ノ部眞皮組織中ニ圓形細胞ノ浸潤顯著ニシテ「メラニン色素」ヲ有スル細胞存セリ。上皮細胞増殖旺盛ニシテ角化傾向ヲ強ク伴ヘル部ニアリテハ、上皮細胞内色素ハ全ク消失スルカ、又減少セリ。カ、ル部ノ眞皮層ニ於テハ猶可ナリノ度ニ於テ色素細胞存セリ。上皮細胞中ノ色素ハ主トシテ基底細胞核ノ周圍ニ存在スルモ所ニヨリテハ棘細胞及ビソレヨリ淺層ノ上皮細胞ノ核ノ周圍ニ存在スルコトアリ。亦「クロマトフォール」様ノ色素細胞ガ上皮細胞間ニ分枝シ、或ハ塊狀ヲナシテ存在スルアリ。而シテ上皮細胞一般ニ異型ノ増殖ヲ營メル部ノ表皮、眞皮兩層ニ色素ヲ認メズ。上皮細胞増殖ノ態度ヲ檢スルニ、惡性破壊的ノ狀ヲ呈セズ上皮細胞索ハ周圍組織ヲ壓迫シツ、進入セリ。或部ニテハ上皮細胞索ノ尖端ヲ組織間隙ニ進入セシメ、次テ増殖セル像ヲ呈セリ。而シテ此ノ部小圓形細胞「ブラスマ細胞等」ノ浸潤極メテ強シ。一方腫瘍組織ト隣接セル表皮層ハ著明ナル側性増殖狀ヲ呈セリ。肉眼的ニ包皮内板ヨリ進メル腫瘍組織ト相聯絡セル外板部ノ上皮ニ於テハ組織的ニ上皮細胞ハ乳嚢狀ニ強ク増殖ヲ營ミ、各層増殖ニ與レルモ棘細胞層最モ強シ。カク細胞増殖アルモ異型ノ像ヲ呈セルニハ非ズ、外板上皮細胞ガ増殖シ癌腫細胞ニ變ジタルガ如キ狀ハ毫モ認ムル事能ハズ。此部核分割像ヲ証明セズ「メラニン色素」ノ狀態正常上皮ト異ナル所無シ。眞皮層ニ於テ細胞ノ浸潤強度ナリ。上記乳嚢狀増殖部ニ於テ一部上皮細胞ハ異型ヲ呈シ、角化傾向強キ部存ス。之レ此部ニ發生セルニ非ズシテ深部腫瘍胞巢ト相連レルモノナルヲ知ル。

## 第三例 當病理學教室貯藏標本

## 臨床的關係 不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ三・五釐ノ部ニ切斷セラル、包皮ハ冠狀溝ノ部ニ於テ後方ニ翻轉シ、右側包皮縁ハ堤狀ニ肥厚シ其面灰白色ニシテ粗粒顆粒狀ヲ呈セリ。其部ハ龜頭右側ノ拇指頭面大ノ物質欠損部ニ移行セリ。其ノ龜頭ノ部ハ龜頭ノ他ノ部ヨリ銳利ニ境セラレ、少シク隆起シ其面灰白色ニシテ、粗粒顆粒狀ヲ示セリ。物質欠損部ハ冠狀溝ノ部ニ於テ深ク掘鑿セリ。其物質欠損部ノ底ニハ斑狀ニ褐色ヲ呈セル部アリ。猶左側包皮縁一部肥厚シ此部灰白色ニシテ面粗粒顆粒狀ヲ呈ス。上記物質欠損部ヲ通り正中線ニ斜ニ割テ施シ、其ノ剖面ニ於テ檢スルニ物質欠損部ノ縁ハ小鋸齒狀ヲ呈シ冠狀溝ノ部ハ深部ニ向テ一種掘鑿セリ。カ、ル部及肥厚セル包皮縁ニ於テ表皮層ハ深部ニ向テ強ク増殖ヲ示セリ、病變部ハ灰白色ヲ呈シ未ダ海綿體ノ部ヲ侵襲セズ、白膜ノ部ニテ停止セリ。

## 顯微鏡の所見

本例ニ於テ腫瘍細胞ヲ成ス主ナルモノハ棘細胞層ニ一致スル上皮細胞ノ性狀ヲ有スルモノナルモ、正常棘細胞トハ全ク其造構ヲ異ニセリ。然レドモ猶微細ナル棘ハ之レハ淺層ノ部ニテ認ム。核ハ圓形、橢圓形或ハ圓柱形等種々ニシテ、甚ダシク可染質ニ富ミ、其ノ支心ハ稠密ニシテ網狀ヲ呈セルアリ、或ハ塊狀ヲナセルアリ。核小體ハ殆ンド總テノ細胞ニ藏スルモ、其數ハ多様ニシテ一定セズ。本標本ノ全部ニ亘リテ病變部ニ於ケル表皮層ハ多クハ壞死像ヲ呈シ顆粒層角質層ノ如キヲ明ラカニセズ。掘鑿ヲ示セル部ノ表皮壞死像中ニハグラム染色陰性ニシテ、連鎖ヲ成セル、デユクレー氏連鎖狀桿菌ニ酷似セル無數ノ短桿菌ヲ認メシム、本腫瘍組織ニ於テ上皮細

胞増殖ノ像ハ一様ナラズ、冠狀溝部、包皮内板ノ一部及龜頭ノ一部ニテハ主トシテ棘細胞型ヲ有スル細胞ノ増殖旺盛ニシテ所々胞巢中小ナル痼珠ノ形成アリ。一方包皮外板ノ部ニテ健康上皮ト相隣接セル部及其附近ニテハ圓柱形ノ核ヲ有シ、可染質ニ富繞ナル圓柱狀ノ基底細胞型ノ細胞ノ増殖顯著ナリ。而シテ兩増殖部ノ境界ニテハ一細胞索ヲ上記ノ兩々相異ナル造構ヲ有スル細胞ニテ構成シ、然カモ兩者ノ境界判然タリ(第一圖)。上皮細胞間ニ竄入セル白血球ノ數ハ兩者ニ差違アリ、索ノ先端ノ部ニテハ前者ハ後者ヲ包マンストスルガ如キ像ヲ呈セリ。一般ニ腫瘍細胞ノ増殖ハ外方表皮層ニ向ツテ強大ナリ、然レドモ海綿體ノ部ヲ侵襲セリ。本腫瘍組織ノ間質ハ真皮組織之レヲナシ、此部ニ小圓形細胞「プラスマ細胞、中性多核白血球、」エオジン嗜好性細胞ノ浸淫強ク、殊ニ「エオジン嗜好性細胞ノ浸潤ヲ強度ニ認ム。間質組織ニ於ケル細血管及血管ニハ強ク充血ヲ示シ、血管ノ周圍ニハ限局性ニ小圓形細胞、「プラスマ細胞、「エオジン嗜好性細胞ノ集簇ヲ認ム。」「エオジン嗜好性細胞ノ出現ハ龜頭真皮組織中ニ殊ニ顯著ナリ。腫瘍周緣部ニ於ケル腫瘍細胞ノ態度ヲ窺フニ、一般ニ真皮組織中ノ結締組織ノ間隙ヨリシテ浸潤性ニ進入シ又内被細胞ニテ覆ハレタル管腔中ニ向テ侵入セリ。即チ腫瘍細胞ハ個々或ハ大小ノ胞巢ヲ形成シテ真皮組織中ニ侵入シ、其狀恰モ大小島嶼ノ散在セルニ酷似セリ。爲メニ其部ノ血管ハ其腔ヲ變形シテ、狹小トナレルアリ、亦却テ擴張セルアリ。而シテ腫瘍細胞ノ増殖ニ伴ヒテ多少ノ炎性ノ細胞浸潤ヲ來セリ。腫瘍細胞ニシテ血管ヲ侵襲シ腔内増殖ヲナセル像ハ何所ニモ認ムルヲ得ズ。間質ニ於ケル末梢神經纖維ノ周圍ニハ圓形細胞ノ浸潤強度ナルモ、神經纖維自己ニハ著變ヲ認メズ。増殖セル上皮細胞案中ニ可ナリノ度ニ白血球ノ竄入セルヲ認ム、腫瘍化セル表

皮ト此レニ隣接セル包皮外板ノ側性増殖ノ狀ヲ呈セル表皮トノ境界部ニテハ判然タル境界存シ、側性増殖ノ狀ヲ呈セル上皮ガ直チニ腫瘍形成ニ加ハラントスルガ如キ像ハ認ムルコトヲ得ズ。即チ側性増殖部ニテハ正常ノ如ク各上皮層存スルモ、腫瘍化セル部ニテハ角質層顆粒層ノ全部ト棘細胞層ノ大部分ヲ認メシメズシテ、基底細胞層ノ上皮細胞ノミ強ク不羈ノ増殖ヲ營メル狀ニアリ。本例ニ於テ腫瘍周邊部表皮ニ於テ著明ナル側性増殖ヲ認ム。

上皮細胞中ニ存スル「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、正常上皮細胞層ニ於テモ真皮層ニ細胞ノ浸潤ヲ來セル部ニ於テハ色素全ク消失セリ。其ノ真皮

#### 第四例

當病理學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

肉眼的所見

陰莖ハ先端ヨリ五・五釐ノ部ニテ切斷セラレ包莖ノ狀態ニアリ。背面少シク右ニ偏シテ包皮外面ニ小兒手掌面ニ倍大ノ腫瘍花椰菜狀ニ隆起セリ。其ノ表面凹凸不平ニシテ所々茶褐色斑ヲナセル部ヲ認ム。猶該腫瘍狀部ニ接近併立シテ腹側ニ近ク拇指頭面大ノ其面凹凸不平ノ腫瘍アリ。上記大ナル腫瘍ノ中央ヲ通り斜ニ割ヲ施シ、割面ニ於テ檢スルニ、此部上皮細胞層ハ乳嘴狀ニ強ク増殖ヲ示シ、増殖ハ深部ニ向テ包皮内板及龜頭表面ニ及ベリ。而シテ龜頭外尿道口ノ部ニ於テハ、包皮内板ト龜頭表面ト明ラカニ境界ラル。其兩接觸面ヲ窺フニ、龜頭表面ハ凹凸不平ニシテ、上皮細胞層ノ増殖強ク、又内板部モ上皮細胞層ノ増殖ヲ示シ共ニ上述乳嘴狀増殖部ニ移行セリ。而シテ龜頭表面ト包皮内板トノ間ニハ灰白色脂狀汚穢物質ヲ攪セリ、要スルニ外尿道口ノ一部ニ於テ包皮内板ト龜頭表面ト區別シ得ルモ、其他ノ部ニ於テハ上皮層不整ノ増殖ノ爲メニ其相互關係ヲ明ラカニ檢スル

組織中ニモ色素細胞存セズ、然レドモ上皮細胞中多量色素ヲ含有セル部ニ相當セル真皮層中甚ダ稀ニ色素細胞ヲ証ス。側性増殖ノ部ニテハ表皮、真皮兩層ニ「メラニン色素」ヲ証明セズ、亦腫瘍組織中實質上皮細胞中、及間質組織中何所ニモ色素ヲ証スルヲ得ズ。

本例ニ於テハ核分割像ヲ甚ダ多數ニ認ム。其時期的關係ニ就キテモ多様ニシテ母星期、子星期ニ屬セシムベキモ多數ニシテ第一位ヲ占メ、其他三極性、多極性、不相對性、又全ク不規則ナル分割像モ可ナリ多數ニ認ム。核分割像ノ部位の關係ヲ觀ルニ、主トシテ胞巢最外層ノ基底細胞ニ多シ。

コトヲ得ズ。

顯微鏡的所見

上述ノ剖面ヨリ大ナル組織板ヲ採リ標本ヲ製作セリ。此部ノ上皮細胞ハ乳嘴狀ニ甚ダ強ク増殖ヲ營ミ、内方真皮ノ部ニ對シテ毛胞巢狀ヲナシテ侵入セリ。此等乳嘴狀増殖ヲ成セル表皮外層ノ部ハ厚キ角質層ヲ有セルモ、一部角質層ヲ欠キ其部小圓形細胞、白血球等細胞浸潤シ、新生血管ヲ伴ヒ血管腔ハ白血球ヲ以テ充ツ猶又組織内白血球ノ浸潤ヲ見ル。増殖セル上皮細胞ヲ見ルニ正常上皮層ノ各層ノ像ヲ共ニ可ナリニ認メシムルモ、主トシテ棘細胞型ノ細胞ノ増殖旺盛ナリ。此ノ細胞層ヲ成セル細胞ハ微細ナル棘ヲ有シ、圓形富稜形又橢圓形ニシテ核ハ可染質ニ乏シク、圓形、橢圓形ニシテ核小體ハ一個或ハ二個存スルモノアリ。此ノ細胞層ニ於テ所謂癌珠ヲ所々ニ形成セリ。該上皮細胞間ニ白血球ノ竄入甚ダ強シ、癌珠中ニモ白血球ノ竄入ヲ見ル、棘細胞型ノ細胞層ノ外層ニハ顆粒層存シ、「クラトヒアリ」顆粒ヲ明ラカニ認ム。此ノ部亦白血球ノ竄入アリ。棘細胞層ノ内方真皮

層ニ相接セル細胞層ハ圓柱形ノ可染質ニ富饒ナル核ヲ有スル基底細胞型ノモノニシテ、此ノ細胞型モ可ナリニ増殖ヲ營ミ、細胞間ニ多核白血球、エオシン嗜好性白血球ノ竄入セルヲ認ム、カ、ル上皮細胞ヨリ成レル胞巢中ニ限局性ニ多核白血球ノ密集セル大小ノ嚢ヲ所々ニ認メ、其ノ白血球集簇部ニテハ少數ナルモ往々角化細胞角質片ヲ混シ猶所々細菌ノ集團ヲ認ムベキ部存ス。白血球ノ集簇益々増スト共ニ胞巢ハ囊狀ニ擴大シ、上皮細胞ハ甚ダシク壓平セラレ、遂ニ一部破壊セラレ。カ、ル變ハ胞巢ノ周圍ニ鞏固ナル結締組織ノ存在セル部ニ於テ顯著ニ認ムル所見ナリ。腫瘍組織ノ間質ハ真皮組織之レナシ、其部小圓形細胞、プラスマ細胞ノ浸淫強ク、血管ノ新生結締組織ノ増殖ヲ伴ヘリ。血管ハ其ノ周圍ニ圓形細胞、プラスマ細胞ノ集簇強ク、且ツ往々管腔ノ變形セルヲ認メ、血管内腫瘍細胞ノ増殖ハ認ムルコトヲ得ズ。腫瘍細胞ハ主トシテ不規則ナル増殖ヲ營メル係少ク、周圍組織ヲ壓迫シ、侵入セリ。腫瘍細胞ニ隣接セル表皮層ニ於テハ著明ナル側性増殖ヲ認ム。肉眼的ニ龜頭表面包皮内板ヲ區別シ得タル尿道口ノ部ハ、上皮細胞ノ増殖強ク其ノ増殖ノ態度及其他ノ組織像ハ腫瘍部ニ於ケルト殆ンド同様ノ所見ニ接セリ、組織的ニモ腫瘍部ト直接相連絡セリ。

「メラニン色素ノ狀態ヲ檢スルニ、腫瘍組織實質細胞内及真皮組織ヨリ成ル間質組織中ニ色素全ク消失セリ。而シテ側性増殖顯著ニシテ其部ノ眞

## 第五例 當病理學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

### 肉眼的所見

陰莖ハ二・五釐ノ部ニテ切斷セラレ、包莖ノ狀ニアラズ。包皮縁ハ一般ニ肥厚セリ。殊ニ背側包皮縁ニ一個右側包皮縁ニ二個、繫帶部ニ一個ノ大ナルハ拇指頭大小ナルハ小豆大ノ腫瘤狀ニ隆起セル部存セリ。此等ノ部ノ表

皮組織ニ炎症變旺盛ナル部ニ上皮細胞内多量ノ「メラニン色素ヲ含有セリ。然レドモ眞皮組織中「メラニン色素ヲ含有セル細胞ハ全ク認ムル事ヲ得ズ。此部ヨリ健康表皮ニ向フニ從テ、上皮細胞中色素ヲ多數ニ存スルモ眞皮中ニハ甚ダ稀ニ色素細胞ヲ認ム。龜頭表面ト包皮内面トノ接觸部ニ於テ龜頭上皮増殖部ト包皮内板上皮増殖部トノ中間ノ部ニ於テ上皮細胞異型ヲ呈セザレニ、可ナリ反應性増殖ヲ來セル部一般ニ上皮細胞中核ノ周圍ニ色素存セズ。然レドモ分枝セル色素細胞ノ上皮細胞間ニ存セルヲ認ム。其ノ色素細胞ハ所謂「クロマトフォール」ト酷似セリ。此部眞皮中ニ唯一ヶ所ニ於テ少數ノ「クロマトフォール」細胞ヲ認ム。

本例ニ於テ核分割像ハ可ナリ多數ニ存ス。母星期、子星期ニ屬スルモノ最多數ヲ占ム。其他多極分割及不相對性分割モ少數ニ認ム。核分割像ハ主トシテ基底細胞層ニ於テ多數ニ認ム。然レモ之レ絕對的ニハアラズ棘細胞層ノ深層ノ部ニ於テモ所々認メラル。直接核分割像ハ棘細胞層ニ於テ認ム。

本例ニ於テハ病變未ダ海綿體ノ部ニ及バズ、尿道上皮ハ多少ノ度ニ於テ増殖ヲ營メリ。尿道腔内所々上皮ノ脱落セルモノ又多核白血球及小圓形細胞ノ集簇ヲ認メシム。尿道周圍真皮組織内小圓形細胞ノ浸潤ヲ証ス。其他陰莖全組織ニ亘テ所々盛基性顆粒ヲ有スル大ナル游走細胞出現セルヲ見ル。

面ハ粗糙ニシテ石樣ニ硬シ、龜頭表面ハ一般ニ粗糙ニシテ凹凸不平ヲ示シ、其ノ凸隆面ハ又石樣ニ硬シ。カ、ル石樣ニ硬キ部ハ茶褐色ヲ呈セリ。陰莖ハ甚ダシク變形ヲ來セリ。肥厚最モ顯著ナル部ヲ通リテ矢狀斷ヲ施シテ、割面ニ於テ檢スルニ、上皮層ノ部ハ僅ニ胞巢狀ノ造構ヲ認メシメ乳嘴狀ニ増殖ヲ營メリ、上述腫瘤狀ニ隆起セシ部ニ上皮索ノ乳嘴狀増殖強クシテ其部

白色ヲ呈シ胞巢狀造構ヲ認メシム、然レドモ増殖ハ未ダ海綿體ノ部ヲ侵襲セズ。

## 顯微鏡の所見

本例ニ於テ主トシテ増殖セル上皮細胞ハ棘細胞型ノ細胞ニシテ、其ノ形態學的所見ハ第二例、第四例ニ記セシモノト甚ダ相似タリ。角化變性、甚ダ強クシテ、一般ニ表皮上層ノ部ニ於テ「エオジン」ニ濃染シ、「ピクリン」酸ニテ強ク深黃色ニ染マレル厚キ角化層ヲ有セリ。該部ハ肉眼のニ茶褐色ヲ呈セシ部ニ一致セリ。基底細胞型ノ細胞モ可ナリノ増殖ヲ營ミ、其ノ細胞ノ配列及形態學的所見モ亦第二例、第四例ト相似シテ著シキ異型ヲ呈セズ。上述ノ如キ上皮細胞ニテ形成セラレタル胞巢ハ主トシテ深部ニ向ヒ増殖セルヨリモ、表面ニ向テ強ク増殖ヲ營ミ、水平面ニ於テ健康表皮ヨリ遙ニ高ク乳嘴狀ニ増殖セリ。表皮層中一部角質層ヲ欠キ、其部壞死狀ヲ呈シ、白血球ノ多數存在セル部存ス。本腫瘍組織ノ間質ハ眞皮層ノ鬆粗結締組織ニシテ新生結締組織新生血管ヲ伴ヘリ。此部ニ於ケル浸潤セル細胞ノ種類ハ亦第四例ト同様ナリ。間質ニ於ケル血管ノ周圍ニハ圓形細胞ノ浸潤顯著ナルモ、壁ノ性狀ニ著變ヲ認メズ、而シテ腫瘍細胞ノ血管内増殖ハ之レヲ認メズ。間質ニ於ケル末梢神經纖維ノ周圍ニ於テモ圓形細胞ノ集簇強ク、纖維周圍ノ結締組織ノ増殖ヲ認メシムルモノ存ス。神經纖維周圍ニ空隙ノ存

## 第六例 當病理學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ二種ノ部ニテ切斷セラル、包莖ノ狀態ニアリ。陰莖皮膚ハ一般ニ灰白色ヲ呈シ平滑ナリ。背側正中線ニ於テ左右兩側ニ亘リ小兒手掌面大ニシテ花椰菜狀ノ表皮凹凸不平ナル多少腫瘍狀ニ隆起セル部存ス。

原著 和田リ陰莖癌ニ就テ

セルモノアリ、間質中ニルツセル氏「フクシン」嗜好性小體ヲ散見ス、腫瘍細胞巢ノ増殖ハヤ、壓迫性ノ態度ヲ示シ、一部ニテハ明ラカニ浸潤性ヲ示セリ。血管周圍ノ淋巴道ヨリ進入セルガ如シ、腫瘍増殖部ニ隣接セル健康表皮ハ著明ナル側性増殖ヲ呈セリ。

本例ニ於テ核分割像ヲ認ムル事甚ダ少シ。之レ材料甚ダ舊キ爲メ見難キニモヨラン。存在セルモノニテハ、母星期及子星期ニ屬スルモノ多數ヲ占ム。異型ノ核分割像ハ認ムル事ヲ得ズ、而シテカ、ル分割像ハ基底細胞層及皮附近ニ主トシテ存在セリ。

「メラニン色素」狀態ヲ觀ルニ、健康上皮細胞中ニ著明ニ「メラニン色素」ヲ含メリ、該部眞皮組織中所謂「クロマトフォール」ハ甚ダ少シ。而シテ側性増殖ヲ呈セル部ニテ上皮細胞中色素可ナリニ存スルモ、其部眞皮組織中「クロマトフォール」ヲ稀ニ証ス。然ルニ他方側性増殖ヲ認ムル部ニ於テ上皮細胞中ニ「メラニン色素」ヲ含有セズ、其部眞皮中「クロマトフォール」モ亦甚少ク存ス。此部ヨリ健康表皮ニ向フニ從ツテ上皮細胞殊ニ基底細胞中「メラニン色素」ヲ多量ニ含有ス。此部眞皮中「クロマトフォール」ハ上皮ノ色素ニ比シテ甚ダ少シ、猶腫瘍細胞増殖セル部、實質細胞中又間質中色素ヲ証セズ。

## 貯藏標本

猶此部ヨリ陰莖先端ニ近ク背側包皮外尿道口ノ部ニ亘リ指頭面大ノ小花椰菜狀ヲ呈スルモ強ク隆起セザル部存ス、此ノ部ハ上述ノ腫瘍部トハ橋梁狀ノ皮膚組織索狀物ニテ境セラル、モ、皮下組織ニテハ互ニ相聯絡セルモノノ如シ。正中線ニ於テ大矢狀斷ヲ施シ、剖面ニ於テ檢スルニ、上皮細胞層ハ乳嘴狀ニ強ク不整ノ増殖ヲ營ミ、陰莖正常ノ像ハ認ムルコト能ハズ、唯

表面粗糙ナ呈セル龜頭ノ一部ト海綿體ノ一部ヲ窺知スルヲ得ルノミ。上皮乳嘴狀増殖ノ像ハ顯著ニシテ、切斷面ノ像ハ唯海綿體ノ一部ヲ除ク他全部組織ハ腫瘍ノ侵ス所トナリ、腫瘍病變部ニ於テハ結締組織ノ走行ヲ明ラカニセシム。

## 顯微鏡的所見

上記剖面ヨリ大組織板ヲ採リ製作セル標本ニシテ、肉眼上腫瘍狀ヲナシ表面ニ稍々隆起セシ部ハ上皮細胞ハ甚ダ旺盛ナル増殖ヲ營ミ、大小ノ胞巢ヲ形成シ、索ハ往々樹枝狀ニ分枝シテ侵入セリ。増殖セル表皮ニ於テハ正常表皮層ニ於ケルガ如ク規則正シキ各層ヲ完全ニ有セズ、唯ダ健康表皮ニ近キ部ニ於テハ各層ノ存在セルヲ認メ得、増殖セル上皮細胞ヲ見ルニ主トシテ棘細胞層及基底細胞層ノ細胞型ヲ有ス、殊ニ棘細胞型ヲ有スル細胞ノ増殖強シ、棘細胞型ノ上皮細胞ニ一致セル腫瘍細胞ノ核ハ圓形或ハ橢圓形ニシテ胞狀ノモノ少ク、可染質ニ乏シク、且淡明ニシテ核小體ハ一個又ハ二個ヲ有ス。基底細胞型ヲ呈セル腫瘍細胞ノ核ハ長橢圓形或ハ紡錘形ニシテ可染質ニ富ミ其配列又一定セズ。核小體ハ多クハ一個ヲ有セリ、然レドモ斯クノ如キ性狀ハ各部ニ於テモ一様ナリト云フベカラズ。本例ニ於テ肉眼のニ陰莖ノ正常像ヲ見ザリシ如ク、組織のニモ亦之レヲ認ムルコトヲ得ズ、唯腹側ノ一部及海綿體ノ一部ニ於テ僅ニ之ヲ認ム。上述ノ如キ性狀ヲ有スル腫瘍細胞ハ胞巢ヲ形成シテ陰莖組織中チ一部周圍ヲ壓迫シツ、一部浸潤性ニ不羈ノ増殖ヲ營メリ。間質ヲ成セルモノハ増殖セル結締組織及鬆粗結締組織ニシテ此部圓形細胞、(プラスマ細胞、多核白血球等ノ浸潤強ク、所ニヨリ強ク集簇セリ。猶此部ニ存在セル血管ノ周圍ニ於ケル炎性ノ細胞浸潤ハ甚ダ強クシテ、或モノニテハ細胞ノ浸淫血管壁ニ及ビ、壁ハ鬆粗トナリ彈力纖維ノミ殘レルモノ存ス、其他筋纖維及結締組織ニ於テモ圓形細胞浸潤ノ爲メ、一部破壞セラレ鬆粗トナル像ヲ認メシム。又間質ニ於ケ

ル大血管ハ其管腔ハ種々ニ變形セリ、又間質ニ於ケル血管ノ周圍ニ結締組織ノ増殖セルモノアリ、神經纖維ノ周圍ニテモ圓形細胞ノ浸潤強ク纖維周圍ノ結締組織ノ増殖セルモノモ認メ得ルモ、纖維束間ノ結締組織ニ著變ヲ認メズ、猶亦纖維ノ彎曲セルモノモ存セリ。

本例ニ於テハ上記諸例ニ於テ認メザリシ巨態細胞多數ニ出現セリ。巨態細胞ハ主トシテ腫瘍細胞集中ニ証スルモ亦間質組織中ニモ所々認ム。間質組織中ニ存在セル巨態細胞ノ形ハ主トシテ不正形ニシテ、核ノ性狀ニヨリテ結核電中ニテ見ル巨態細胞ト殆ンド同様ノ像ヲ呈セリ、其ノ核ハ圓形或ハ橢圓形、淡明ニシテ細胞ノ極ニ數個集リ多クハ核小體ヲ認ム。胞體ハ「エオジン」ニ淡染セリ。又或者ハ核ノ性狀ヲ明ラカニセズ、細胞ノ一極ニ核ハ密集セリ。カ、ル巨態細胞ハ一個ツ、存在セズ、一個、三個相集リテ存在セリ。腫瘍細胞索中ニ存在セル巨態細胞ハ索ノ中心ニ近キ部或ハ索ノ周邊部ニ認ム。其ノ多クハ周圍腫瘍細胞トノ境界銳利ニシテ、境界部ニ常ニ僅少ノ空隙ヲ存シ、其部ニ白血球點在セリ。其ノ巨態細胞ノ形ハ主トシテ圓形ニシテ橢圓形ノモノ稀ニ存ス。又突起ヲ有セル不正形ノモノ存ス。大サハ種々ニシテ一定セズ、胞體ハ「エオジン」ニ淡染セリ。核ハ多クハ圓形橢圓形淡明ニシテ核小體ヲ認メ得、核ノ數ハ數個ヨリ、多キハ數十個ヲ藏ス。主トシテ胞體ノ周邊部ニ位セリ。然レドモ或モノニテハ胞體內彌漫性ニ密在セズ。又胞體內空隙ヲ入ル、モノ、多核白血球ヲ包有セルモノアリ。注意スベキハ巨態細胞ガ角質部癌珠ニ接近シテ多數存在セルニアリ。腫瘍實質組織内ニ存セル巨態細胞ノ核ハ形態學的ニ腫瘍細胞ノ核ト相異ナレリ。

本例ニ於ケル腫瘍細胞ノ角化傾向ハ可ナリ旺盛ニシテ、所々大小種々ノ癌珠ヲ形成セリ。角化傾向ハ内板ノ部ニ於テ殊ニ顯著ナリ、而シテ癌珠ノ周圍ニ於テ巨態細胞出現セリ。腫瘍細胞胞巢内細胞間ニ多核白血球ノ侵入

ナ可ナリ強ク認メ、或胞巢ニ於テハ胞巢中心部ニ白血球ノ集簇ヲ來シ、此集簇ノ擴大ト共ニ胞巢ハ囊狀ニ擴マリ、遂ニ一部破壊スルニ至ル。其ノ白血球ノ集簇中ニ腫瘍細胞ノ核ノ破片角化細胞角質片ヲ混在セリ。

核分割像ハ腫瘍細胞増殖ノ旺盛ナルニカ、ララズ少シ。其ノ中、母星期及子星期ノモノ多數ヲ占ム。其他不規則ナル分割像モ少數ニ認メシム。直接分割モ亦認メ得、而シテ核分割像ノ多數ニ存在セルハ基底細胞層及此レニ近キ部ナリ。

海綿體ノ部ニ於ケル腫瘍細胞索ハ不羈ノ増殖ヲ營マズ。他部ニ比シテ可ナリ整然タリ。即増殖ハ著シク浸潤性ニハ非ズシテ周圍ヲ壓迫シツ、進入

## 臨床的關係

不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ二種ノ部ニテ切斷セラル、皺襞著明ナル包皮ハ龜頭ノ大部分ヲ包メリ。露出セル龜頭表面ハ又強キ皺襞ヲ示シ、稍粗糙ナリ。左右兩側冠狀溝ニ一致シテ左右一個ノ腫瘍狀物ヲ存セリ。左側ニ存スルモノハ大豆大ニシテ、周圍ヨリ割合ニ限局セリ。左側ニ生ジタルモノハ外方包皮外板ノ部ヲ侵蝕セズ、龜頭組織深部ニ向テ侵入増殖セルモ、限局セル像ヲ示セリ。上述右側ノ大ナル限局セル腫瘍狀物ヲ通り割ヲ施シ、剖面ニ於テ檢スルニ結節狀腫瘍部ノ表面ハ粗糙ニシテ小凹凸ヲ示シ不平ナリ。此部ハ實割合ニ實シ周圍ノ鬆粗組織ヨリ稍々銳利ニ限局セリ、腫瘍狀部ハ剖面ニ於テ粗糙ニシテ實質ト色異ナリタル纖維狀物ノ走行ヲ認ム、又小ナル管腔ヲ散見ス。

## 顯微鏡の所見

本腫瘍ノ實質細胞ハ主トシテ正常上皮ニ於ケル棘細胞層及ビ基底細胞層

## 第七例 當病理學教室貯藏標本

セルモ、其ノ度旺盛ナリト云フ可カラズ。此部腫瘍細胞ニ相接セル間質組織中ニハ圓形細胞ノ浸潤ヲ伴ヒ強剛ナル締縮結束及彈力纖維ハ最後迄遺殘セルモ此レトテモ遂ニハ侵蝕セラルニ至ル。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中ニハ色素ハ間質實質共ニ消失セリ。然レモ本例ニ於テハ健康表皮境界部ニ於テ上皮細胞増殖顯著ナル部ノ上皮基底細胞中ニ色素含有セリ。

猶健康上皮層ニ於テモ基底細胞中ニ色素存ス、而シテ此等ノ部ニ相等セル真皮内既ニ炎症像ヲ呈セル部ニ色素細胞存在セリ。

## 細胞型

ノ細胞型ヲ有ス、カク兩層ノ細胞型ヲ有スルモ殊ニ棘細胞層ノ上皮細胞型ノ細胞多シ。該細胞ノ核ハ圓形或ハ橢圓形又ハ長橢圓形ニシテ可染質ニ乏シク、其ノ中ノ或モノハ、核膜ハ殊ニ強ク「ヘマトキシリン」ニ濃染シ周圍ト銳利ニ境界セラル、此ノ如キ細胞ハ胞巢ノ中央部角化傾向ヲ有スル部ニ認ム。核小體ハ認メ得ザルモノ存スルモ多クハ二個又ハ三個存ス。核ノ崩壞シ顆粒狀ヲ呈スルモノヲモ認メシム。細胞ハ細棘ハ判然タルモノ少キモ、カスカニ之レヲ認メ得ルモノ存ス。上述基底細胞型ニ一致セル細胞ノ核ハ圓形或ハ橢圓形或ハ紡錘形ニシテ可染質ハ前者ニ比シテ富饒ナルモ、諸例ニ於テ記載セシ該細胞型ノモノニ比スレバ甚ダ少シ、核小體ハ二個又ハ三個ヲ有ス。

斯ノ如ク主トシテ上述二種型ノ上皮細胞ヨリ形成セラレタル實質細胞ハ胞巢ヲナシテ真皮内及ビ深部組織内ニ甚ダ不羈ノ増殖ヲナス、然レドモ外方ニ向テハ増殖旺盛ナラズ、カ、ル胞巢ノ大小ハ種々ニシテ大ナルハ周圍ヲ壓迫シツ、増殖ヲ營ミ、小ナルハ浸潤性ニ鬆粗締縮組織内ニ進メリ。間質

チナセル組織ハ鬆結締組織ニシテ其ノ間ニ各例ニ記載セシ如キ炎性ノ圓形細胞ノ浸潤ヲ伴ヘリ。猶所々圓形細胞集積ヲ認ム、圓形細胞ノ浸潤強キ間質組織中ニハ淡明ニシテ圓形又ハ橢圓形ノ核ヲ數個有シ、周圍組織ヨリ割合ニ境セラレタル二、三個ノ不正形ノ巨細胞ヲ認ム。核ノ位置ハ主トシテ胞體ノ周邊部ニ集セルモ、亦彌蔓性ニ存セルアリ。間質及ビ周邊部ニ於ケル血管ハ大小共ニ其腔ハ種々ノ形ヲ現セリ。此等血管ノ周圍ニハ殊ニ圓形細胞ノ浸潤強ク且ツ血管壁ニハ往々結締組織ノ增生ヲ伴ヘルアリ。間質ニ於ケル神經纖維ニハ周圍ノ結締組織又ハ束間結締組織ノ增生ヲ認ムルコトナ得ズ、腫瘍細胞ニ圍繞セフレタル神經纖維ハ鞘内ニ間隙ヲ認メ、東ハ一般ニ鬆粗トナレルアリ、腫瘍細胞増殖ノ周邊部間質組織ニアリテハ腫瘍細胞増殖ノ爲メ其部ノ鞏剛ナル各纖維ハ壓縮セラレ、所ニヨリテハ結締組織ノ新生ヲ伴ヒ、全般ノ像ヨリ觀レバ割合ニ限局セリ。然レドモ局所ニ於ケル増殖ノ像ハ甚ダ不整ニシテ各上皮細胞案ハ其ノ尖端ヲ組織間隙ニ突入セシメテ

## 第八例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

### 臨床的關係 不詳。

陰莖ハ有毛部皮膚ノ一部ト共ニ根部ヨリ切斷セラレ、包莖ノ狀ニアリ。

包皮皮膚ハ帶紫灰色ヲ呈ス、龜頭ハ之レヲ認ムル事ヲ得ズ。左側ヨリ腹側ニ亘リ根部ニ及ベル小兒手掌面大ノ物質欠損ヲ存シ、包莖ノ狀ニアル包皮ハ爲メニ右外側ニ壓排セラレテ存ス。物質欠損部ノ周圍ノ境ハ一部深く掘鑿シ、一汎ニ灰白色ヲ呈シテ肥厚セリ。包皮皮膚ハ灰白色ヲ呈シテ腫脹セリ。物質欠損部ハ其ノ面凹凸不平ニシテ底ニ海綿體組織ヲ明ラカニ認メシム、凸隆セル部ノ表面ハ灰白色ヲ呈シ、上皮層ハ強ク乳嘴狀ヲ呈シテ増殖セリ、凹陷セル部ハ其ノ面甚ダシク粗糙ニシテ帶黃灰白色ヲ呈シ、所々

旺盛ナル増殖ヲナセルモ、一度強固ナル纖維束及ビ血管等ニ對スル時ハ幾分其方向ヲ變ジ、其ノ周圍ノ鬆粗ナル部ニ増殖進入シ、圓形細胞ノ浸潤ト相待テ強固ナル物質ヲ包圍シ遂ニハ此レヲ侵蝕シ、増殖ヲ逞シクスル觀ヲ呈セルモ、概シテ強固ナル纖維遺殘セリ。血管内腫瘍細胞ノ増殖ヲ認メシメズ、腫瘍増殖部ニ隣接セル健康表皮ニテハ著明ナル側性増殖ヲ認ム。本例ニ於テ核分割像ハ比較的多數ニ認メ、母星期ノ子星期ノモノノ多數ニシテ、猶準備期ノ中密縫期ニ屬セシム可キモノモ可ナリ存セリ、其他多極分割像及ビ不相對性分割像ヲ稀ニ認ム、紡錘像顯著ナルモノアリ、カ、ル核分割像ハ絶對的ニ非ザルモ主トシテ基底胞型ノ細胞ニ殊ニ多數存セリ。「メラニン色素ノ狀態ヲ檢スルニ、腫瘍細胞増殖盛ナル部ニ真皮、表皮兩層ニ該色素消失セリ、腫瘍病變部ニ接近セル真皮、表皮中ニ色素ヲ認メズ亦健康部ニ於ケル真皮、表皮兩層ニモ同様ニ色素存在セズ。

### 白色ノ察片ヲ附着セリ、猶所ニヨリテハ斑狀ニ褐色ヲ呈スル部アリ、物質欠損部ヲ通り横ニ割テ施シ、剖面ニ於テ檢スルニ壓排セラレタル包皮ノ面ハ濕ヒ水腫狀ヲ呈セリ。上述物質欠損部ニ於ケル凸隆セル部ハ其ノ剖面ニ於テ明ラカニ海綿體組織ニシテ龜頭ニ一致セル部ナリ、中央部ハ多少凹陷シ其部ニ於テ深部組織ニ向ヒ乳嘴狀ニ増殖セル像ヲ呈セリ。龜頭部組織内明ラカニ、斑狀ノ褐色ヲ呈セル部ヲ認ム。上記掘鑿ヲ示セル部ハ其ノ面粗糙ニシテ脆ロキ淡黃色ノ物質ヲ附着セリ。其ノ部ヨリ包皮組織ニ及ビテ乳嘴狀ニ増殖セル白色素ノ走行ヲ明ラカニ認メシム。

### 顯微鏡の所見

上述龜頭ニ一致セル部ノ白色素ノ走行ヲ明ラカニシ、肉眼の乳嘴狀ニ増



殖セル部ニ於テハ上皮細胞層ハ各層共可ナリ其ノ増殖ヲ示シ素チ形成シテ組織深部ニ侵入セリ。就中角化層及棘細胞層ハ強度ノ増殖ヲ營メリ。基底層ニ於ケル上皮細胞モ所々増殖ヲナセルモ顯著ナラズ、角化層ハ一般ニ「エオジン」ニ濃染シ不正形ノ細胞ヨリナリ、核ハ可染質ニ乏シク圓形或ハ橢圓形或ハ紡錘形ニシテ一定セズ。而シテ所々角化細胞ノ離脱セルモノヲ散見ス。顆粒層ニアリテハ明チカニ核ノ周圍ニ「ヘマトキシリン」ニ濃染セル大小ノ顆粒ヲ多ク含メリ。此レ「ケラトヒアリン」顆粒ニ相當セルモノナルベシ。此ノ如キ角化層ハ棘細胞層ト共ニ胞巢中心部ニ於テ所謂癌珠ヲ形成セリ、本例ニ於テハ癌珠ハ可ナリ多數ナリ。増殖甚ダ強キ棘細胞型ノ細胞ハ多クハ其ノ形圓形或ハ橢圓形又ハ富稜形ニシテ、明チカニ細胞間橋ヲ認ム、胞巢ノ中心部ニ於ケル該細胞ハ原形質ノ量ヲ増シ爲メニ細胞ハ一般ニ大ナリ。核ハ可染質ニ乏シク圓形或ハ橢圓形ニシテ概シテ小ニシテ淡明ナリ、所々空胞變性ヲ來セルモノ存ス。核小體ハ一個或ハ二個ヲ有シ、稀ニ三個ヲ有スルモノ存セリ。基底細胞型ヲ呈セル細胞ハ紡錘形又ハ圓柱狀ニシテ扁平トナレルモノ亦存ス。核ハ橢圓形或ハ紡錘形ニシテ可染質ニ富ミ、一般ニ小ナリ。核小體モ主トシテ一個又ハ二個存セリ。本例ニ於テ間質ヲ成セル組織ハ鬆粗結締組織ニシテ、此部ニ多核多形核白血球「エオジン」嗜好性細胞「プラスマ」細胞其他小圓形細胞ノ浸潤アリ。且結締組織ノ増生強ク新生血管及既存血管ハ一般ニ強く充盈セリ、血管ノ周圍ノ結締組織ハ著明ニ非ザルモ多少ノ度ニ於テ増殖セルモノ存セリ。然レドモ腫瘍細胞胞巢ノ互ニ相接近セル間質ニ於テハ圓形細胞ノ浸潤ハ粗ナリ。上述炎症性ノ細胞浸淫ハ本例ニ於テ甚ダ強く、腫瘍細胞ノ侵襲無キ陰莖深部組織ニ彌蔓性ニ及ベリ。就中間質中ノ血管、神經纖維ノ周圍ニハカ、炎症性細胞ノ強度ノ集積ヲ見ル。而シテ細胞浸潤中ニ變基性顆粒ヲ有スル肥胖細胞混在セリ。

肉眼のニ物質欠損部ニ於テ表面ニ白色纖維ノ走行明チカナザル部ハ増

殖セル上皮細胞巢ハ其形ヲ亂サレ所ニヨリテハ全ク物質欠損シテ胞巢ノ痕跡ヲ止メズ。此レニ代ルニ多核多形核白血球ノ浸潤強キ肉芽性變旺盛ニシテ結締組織ノ新生及新生血管ヲ伴ヒ所々赤白血球ノ組織内溢出ヲ見ル、カ、ル部ノ表面ニ「ヘマトキシリン」ニ濃染セル微生物ノ集簇ト認ムベキ部所々存セリ。其他物質欠損部周邊部ノ掘鑿ヲ示セル部モ畧ボ同様ノ狀ヲ呈シ、一部ニ於テ上皮細胞巢形成ノ像ヲ認ム、此部肉芽性變甚ダ顯著ナリ。

肉眼のニ包皮組織腫脹シ水腫狀ヲ呈セル部ハ組織一般ニ鬆粗ニシテ、所々空腔存セリ。此部圓形細胞「プラスマ」細胞等ノ炎症性ノ細胞浸潤アリ、血管、腺、神經纖維等ノ周圍ニ於テ強ク集簇ヲ示セリ。カ、ル炎症變ノ中ニ所々肥胖細胞ヲ散見ス。

本例ニ於ケル核分割像ハ腫瘍細胞増殖強キ部ニ可ナリ多數ニ認ム。時期のニハ子星期ノモノ母星期ノモノ最多數ニシテ、稀ニハ準備期ニ屬スルモノモ存ス。異型の核分割像ハ甚ダ少數ナリ。部位的關係ヲ檢スルニ主トシテ基底細胞及其ノ附近ノ上皮細胞ニ多シ。上皮細胞増殖ノ態度ヲ見ルニ一汎ニ周圍組織ヲ壓迫シツ、侵入セリ、健康上皮トノ隣接部ニテハ肉芽性變旺盛ノ爲メ相互間ノ態度ヲ明チカニセズ、此部上皮細胞巢ヲ始メ認メズ一方肉芽性變旺盛ナラザル健康上皮ニハ側性増殖ノ像ヲ認ム。

「メラニン色素」狀ヲ觀ルニ、上皮細胞増殖強ク既ニ異型ヲ呈セル部ニ於テ真皮上皮兩層ニ該色素ヲ認メズ、而シ此部ノ真皮層ニ少數ノ鉄反應陰性ナル褐色色素ヲ認ム。腫瘍細胞増殖部ニ隣接セル部ニハ兩層ニ色素ヲ有セズ此ノ部ヨリ少シ正常表皮ニ接近シ猶表皮多少ノ増殖ヲ示セル部ノ真皮層ニ色素細胞ヲ認メズ、此部ニ相當セル上皮層ニ於テ基底細胞間ニ突起ヲ有セル分枝セル色素細胞多數ニ存スカ、ル細胞ハ明チカニ一枝チ真皮層ニ出セルモノ存ス、而シテ健康表皮ニアリテハ、主トシテ基底細胞核ノ周圍ニ「メラニン色素」ヲ有セリ、又角化層ニ近キ棘細胞層ノ細胞中核ノ周圍亦色素

チ有セリ、核ノ中ニ有スルモノアリ。其他上皮細胞間ニ分枝セル色素細胞モ存セリ。此部ニ相當セル真皮層中ニモ突起チ有セルモノ又塊狀チナセル色素細胞存在セリ。

## 第九例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

### 臨床的關係 不詳。 肉眼の所見

陰莖ハ包莖ノ狀ニ非ズ。包皮ハ冠狀溝ノ部ニ於テ後方ニ退縮セリ。陰莖ハ一般ニ大ニシテ包皮ハ腫脹セリ。正中線ヨリ右ニ背側ヨリ繫帶ノ部ニ亘リ冠狀溝ニ一致シテ物質欠損部存ス。其ノ底及壁ノ色ハ灰白色ヲ呈シ一部白色ニシテ凹凸不平ナリ。底ニ於テ深ク掘鑿チ示セリ。該物質欠損部ノ包皮縁ハ一般ニ高ク土堤狀ニ隆起セリ。其ノ面又凹凸不平ナリ。龜頭ハ表面粗糙ニシテ帶黃灰白色ヲ呈シ、硬度殆ンド石樣ナリ。龜頭部ノ上述物質欠損縁モ亦強ク一部土堤狀ニ隆マリ、其ノ部ニ乳白色ノ絮片チ附着セリ。龜頭背側部ノ冠狀溝ニ近キ部ハ、線狀ノ褐色色素ヲ認ム、物質欠損部チ通リ縱斷シテ檢スルニ、包皮組織ハ一汎ニ濕ヒ水腫狀ヲ呈セリ。物質欠損部ハ深ク掘鑿シ、其面甚ダ粗糙ニシテ灰白色ノ脆キ物質チ附セリ。龜頭表皮層ハ全汎ニ亘リテ増殖チ營ミ、白色ヲ呈シテ乳嘴狀ノ造構チ明ラカニ認メシム。其ノ外縁(物質欠損縁)ハ淡紅灰白色ノ石樣ニ硬キ物質ニテ覆ハル、龜頭先端ノ深部組織ハ一汎ニ彌蔓性ニ黑褐色ノ色素沈着チ示セリ、此部ニ於テ組織中ニ多數ノ小孔チ認ム。

### 顯微鏡的所見

上述冠狀溝物質欠損部ニ於テハ上皮細胞ハ一汎ニ核ノ染色性チ失ヒ、壞死ノ像チ示シ其部ニ於テ多核白血球ノ強キ浸潤チ認ム、一方ハ龜頭深部組織ニ一方ハ陰莖根部ニ向ヒ増殖旺盛ナル腫瘍細胞ハ胞巢チ形成シ、或ハ不

上述セシ水腫狀ヲ呈セシ包皮部ニ於テ上皮増殖チ認メザル部真皮表皮兩層ニ多數ノ「メラニン」色素存在セリ。

### 規則ニ組織中チ浸潤性ニ進入セリ。

腫瘍チ形成セル細胞ハ其ノ形圓形或ハ橢圓形或ハ不正形ニシテ、上皮細胞層中ノ何所ノ上皮細胞型ニ屬セシム可キカ判定スル事チ得ズ。核ハ一汎ニ胞狀ニシテ、可染質ニ富饒ナリ。核小體ハ一個又ハ二個チ存スルモノ多ク、稀ニハ三個又四個チ有スルモノ存ス。亦核ノ顆粒狀ヲ呈スルモノアリ、其他細胞ノ空胞變性チ呈スルモノ、角化變性チ呈スルモノ多數ニ存ス。角化變性ハ甚ダ強クシテ、増殖旺盛ナル腫瘍細胞群中ニ大小ノ所謂癌珠チ多數ニ認メシム。癌珠ノ中ニハ多核白血球ノ竄入強シ。上述龜頭表面ノ石樣ニ硬キ部ハ其ノ表層ニ於テ角化變性セル厚キ細胞層ニテ覆ハル。其部ノ上皮細胞索ハ可ナリ増殖セルモノ、未ダ不羈ノ増殖チ示サズ。上皮細胞増殖ノ不規則ニシテ旺盛ナル冠狀溝ノ部ニ於ケル間質ハ一汎ニ少クシテ薄弱ナル纖維性ノ結締組織ヨリ成ル。其部所々斷裂セル彈力纖維ノ遺殘セルヲ認メシム。猶間質組織中所ニヨリテハ結締組織ノ新生チ認ムルモノ、概シテ紡錘形結締組織細胞及圓形ノ炎性ノ細胞ノ浸潤ハ弱シ。又間質中新生血管チ可ナリニ認ム。未ダ腫瘍細胞ノ侵襲チ受ケザル血管主トシテ動脈管ニ於テ中膜ニ空胞チ認メシメ、爲メニ壁ノ肥厚ノ觀チ呈セル部存ス。而シテ血管ハ腫瘍細胞ノ迫レル爲メニ壓迫セラレ、其ノ形チ變シ、又漿液性、細胞性浸潤ニヨリ血管壁ノ鬆粗トナレルアリ。或ハ腫瘍細胞浸潤性ニ血管壁ヲ透シテ侵入シ、血管内増殖チ營メリ。腫瘍細胞ノ神經纖維ニ對スル態度ヲ窺フニ、神經纖維ハ甚ダ鞏固ニシテ最後迄殘レルモノ一度腫瘍細胞ノ神經纖維ニ迫マルヤ先ヅ纖維索チ圍繞シテ増殖シ、遂ニ侵

蝕スルニ至ル。未ダ侵蝕ヲ受ケザル神經纖維ノ周圍ニ結締組織ノ増生セルアリ、又束間結締組織モ一部増生ヲ認メシムモノ存ス。纖維ノ周圍ニハ空隙存セリ。腫瘍細胞ノ侵襲ヲ受ケタルモノニアリテハ、動脈管ノ如ク腫瘍細胞増殖ノ爲メニ壓迫セラレ變性セルガ如キ像ヲ認メズ。此ノ時纖維ノ主トシテ其ノ周圍ニ小圓形細胞ノ輕度ノ浸潤ヲ認ム。又周圍ノ結締組織ハ萎縮ニ陥レルモノ又一部増生セルモノアリ。猶纖維索周圍ニ空隙ヲ存ス、侵蝕ヲ遅クセル腫瘍細胞ノ進路ハ一定セズ、周圍ヨリ無遠慮ニ破壊ノ亂入セルアリ、又確ニ各纖維束間ニ進路ヲトリテ腫瘍細胞ハ個々又ハ連續シテ線狀ヲナシテ進入セルアリ。又各神經纖維ハ概シテ彎曲ノ狀ヲ呈セリ。髓鞘染色法ヲナシテ檢スルニ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ受ケザル部ノ神經纖維ノ髓鞘ハ漏斗ノ造構配列規則正シク其ノ網狀ノ像ヲ明ラカニ認メシム、既ニ侵蝕セラレタルモノニテハ漏斗ノ配列甚ダシク不規則ニシテ、網狀像ヲ認ムル事ヲ得ズ。又髓鞘ハ竹節狀ヲ呈シ相斷裂セルモノアリ、亦髓鞘ハ顆粒狀トナリタルモノガ線狀トナリ或ハ斷裂セル像ヲ呈スルモノモ存ス。

本腫瘍細胞ノ増殖及ビ周圍組織ノ態度ヲ觀ルニ、腫瘍細胞ハ多クハ小ナル索狀胞集ヲ形成シテ周圍組織間隙及ビ淋巴道ヲ通リテ浸潤性ニ進入セリ。又或ハ腫瘍細胞ハ單獨ニ又線狀ヲナシテ淋巴間隙ヲ通リテ進入セリ。血管及神經纖維等ニ對シテハ血管ヲ壓迫シ又血管壁ヲ浸潤性ニ侵蝕シ遂ニ血管内増殖ヲ營メルモノアリ。神經纖維ニ對シテハ先此レヲ圍繞シ鞘内ニ進入シ、増殖ヲナシテ遂ニハ全ク侵蝕スルニ至ル。腫瘍組織ノ周邊部ニ於ケル間質組織ニテハ結締組織ノ増殖ヲ伴ヒ、小圓形細胞、プラスマ細胞多核白血球、エオジン嗜好性細胞ノ浸淫ヲ現セリ。冠狀溝ニ接セル包皮縁ニ於テハ上皮細胞ハ可ナリ強ク索狀ヲ形成シテ増殖ヲ營ミ、其ノ主ナルモノハ棘細胞型ノモノナリ而シテ索ノ中心部ニ於テ明ラカニ痘珠ヲ形成セリ。此部周圍ノ間質組織中ニハ上記セシ如キ炎症性細胞浸潤強度ナリ。此ノ部増

殖セル上皮層ニ隣接セル上皮細胞層ハ欠損シ之レニ代ルニ肉芽性變旺盛ニシテ、其ノ中ニ不規則ノ形ヲ呈セル巨細胞大小共三個ヲ認ム其ノ胞體ハ「エオジン」ニ濃染セリ、核ハ小ニシテ紡錘形長橢圓形ヲ示シ可染質ニ甚富饒ニシテ胞體ノ周邊部ニ集在シ又胞體內彌蔓性ニ存在セリ。核ノ數ハ大ナル巨細胞ニテハ二十個ヲ藏シ小ナルモノニテハ十個ヲ有ス。カ、ル巨細胞ハ綿ノ如キ異物ニ甚ダ相接着シテ存シ、之レヲ貪食セリ。

本例ニ於テ聊カ興味ヲ感ズルハ上述擣襲強キ冠狀溝ノ部ニ於テ上皮細胞ノ増殖旺盛ニシテ真皮組織中ニ深ク進ミテ龜頭上上皮部ニ破レ出ントセル部ノ相方ノ態度ナリトス。カ、ル時腫瘍細胞群ハ龜頭上皮膚索ニ接シ概シテ兩方上皮細胞群ノ間ニハ炎症性細胞強ク集在シテ境セラレ、モ、一部ニ於テ腫瘍細胞ハ上皮細胞索中ニ亂入セリ、カ、ル部ニ於テ腫瘍細胞ト龜頭上上皮細胞トノ間ニハ核ノ形、其ノ他細胞ノ所見ヨリシテ明ラカニ區別シ得、即チ同性傳染ヲ承認スベキガ如キ像ヲ認ムルコトヲ得ズ。此部ノ龜頭上上皮細胞層ハ他ノ龜頭上上皮細胞層ニ比シテ強ク反應性増殖ヲ營メルモ、下方深部ヨリ壓迫セラレ被動的ノ位置ニアリ、猶此ノ部ノ角化傾向ハ他ノ部ニ比シテ顯著ニシテ上皮細胞中間質組織中「メラニン」色素ヲ認メズ、而シテ該標本中該腫瘍細胞群ヨリ離隔セル真皮組織中ニ一群ノ腫瘍細胞電ヲ認ム。此ノ部ヨリ連續切片ヲ製作シ精査スルニ番號ノ増スニ從ツテ腫瘍細胞電ハ擴大シ正常上皮層ノ反應性増殖ヲ呈セル部ニ破壞ノ二進入シ、遂ニハ外方ニ破出セルヲ認メシム。カ、ル部ニ於ケル腫瘍細胞ト反應性増殖アル上皮細胞トノ間ニハ判然タル境界存セリ。此ノ境界部ニ於テ一ヶ所上皮細胞ノ排列セル部ニ唯一個ノ腫瘍細胞ニ類似セル細胞存セリ、之レヲ連續切片ニテ檢スルニ此ノ切片ヨリ少キ番號ノ切片ニ於テハ該細胞ニ一致セルモノハ直接核分割像ヲ呈セリ、次ノ少キ番號ノ切片ニテハ正常上皮細胞ナリ、此レヨリ考フルニカ、ル像ハ腫瘍細胞ガ上皮細胞間ニ進入セシモノナラン。該

部ノ上皮細胞中「メラニン色素ヲ認メズ、猶此ノ間質ニハ小圓形細胞ノ浸潤強ク結締組織ノ増生ヲ伴ヒ、上皮細胞層中白血球ノ竄入ヲ見ル。是ヲ以テ之レヲ觀ルニ該腫瘍細胞群ハ上述深部ヨリ進入シ來レル腫瘍細胞群ト、相連續セルヤ否ヤ連續切片ニテハ追及シ得ザリシモ、腫瘍細胞ノ形態、増殖ノ態度ヨリシテ、相連續セルモノト思考シ得。

本例ニ於テハ核分割像ヲ多數ニ認メシム、主トシテ母星期ニ屬スルモノ多數ニシテ次テ子星期ノモノ多シ、三極性分割像モ少數ニ認ム、其ノ部位的關係ニ就テ檢スルニ腫瘍細胞ノ増殖不規則ニシテ明記スルヲ得ザレドモ胞巢ノ規則正シキ部ニテハ主トシテ基底細胞ニ多數ヲ認メ又棘細胞ニモ可

## 第十例 當病理學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

肉眼の所見

陰莖ハ包莖ノ狀ヲ呈セズ一汎ニ灰白色ヲ呈シ、包皮及陰莖根部ノ皮膚ハ上皮層乳嘴狀増殖ノ觀ヲ呈シテ其面甚ダ凹凸不平ナリ。正常陰莖ノ狀ヲ示セル部ノ右側ニ於テ右外方ニ突出セル正常陰莖ト殆ンド同大ノ包莖ノ狀ヲ示セル陰莖ノ如キ組織塊ヲ認メシム、其ノ先端部及ビ其ノ附近ハ表面甚ダ平滑ナリ。突出セル組織塊ノ根部ニ近ヅクニ從ツテ其ノ面ハ上皮ノ乳嘴樣増殖ヲ營ミテ亦凹凸不平ナリ肉眼のニ其ノ組織塊ノ何タルヲ窺フ事ヲ得ズ然シテ硬度一般ニ軟ナリ、陰莖ノ龜頭面ハ一部灰白色ノ部ヲ殘シテ他ハ全部灰白黃色ヲ呈シ、其部稍々表面ヨリ隆起シテ粗糙ナリ。冠狀溝及外尿道口ハ之レヲ窺フコトヲ得ズ、上述乳嘴狀ニ増殖ヲ營メル部ト龜頭表面トハ銳利ニ境界ヲ存セズ、蓋シ包莖ノ狀ニアリシ陰莖ガ其ノ龜頭表面及ビ包皮内板ノ上皮増殖強クシテ外方ニ破レ、龜頭部ハ外方ニ突出シ爲メニ包莖ノ狀ニアリシ包皮ハ組織塊トシテ右外方ニ翻轉シタルナラン。

ナリニ存セリ。直接核分割像ハ屢々見ル所見ニシテ、棘細胞ノ上層ノ細胞中又角化細胞中ニ認ム。

「メラニン色素ノ狀態ヲ觀ルニ、腫瘍組織中側性増殖ヲ呈セル部及龜頭上皮反應性増殖ヲ示セル部ノ眞皮上皮兩層ニ該色素ヲ欠ク、側性増殖部ノ正常上皮ニ近キ部ニ於テハ上皮細胞索ノ尖端ノ部上皮細胞核ノ周圍ニ色素ヲ認ム、此部ニ相當セル眞皮中色素細胞存セズ、猶肉眼のニ灰白色ヲ呈セル包皮縁ノ部ニ於テハ少シハ減少セルモ猶多量ノ色素ヲ上皮細胞中ニ存セリ、此部ニ相當セル眞皮中ニハ色素細胞無シ、又其他ノ正常上皮ニ於テモ上皮細胞中多量ノ色素ヲ含有セルモ眞皮中色素細胞ヲ認メズ。

龜頭部ニ於テ正中線ニ於テ大矢狀斷ヲ施セリ、割面ニ於テ海綿體白膜ハ分明ニ認メラル、上皮層ノ乳嘴狀増殖ノ像ハ顯著ナルモ、白膜ハ未ダ侵襲セラレズ。

顯微鏡の所見

上述外方ニ突出セル龜頭表面ニ於テハ上皮細胞ハ強キ増殖ヲ營ミ、索狀胞巢ヲ形成シテ深部組織内ニ侵入セリ。而シテ此等上皮細胞ノ型ハ主トシテ正常上皮ニテ見ル各層ノ上皮細胞ノ型ヲ具フ、就中増殖強キハ前諸例ニテ常ニ記載セシ如キ性狀形態ヲ有スル棘細胞型ノモノナリ、核小體ハ多クハ二個又ハ三個以上存セリ。角化傾向強クシテ所謂痙攣珠ヲ認ム、腫瘍組織ノ間質ヲ成セル組織ハ炎症性變ヲ示セル鬆粗ナル組織ニシテ可ナリ多數ノ新生血管ヲ伴ヒ、血管ハ多クハ充盈セリ。血管ノ周圍ニ細胞ノ浸潤顯著ニシテ血管壁ニ多少結締組織ノ増生ヲ認ムルモノアリ。猶間質ニ於テ結締組織ノ新生強ク、炎症細胞中ノ「プラスマ細胞甚ダ多數ニ浸潤シ、殊ニ血管及神經纖維周圍ニ著明ナリ、神經纖維自己ニハ著變ヲ認メズ。間質中少數ナル

モ巨細胞ヲ認ム、其ノ核ハ圓形或ハ橢圓形、淡明ニシテ主トシテ胞體ノ中央部ニ集在セリ。其他間質組織中ニテルツセル氏「フクシン」嗜好小體ト認ム可キモノナ一部ハ細胞中ニ一部ハ其外ニ認ム。間質ニ於ケル肉芽性變ハ深部ニ及ビ海綿體ノ部ニ於テモ強シ、又胞巢ニ近ク間質部肉芽性變著明ナル部ニ(切片中)三個ノ小ナル巨細胞存セリ、其ノ中大ナル一個ハ破壞セラレタル胞巢ニ接近シテ存セリ。猶亦數個ノ巨細胞ガ一個ノ角質物ヲ圍繞シテ存セリ、之レ等細胞ノ核ハ淡明ニシテ核性狀ヲ認メ得、核ノ數ハ十個又十數個ニシテ胞體内ニ彌蔓性ニ集在シ、核ノ性狀ヨリシテ淋巴球、結締細胞、(「プラスマ」細胞、白血球及上皮細胞ト明ラカニ區別シ得テ、組織中ニ出現セル組織球性細胞ニ甚ダ類似セリ。

腫瘍細胞ノ増殖ノ態度ヲ觀ルニ、大小種々ノ腫瘍細胞素ハ大ナルモノハ周圍ヲ壓迫シツ、進入シ小ナルモノハ浸潤性ニ侵入セリ、血管ハ爲メニ壓迫セラレ其形ヲ變ジ、然レドモ血管内増殖ハ之レヲ認メズ。カ、ル胞巢ノ周圍間質ニハ肉芽性變旺盛ナリ。癌腫胞巢ノ中心部ハ往々白血球ノ集簇ヲ

## 臨床的記載

七十四歳男子、農業。

遺傳的關係ヲ認メズ、生來健康ニシテ、微毒ニ感染セシ事無シ、壯年ノ時淋疾ヲ經過セリト。先天性包莖存ス。約三年前陰莖ノ先端ノ部ニ物質欠損ヲ生ジ、潰瘍狀ヲ呈セシガ漸時増大シ昨年ノ末陰莖ハ急ニ大トナリ、排尿障礙無カリシモ、尿意頻數ナリシト。大正八年四月十八日陰莖腫脹ノ主訴ノモトニ外科外來ヲ訪ヘリ。現症トシテ體格中等、榮養不良、胸部ニ於テ理學の所見ニ異狀ヲ認メズ、腹部ハ少シク凹陷シ壓痛及ビ硬結ヲ認メズ、左右兩鼠蹊腺ハ指頭大及僅ニ腫大セルモノ數個ヲ觸レ、壓痛無シ、陰莖ハ

## 第十一例

### 附屬醫院外科學教室貯藏標本

來シ爲メニ胞巢ハ一部破壊セラレタル像ヲ認ム。龜頭組織ノ包皮ヲ破リテ突出セル部ノ包皮ノ上皮ハ可ナリ増殖ヲ營メルモ未ダ異型ヲ呈セズ、腫瘍組織ニ隣接セル上皮ハ一汎ニ側性増殖ヲ認ム。

「メラニン色素」狀態ヲ觀ルニ、腫瘍組織及龜頭ノ包皮ニ破壞タル部ノ包皮ノ増殖セル部ニ於テ真皮、上皮兩層ニ該色素ヲ認メズ。然レドモ増殖セル部ニ於テ真皮、上皮兩層ニ該色素ヲ認メズ。然レドモ増殖周邊部側性増殖ヲ呈セル部ノ真皮中ニ多數ノ色素細胞ヲ存セリ。該部ノ上皮細胞中ニハ「メラニン色素」含有セズ。

本例ニ於ケル核分割像ハ甚ダ多樣ニシテ、母星期ノモノノ子星期ノモノ多數ヲ占メ、其他準備期ニ屬セシムベキモノ亦完成期ニ屬セシム可キモノモ認メラル。其他不相對性核分割像モ屢々存在セリ。直接核分割像モ所々存在シ、棘細胞層角化層ニ近キ部ノ細胞ニ認ム。間接分割像ハ主トシテ基底細胞層ノ細胞ニ多ク、又之レニ接近セル棘細胞層ノ細胞ニモ屢々認メラル。

## 肉眼の所見

根部ヨリ二種位ヨリ先端ニ向テ著シク膨大シ、硬ク、皮膚及ビ龜頭部ニ數個ノ潰瘍部アリテ出血シ易シ、大正八年四月二十五日陰莖癌ノ診斷ノモトニ切斷シ腫大セル鼠蹊腺全部ヲ剔出セリ。

陰莖ハ先端ヨリ五種ノ部ニテ切斷セラル包皮ハ冠狀溝ノ部ニ於テ後方ハ翻轉シ、然モ此部ニ於テ堤狀ニ肥厚セリ、殊ニ腹側ニ於テ著シ。其ノ部灰白色ヲ呈シ面粗糙ニシテ凹凸不平ナリ。左側冠狀溝ノ部ハ深ク掘鑿ヲ示シ、消息子ヲ通ズルニ後述ノ根部ニ存セル隆起セル腫瘍狀部ト相交通セリ。腹側ニ鳩卵大ノ外方ニ隆起セル腫瘤狀物存ス、此ノ部ハ外方ニ噴火口狀ニ隆

起セル數個ノ腫瘤狀物ニヨリ形成セラル。大ナルハ小指頭大、小ナルハ大豆大ナリ。此レヨリ左側ニ於テ根部ニ近ク雀卵大ノ外方ニ隆起セル腫瘤狀物存ス。其ノ縁ノ一部ハ噴火口狀ニ自開シ其ノ面灰白色ヲ呈シ粗糙ナリ。此ノ部ハ上述セシ如キ掘鑿セル冠狀溝ノ部ト相連絡セリ。龜頭ハ正常ノ像ヲ損セリ。其ノ面ハ羊皮紙樣物ニテ覆ハレ色ハ灰白色ヲ呈シ、凹凸不平ナリ、外尿道口ノ部ハ認メ得。正中線ニ於テ大矢狀斷ヲ施シ其ノ剖面ニ於テ檢スルニ、背側龜頭上皮下乳嘴狀ニ可ナリニ増殖セルモ、深部組織ニ浸入セル像ヲ示サズ。其部深部組織ハ黑褐色ヲ呈セリ。腹側ノ上述二個ノ大ナル腫瘤狀物ハ剖面ニ於テ相連絡セリ、其ノ部上皮層ハヤ、胞巢狀ノ觀ヲ示シ、深部組織中ニ不羈ノ増殖ヲ營ミ、地圖狀ヲ呈シ、帶紅灰白色ニシテ實一般ニ脆シ。包皮ノ上皮層ハ外方ニ自開セル部ノ他ハ増殖強カラズ、正常ノ像ヲ呈セリ、腫瘍細胞ノ増殖ハ深部組織ニ向テモ顯著ナルモ、未ダ海綿體ノ部ヲ侵襲セズ。

## 顯微鏡の所見

肉眼的ニ乳嘴狀ヲナシテ上皮細胞ノ増殖セル部ヲ檢スルニ上皮細胞ハ主トシテ索狀ニ一部ハ胞巢ヲ形成シテ真皮内ニ増殖ヲ營メリ。カ、ル大小ノ胞巢ヲ形成セル細胞ハ正常上皮細胞層ノ各層ノ細胞型ヲ具備セルモ殊ニ増殖強キハ諸他ノ例ニ於テ記載セシ如キ棘細胞型ノ細胞ナリ。基底細胞ハ圓形或ハ橢圓形或ハ紡錘形ヲナシテ間質組織トノ境界銳利ナリ。殊ニ可染質ニ富饒ナリ角質層、棘細胞層ニ於ケル細胞ハ角化傾向強シ。然モ此等上皮細胞胞巢中ニ多少ノ多核白血球又ハ「エオジン嗜好性白血球」ヲ吸入セルヲ認ム。間質組織ハ真皮組織ニシテ此ノ部ニ小圓形細胞「プラスマ細胞等」ノ炎症ノ細胞浸潤甚ダ顯著ニシテ所々「ルツセル氏」フクシン嗜好小體ヲ認ム、カ、ル乳嘴狀ニ増殖セル部ハ包皮内板ニ發生セル腫瘤部ト相連絡セリ、腫瘤部ヲ檢スルニ上述ノ如キ上皮細胞ニテ形成セラレタル大小種々ノ胞巢ハ

真皮組織内ニ縱横不羈ノ増殖ヲ營メリ。角化傾向殊ニ強ク棘細胞層ノ細胞ハ總テ角化セルガ如シ、上皮細胞ノ核小體ノ數ハ一個又ハ二個ナリ。此ノ部ノ間質モ亦真皮組織之レヲナシ多數ノ新生血管及結締組織ノ新生ヲ伴ヘリ、間質ハ炎症ノ細胞浸潤甚ダ旺盛ニシテ所々「ルツセル氏」フクシン嗜好小體ヲ多數ニ認ム、猶間質中殊ニ腫瘍細胞胞巢ノ周邊部多核白血球ノ集簇セル部所々角化細胞及角質片ノ混在セル部ニ數個ノ巨體細胞出現セリ胞體ハ「エオジン」ニ染リ核ハ主トシテ可染質ニ富ミ、圓形或ハ橢圓形ニシテ胞體ノ周邊部ニ集在シ核ノ數ハ六個乃至十數個ヲ有ス、ランゲハンス型ノモノ多シ。其ノ形ハ不正形ナリ、巨體細胞ノ中ニハ角化細胞角質片ヲ入レタルモノアリ、又カ、ル物質ニ接着シテ存セルアリ、巨體細胞ノ核ハ白血球、結締組織細胞、淋巴細胞等ト形態的ニ異ナリ或一種ノ細胞核ト相類似セリ、其他間質中胞巢ニ甚ダ接近シテ一個ノ巨體細胞存在セリ、間質ニ於ケル血管多クハ盈テリ、血管、神經纖維ノ周圍ニ圓形細胞ノ浸潤甚ダ顯著ナルモ、血管及纖維自己ニハ著變ヲ認メズ、只神經纖維ノ周圍ニ間隙ノ存スルモノアリ。

腫瘍細胞ノ増殖及ビ周圍組織ニ對スル態度ヲ見ルニ、胞巢狀ヲナセル腫瘍細胞ハ深部或ハ外表ニ向テ一部ハ浸潤性ニ一部ハ周圍ヲ壓迫シツ、侵入セリ。然レドモ未ダ海綿體ノ部ヲ侵襲セズ。外方外板ノ部ニ向テハ此レヲ破壞シテ自開セリ。或部ニテハ外板上皮層ヲ壓迫シ、腫瘍細胞群ト外板上皮層トノ間ニハ厚キ結締組織層存在セリ。カ、ル部ノ腫瘍細胞群ノ外板上皮ニ甚ダ接近セル部ニ於テハ、外板上皮ハ多少ノ度ニ於テ反應性増殖ヲ營ミ一般ニ被動的ノ位置ニアリテ同性傳染ヲ承認スベキ所見ニ接セズ、此部ノ腫瘍細胞案及ビ胞巢中ノアルモノニハ其ノ中心部ニ白血球ノ集簇ヲ來シ其ノ益々擴大ト共ニ胞巢モ囊狀ニ擴マリ途ニハ破壞シ肉芽性變ニヨリテ全ク置換セラレニ至ル。カ、ル時此部ニ遺殘セル角化物質、角化細胞ノ周圍ニ

巨細胞ノ出現ヲ認ム。本例ノ間質中甚ダ顯著ナル細胞浸潤中ニ存在セル腫瘍細胞巢ハ其ノ胞巢中ニ多數ノ白血球及圓形細胞ノ浸潤セルヲ認メシム。

一方腫瘍組織ト健康表皮トノ隣接部ノ表皮層ハ著明ノ側性増殖ヲ示セリ。

「メラニン色素ノ狀態ヲ觀ルニ、腫瘍組織ニ於テ間質及實質上皮膚細胞中ニ色素ヲ認メズ、龜頭表面ニ於テ厚キ角質層ヲ有ス。表皮層中、ニケ所ニ於テ異型ノ増殖ヲ呈セル部存シ此部真皮及上皮中ニ色素存在セズ、其ノニケ所ノ異型ノ増殖ヲ呈セル部ノ中間表皮層ハ反應性増殖ヲ示セリ。此ノ部ニ於テ真皮中所謂「クロマトフォール」ヲ認ムルモ上皮細胞中色素ヲ含有セズ、其他健康上皮トノ隣接部ノ側性増殖ヲ呈セル部真皮上皮膚層ニ色素ヲ認メズ。健康表皮ニ向フニ從テ上皮細胞中ニハ色素ヲ含有セザルモ、上皮

## 臨床的關係 不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ五種ノ部ニテ切斷セラル、高度ノ包莖ノ狀ヲ呈シ、包皮緣ハ肥厚腫脹セリ、左側及腹側面ハ淡褐色ナルモ背側及右側面ハ肥厚強ク土堤狀ニ隆マリ灰白色ヲ呈セリ。外尿道口ノ部ハ噴火口狀ヲ呈シ中ニ灰白色ノ脆キ物質ヲ容ル。其他背側緣狀ニ隆マレル部ニ近ク二三個ノ灰白色ノ結節存在シ大ナルハ半米粒大、小ナルハ粟粒大ニシテ表面ヨリ少シク隆マレリ。矢狀斷ヲ施シテ其剖面ヲ檢スルニ、包皮内板ノ上皮層ハ著明ノ増殖ノ像ヲ呈シ、胞巢狀ノ造構ヲ認メシメ外方ニ向テ侵入セル狀ヲ示セリ。此部ハ上述噴火口狀ヲ呈セル部ト相連續セリ。龜頭部壓迫セラレ萎小、變形ヲ呈シ、龜頭上皮層ハ輕度ノ肥厚ノ觀ヲ呈セリ。冠狀溝ノ部内板内面ニハ脆キ帶紅灰白色ノ物質存セリ。外板上皮膚層ハ包皮緣ニ於テ増殖強キモ其他ノ部ニ於テハ増殖ノ像ヲ示サズ、然レドモ真皮組織中ニ四個ノ周圍ヨリ

## 第十二例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

細胞間ニ分歧セル色素細胞存在セリ、カ、ル時色素細胞ハ突起ヲ細胞間ニ出セルモノ多キモ、一部ニ於テハ突起ヲ真皮中ニ出セルアリ、真皮上皮膚層ニ亘リテ存在セルアリ、又外板上皮ニ腫瘍細胞群ノ破出セル部ノ外板上皮ノ反應性増殖ヲ呈セル部ニ上皮細胞間ニ色素ヲ認メズ、此部ニ近キ真皮中ニ少數ノ「クロマトフォール」ヲ認ム。

核分割ノ像ヲ觀ルニ本例ニ於テ比較的少ナシ。母星期、子星期ノモノ主トシテ多數ニシテ、準備期ノモノ完成期ノモノモ稀ニ認ム。不規則ナル核分割ハ認メズ、直接核分割ハ屢々棘細胞層ニ存ス、間接核分割像ハ主トシテ基底細胞層ニ多シ。

限局セル灰白色ノ斑ヲ認ム、大サ粟粒大ナリ。

## 鼠蹊淋巴腺

ノ腫大セルモノ三個、拇指頭大、指頭大、蠶豆大ニシテ拇指頭大ノモノ指頭大ノモノノ剖面ハ一況ニ灰白色ニシテ其部質脆ク、所々ニ物質欠損セリ。

## 顯微鏡的所見

實質細胞ヲナスモノハ正常上皮ニ於ケル各層ノ上皮細胞ノ型ヲ有スルモノ、増殖ニヨリテ形成セラル。殊ニ増殖顯著ナルハ前諸例ニ於テ屢々記載セシト等シク棘細胞型ノ細胞ニシテ角傾化向強シ、基底細胞層ニ於ケル細胞ハ殆ンド正常ノ核ノ性狀ヲ呈セズ、甚ダ可染質ニ富ミ、圓形或ハ橢圓形或ハ紡錘形ニシテ其ノ配列不規則ナリ、核小體ハ一個又ハ二個ヲ有ス。此ノ如キ實質細胞ハ大小ノ胞巢ヲ形成シテ内板深部組織ニ侵入セリ。

本腫瘍組織ノ間質ハ包皮内板ノ真皮乳頭ヨリナリ主トシテ鬆粗結締組織ナリ。多少ノ新生血管ヲ伴ヒ、又所々結締組織ノ増殖ヲ來シテ厚キ束狀トナレ

リ。之レハ腫瘍細胞巢ノ周圍ニ於テ著明ナリ。間質ニ於ケル炎症性ノ細胞浸潤ハ強度ニシテ、血管ノ周圍ニハ殊ニ強シ。上述冠狀溝ノ部及內板上皮表面ノ部ニ存在セシ灰白色ノ脆キ物質ハ角質片及上皮細胞ノ剝離セルモノ及多核白血球等混在セリ。血管ハ多クハ充盈セリ、未ダ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ受ケザル部ノ血管ハ其ノ周圍ニ圓形細胞ノ集簇ヲ來シ、或モノニテハ壁ハ多少肥厚セリ。腫瘍増殖部ノ間質ニ於ケル血管ハ主トシテ壓迫セラレ、管腔ノ變形ヲ示セリ。動脈管ニアリテハ腫瘍細胞ノ侵蝕ヲ蒙ルセルモノヲ認メザルモ、靜脈管ニ於テハ屢々之ヲ認ム、即チ靜脈壁ハ一般ニ鬆粗トナリ周圍及壁ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ來シ、或者ハ胞巢ノ爲メニ周圍ヨリ壓迫セラレ、或者ニアリテハ腫瘍細胞ヲ浸潤性ニ侵蝕シ壁ニ於テハ胞巢ヲ形成セルアリ。然レドモ未ダ血管内ニ腫瘍細胞ノ増殖ヲ示サズ。間質ニ存スル神經纖維ノ周圍ニモ亦圓形細胞ノ浸潤顯著ニシテ、腫瘍細胞ノ爲メニ全ク侵蝕セラレタル神經纖維ヲ認メザルモ、腫瘍細胞群ノ爲メニ全ク圍繞セラレタル纖維及ビ腫瘍細胞ノ纖維ニ沿フテ増殖セル像ヲ認ム、カ、ル神經纖維ニアリテハ纖維内ニ輕度ノ圓形細胞ノ浸潤ヲ示シ、周圍ノ結締組織ハ侵蝕セラレタルモノ存ス、亦神經纖維ニハ屢々纖維ノ彎曲セルヲ認ム。

腫瘍細胞増殖ノ態度ヲ觀ルニ、包皮內板上皮細胞ハ既ニ異型ノ不羈ノ増殖ヲ營ミ、包皮外板ノ部ニ向ツテ周圍組織ヲ壓迫シツ、進入シ、包皮縁ノ部ニ於テハ其ノ増殖甚ダ顯著ニシテ、外板健康表皮トノ隣接部ニ於テ著明ナル側性ノ増殖ヲ認ムルモ、其部ニ於テ外板上皮細胞ノ同性傳染的腫瘍化ヲ承認スル像ヲ認ムルコトヲ得ズ。亦又一方異型ノ増殖ヲ呈セル內板上皮細胞ハ胞巢狀ヲナシテ深部組織中ニ進入シ、外板表皮層ニ甚ダ相接セル部ニ於テ外板表皮層ハ一般ニ反應性ノ増殖ヲ營メルモ、細胞自己ニハ變性等ノ變及ビ腫瘍化ノ像ヲ認メズ、カ、ル部ノ間質ニモ炎症性ノ細胞浸潤甚ダ旺盛ニシテ殊ニ「ブラスマ細胞、及ルツセル氏」フクシン嗜好小體ヲ多數ニ認

ム、又所々新生血管及増殖セル結締組織ヲ証ス。

「メラニン色素ノ狀態ヲ檢スルニ異型ノ増殖ヲ示セル腫瘍組織中ニハ何所ニモ色素ヲ認メズ。側性増殖著明ナル部ニ上皮細胞中色素ヲ含ムモ、其部ノ真皮中ニハ色素細胞甚ダ稀ナリ。而シテ上皮細胞中「メラニン色素ハ健康上皮ニ向フニ從テ其ノ量ヲ増シ、主トシテ基底細胞中核ノ周圍ニ存スルモ、亦棘細胞及ビ角化細胞ニモ所々色素ヲ含有セリ。カ、ル部ノ真皮組織中ニ色素細胞ヲ全ク欠クカ、又甚ダ稀ニ存ス。而シテ肉眼的ノニ上皮層増殖著明ナリシ部組織的ニ一部上皮異型ヲ呈セズシテ増殖セル部ヲ存ス。此部真皮中ニハ概シテ色素ヲ認メズ。此部上皮細胞間ニ突起ヲ出セル色素細胞存セリ。該色素細胞ハ主トシテ基底細胞間ニ占居セルモノ一部棘細胞間ニモ存在セリ。而シテ色素突起ヲ真皮中ニ呈セルモノ存ス、猶此部上皮細胞中核ノ周圍ニ顆粒狀ニ色素ヲ含有セルヲ認ム。

肉眼的ニ外板真皮組織中ニ認メタル灰白色ノ斑ハ多少ノ増殖ヲ示セル皮脂腺ノ斷面ナリ。

本例ニ於テ核分割像ヲ多數ニ認ム、其ノ最も多數ヲ占ムルハ母星期及子星期ノモノニシテ、又準備期ニ屬スルモノ、完成期ニ屬スルモノモ可ナリニ存セリ。其他不規則ノ核分割像及不相對性核分割モ所々認メラル。核分割像ノ部位的關係ヲ觀ルニ主トシテ基底細胞層ニ多數存セリ、又棘細胞層ニモ屢々認メラル。

淋巴腺 指頭大ニ腫大セルモノニ在リテハ殆ンド正常淋巴腺ノ組織ヲ認メシメズ、唯ダ周邊ノ一部ニ於テ淋巴濾胞ノ像ヲ認メ、被膜ハ可ナリニ肥厚セリ。而シテ大部分ハ間質ニ旺盛ナル肉芽性變ヲ呈セル胞巢狀ノ腫瘍組織ナリ、腫瘍胞巢ハ正常上皮層ニ於ケル如ク總テノ層ヲ具備セリ。即チ可ナリニ増殖セル可染質ニ富メル紡錘形ノ核ヲ有スル基底細胞層ト富稜形圓形ニシテ比較的大ナル核ヲ有シ稍々可染質ニ乏シキ棘細胞層及其他角化層



顆粒層細胞ヨリシテ胞集ヲ形成セリ。其ノ間質ハ可ナリニ結締組織ノ増殖ヲ伴ヒ、「アラスマ細胞」、「エオジン嗜好性細胞」、其他小圓形細胞等炎症ノ細胞浸潤強シ。猶ホ間質ノ部ニ主トシテ胞集ノ周圍ニ近ク圓形或ハ橢圓形或ハ不正形ニシテ突起ヲ有スル巨細胞多數ニ存ス。大サ亦一定セズ、核ノ性狀ハ甚ダ可染質ニ富ミテ分明ナラザルモノ、又可染質ニ乏シク、淡明ニシテ核ノ性狀ヲ明ラカニシ得ルモノト存ス。核ハ主トシテ胞體ノ邊緣ノ部ニ集セルモノ、亦彌蔓性ニ存在セルモノアリ、而シテ巨細胞ニシテ大ナル核一個ヲ有スルモノ又十數個ヲ有スルモノアリ。胞體中ニハ白血球ヲ抱擁セルモノ、角質片、角化細胞ヲ抱ケルモノアリ。亦角質片ニ甚ダ接着シテ

## 臨床的關係

不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ殆ンド全部侵蝕セラレ其ノ元形ヲ呈セズ。唯陰莖根部ニ於テ徑四・五釐ヲ有スル不正圓形ヲ呈セル大小種々ノ凹凸アル不平面ヲ現ハセリ。其ノ表面ハ黑灰色及ビ灰白黃色ノ脆キ汚穢物ヲ以テ覆ハル、爲メニ陰莖ハ腫大セル陰囊及ビ周圍ノ脂肪組織ト共ニ切除セラレタルモノナリ。剖面ニ於テ檢スルニ上述物質欠損部ノ中央部即チ海綿體尿道ノ部ニ相當セル部ハ強ク侵蝕セラレ其ノ部全ク組織破壊セラレ肉眼的ニ正常ノ組織ヲ明ラカニスル事能ハズ、猶此部ヨリ深ク深部組織中ニ縱横ニ瘻管ヲ作ツテ侵蝕セリ、瘻裂部ハ其ノ表面ニ黑灰色及灰白色ノ脆キ物質ヲ附着セリ。猶増殖セル部ニ於テ束狀纖維ノ走行ヲ認メシム。

## 鼠蹊淋巴腺

腫大セルモノ二個、其ノ一個ハ拇指頭大ニシテ剖面灰白色ヲ呈セリ、他ノ一個ハ小兒手掌面大ニシテ剖面灰白色ニシテ中央部ハ軟化セリ。

原著 和田 陰莖癌ニ就テ

## 第十三例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

存在セルモノモ存ス、又胞集中心部破壊セル角質ノ中ニ交リテ存セルモノ、胞集ノ進入ノ部ニ之レニ相接着シテ存セルモノ等アリ。又淋巴腺ヨリ製作セル標本ニテハ周邊部ニ正常淋巴組織存セルモノ其ノ他ノ部ハ所々核ノ染色性ヲ失ヒテ壞死像ヲ呈セル部存シ、其ノ周圍ニ肉芽性變存在シ其ノ部ニ大小ノ多數ノ巨細胞出現セリ。巨細胞ノ型ハ主トシテ正圓形ナリ、其ノ核モ上述セシ巨細胞ノ核ト同様ノ性狀ヲ有セリ。圓形ヲ呈セル巨細胞ノ中ニハ恰モ管腔ヲ有スル組織ノ内皮細胞ノ甚ダ強ク増殖シテ形成セルガ如キ像ヲ示セリ。カ、ル組織像ハ吾人ガ結核菌ニテ見ル組織像ニ甚ダ類似セルモノ、結核菌ヲ証明スルヲ得ザリキ。

## 顯微鏡的所見

本例ニ於テハ病勢旺盛ノ爲メ組織ノ崩壞強度ニシテ表皮ノ附着ハ唯一標本ニテ之レヲ認メシムルノミ。其他ハ陰莖ノ何レノ部タルヤチ組織的ニモ明ラカニスルヲ得ズ。腫瘍ヲ形成セル細胞ノ大小ハ不定、形も種々ニシテ、即チ圓形、橢圓形、紡錘形等一定セズ。核ハ概シテ可染質ニ富饒ニシテ其ノ形、大サモ甚ダ不規則ナリ。可染質分布ノ狀モ不規則ニシテ、核小體ハ多クハ一個、又ハ二個ヲ有ス、要スルニ本腫瘍ヲ構成セル細胞ハ其ノ核ノ性狀、形態ハ異型ニ富ミテ一定ノ型ニ入ル、事能ハズ。而シテ腫瘍細胞ノ角化傾向ハ作リシ標本中何所ニモ之レヲ認ムル事ヲ得ズ。

上述上皮附着部ニテ檢スルニ、比較的規則正シキ索ヲ形成セリ。其ノ部可ナリノ増殖ヲ示セルモノ、未ダ異型ノ増殖ヲ營マズ。此部間質及ビ上皮中ニ多クノ「メラニン色素」ヲ存セリ。真皮中「メラニン色素」ヲ有スル細胞ハ主トシテ常ニ真皮乳頭ノ部ニ存セリ。此部上皮索ノ尖端多數ニ「メラニン色素」ヲ有スル部ノ周圍ノ真皮組織中ニハ色素細胞ヲ認ムル事ヲ得ズ。病變

部ニ甚ダ接近セル部ノ真皮、表皮兩層ニ色素ヲ認メズ。腫瘍組織ノ間質ハ腫瘍細胞浸潤性増殖甚ダ旺盛ノ爲メ割合ニ少ク、唯所々遺殘セル結締組織及所々増殖セル結締組織及ヒ鞏固ナル血管、神經纖維索又ハ新生血管等ヨリ形成セラレ、此ノ部小圓形細胞ノ浸潤存スルモ、前諸例乳癌狀増殖ヲ示セル癌腫例ノソレニ比シテ甚ダ弱シ。所々赤血球ノ組織内溢出ヲ認メシム。然レドモ炎症性ノ細胞浸潤ハ腫瘍細胞増殖ノ周邊部間質中ニハ甚ダ顯著ナリ。

腫瘍細胞ノ増殖ノ狀ヲ檢スルニ、上述各例ニテ記載セシ如キ胞巢ハ殆ンド形成セズ、鞏固ナル結締組織及血管神經纖維等ヲ殘シテ深部組織中ニ破壊的ニ或ハ浸潤性ニ侵入シ、陰莖各部組織ヲ侵蝕セリ。腫瘍増殖ノ周邊部ノ表皮層ニ於テ、側性増殖ノ像ヲ認ム。此部ニ於テモ、上皮細胞ノ腫瘍化ヲ認メシメズ。本腫瘍ノ外表ノ部ハ殆ンド總テ壞死像ヲ呈シ白血球ノ浸潤ト共ニ細菌ノ集團ト認ムベキ部所々存セリ、尿道モ途ニ腫瘍細胞ノ侵蝕ヲ蒙リ、殘レル尿道上皮ハ殆ンド壞死ニ陥リ、尿道周圍ニ於テハ圓形細胞ノ浸潤ヲ伴ヒテ腫瘍細胞ハ侵蝕ヲ逞クセリ。尿道周圍及ビ或一部ニ於テハ、可染質ニ富饒ナル紡錘形ノ核ヲ有スル型ノ腫瘍細胞ノ増殖顯著ナルヲ認メシム。

本腫瘍例ニ於テ興味ヲ感シタルハ、腫瘍細胞ガ血管及ビ神經纖維ニ對スル態度ナリトス。血管ニ對スル態度ヲ觀ルニ腫瘍組織間ニ遺殘シテ未ダ其ノ侵襲ヲ受ケザル血管動脈管、靜脈管共ニ著シキ變ヲ認メシメズ。周圍ニ小圓形細胞ノ浸潤ヲ認ム、既ニ血管壁ヲ侵蝕セラレタルモノニテハ腫瘍細胞ハ小圓形細胞ヲ伴ヒテ壁ニ向テ浸潤性ニ亂入セリ。且亦周圍ヨリ壓迫セラレ爲メニ其ノ管腔ハ狹小トナリ、變形ヲナセルモノ存ス。進入ハ一般ニ壁ノ組織間隙ニ路ヲ求メタル如ク、榮養血管ヨリ侵入セルガ如キ所見ニ接セズ。本例ニ於テ多ク侵蝕セラレタルハ靜脈管ニシテ動脈管ノ

侵サレタルモノ割合ニ少シ。靜脈管ノ或モノニテハ腫瘍細胞侵蝕ノ爲メニ途ニ其ノ壁ハ破壞セラレ、血球ノ組織中ニ竄入セル部存ス。亦壁ノ外膜中膜等侵蝕セラレ内膜ノミチ留ムル像ヲ認ムベシ。一方ニ於テ内膜モ途ニ侵蝕セラレ内被細胞ノミ遺殘セルアリ。而シテ内被細胞モ破壞セラレ腫瘍細胞ハ途ニ血管腔内ニ進入シ、腫瘍血塞ヲナセルアリ。而シテ亦腫瘍組織間質中ニ多數ノ末梢神經纖維ノ斷斷及ビ橫斷セラレタルモノ存ス。然レドモ纖維ノ全ク侵蝕セラレタルモノ、又ハ纖維束間腫瘍細胞ノ著明ナル増殖ノ像ハ之ヲ認メズ。血管ト同様殆ンド總テノ神經纖維ノ周圍又ハ鞘内ニ小圓形細胞ノ浸潤ヲ來セリ。周圍ニ於テハ細胞浸潤甚ダ強シ、既ニ腫瘍細胞ノ神經纖維ニ迫リタル部ニテハ腫瘍細胞ハ鞘ニ沿フテ其部ノ淋巴道ヨリ進ミテ増殖シ、途ニ神經纖維ノ圍繞シ鞘ヲ侵蝕スルニ至レリ。亦侵蝕ヲ蒙レル部ノ神經纖維ニ於テハ一部周圍ノ肥厚セル結締組織ヲ猶存セルモ、既ニ結締組織ノ萎縮消失セルモノアリ、束間結締組織ハ概シテ増殖ヲ認メズ。或モノニテハ増殖ヲ示セルモノ存ス。腫瘍細胞纖維内増殖ノ像ハ束間部ヨリ侵入セルガ如キ著明ナル像ニ接セズシテ、周緣部ヨリ、破壞浸潤性ニ亂入セルガ如キ像ハ認メ得。而シテ亦腫瘍細胞増殖ノ爲メニ纖維自己ガ壓迫セラレタルガ如キ所見ヲ得ズ、纖維ノ彎曲セシ像及ビ纖維周圍ノ空隙ノ存セル像ハ認メ得ベシ。

腫瘍細胞ノ核分割像ヲ檢スルニ、細胞異型ニ富ムト共ニ核分割像モ甚ダ不規則ナリ。然レドモ多數ヲ占ムルハ、母星期及子星期ニ屬スルモノ、ニシテ、其他三極性ノモノノ相對性ノモノ、多極性ノモノノ猶甚ダ不規則ナル分割像等モ可ナリ多數ニ存ス。又準備期及完成期ニ屬セシム可キモノモ認ム。亦核ガ顆粒狀ヲ呈セルモノアリ、滴狀ヲ呈セルモノアリ。直接核分割像ハ比較的少シ。核分割存在ノ部位的關係ニ就キテハ、元來増殖不規則ニシテ癌胞巢ノ形成不完全ナル爲メニ明ラカニスルコト困難ナルモ、主ト

シテ間質ニ接シタル腫瘍細胞ニ多數ナルヲ認ム。

**鼠蹊淋巴腺** 小兒手拳大ニ腫大セルモノハ多數ノ淋巴腺ノ集合ニヨリテ成レリ。腫大セル淋巴腺ノ總テニ於テ轉移セル腫瘍細胞群ヲ認ム。腫瘍細胞ノ増殖甚ダ旺盛ニシテ主トシテ胞葉ヲ形成セズ、彌漫性ニ増殖ノ像ヲ示セリ。淋巴腺ノ被膜ハ肥厚ヲ呈シ、淋巴腺ノ組織ハ周邊部ニテ僅ニ認ム、

#### 第十四例 當病理學教室貯藏標本

**臨床的關係** 不詳。  
**肉眼の所見**

陰莖ハ灰白色ノ塊狀ヲナシ肉眼的ニハ各部組織ヲラカニセズ、包皮縁ニ相當セル部ハ一般ニ肥厚強ク堤狀ニ隆マレリ。其ノ表面凹凸不平ニシテ乳嘴狀ニ上皮ノ増殖ヲ認ム、境界存セズシテ龜頭表面ニ移行セリ。龜頭表面モ凹凸不平ニシテ且甚ダ粗糙ニシテ上皮ノ乳嘴狀増殖ヲ示セリ。外尿道口ノ部ヲ認ムルヲ得ズ。正中線ニ於テ矢狀斷ヲ施シテ檢スルニ剖面ノ色ハ一般ニ灰白色ヲ呈セリ。包皮及ビ龜頭上皮ハ強ク乳嘴狀ニ増殖ヲ營ミ、猶胞葉狀ノ造構ヲ僅ニ認メシム、海綿體ノ部及白膜ハ未ダ侵襲セラレザルガ如シ。

#### 顯微鏡的所見

材料甚ダ舊キ爲メ各種細胞核ノ染色性ハ甚ダ不良ナリ、腫瘍細胞ハ前述乳嘴狀増殖セル各例ト殆ンド同様ノ組織像ヲ示セリ。即チ上皮細胞ハ大小種々ノ胞葉ヲ形成シテ真皮乳頭内及ビ表層ニ向テ不羈ノ増殖ヲ營メリ。各上皮層ノ分布ノ狀及ビ其ノ核ノ性狀モ第四例、第五例ノ如キ所謂乳嘴型ニ屬スルモノ、組織像ヲ呈セリ。角化傾向可ナリニ強ク、胞葉ノ中心部ニ於テ所謂癌珠ヲ形成セリ。其部屢々多核白血球ノ集簇シ、其部ノ腫瘍細胞層ハ破壊セラレ白血球群中ニ角質片、角化細胞混在セリ。カ、ル胞葉ハ

腫瘍細胞ハ其ノ侵入道トシテ血管周圍ノ淋巴路ヨリ進入増殖セルガ如キ像ヲ明ラカニ認メシム。血管ニ對スル態度核分割像及ビ其他ノ増殖ノ狀ハ原發癌ニ於ケルト相似タリ。轉移セル腫瘍細胞群中ニハ唯一ヶ所ニ於テ原發電ニ見ザリシ角化層ヲ認ム。

#### 標本

癌狀ニ擴大シ遂ニハ一部破壊スルニ至ル。間質ニ於ケル像モ亦第四例ト同様ニシテ、一部ニ於テハ血管ノ新生ヲ伴ヘリ。動脈管、靜脈管ヲ問ハズ、腫瘍細胞増殖部ノ間質ニ於ケル血管ハ多少ノ度ニ於テ壁ノ肥厚ヲ示セルモノアリ。血管ノ周圍ニ於テハ圓形細胞ノ浸潤高度ナリ。血管腔ハ腫瘍細胞胞葉ノ爲メニ壓迫セラレ、往々變形ヲ呈セリ。血管内腫瘍細胞ノ増殖ハ之ヲ認メズ。間質ニ於ケル末梢神經纖維ハ侵襲セラレタルモノ無ク。其ノ纖維周圍ノ結締組織ノ増生セルガ如キモノヲ認メ、猶周圍ニ於ケル圓形細胞ノ浸潤ハ他ノ間質ノ部ニ比シテ甚ダ強シ。或標本ニテハ海綿體ノ部ニ腫瘍細胞群ノ甚ダ接近シテ侵入シ、一部ニ於テハ海綿體組織中ニ進入セリ。カ、ル部ニ於ケル腫瘍細胞胞葉ハ鞏固ナル結締組織ヲ破壊的ニ進入セルモ、亦胞葉自己ニ於テモ正常ノ像ヲ呈セズ、胞葉ノ中心部ニ白血球集積シ其部破壊シ囊狀ニ擴大シ爲メニ上皮細胞層ハ甚ダシク壓縮セラレタル狀ニ置カレ、且一部破壊セラレ全般ニ被働的狀態ニ置カレタル觀ヲ呈セリ。又海綿體ノ部ニハ圓形細胞ノ浸潤甚ダ強クシテ鞏固ナル結締組織モ肉芽性變ノ爲メニ侵蝕セラレ居ル像ヲ明ラカニ認メシム。尿道ノ部ニハ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ認メザルモ、尿道上皮ハ多少ノ度ニ於テ其ノ細胞ノ數ヲ増加セリ。且其ノ周圍ニテハ炎性ノ細胞浸淫ヲ可ナリニ認ム、其他腫瘍細胞増殖周邊部ノ間質組織中ニハ多少ノ度ニ於テ小圓形細胞、「プラスマ細胞、多核白血球等ノ炎性

細胞浸潤ヲ認メシメ、殊ニ血管神經纖維ノ周圍ニ顯著ナリ。ルツセル氏小體モ所々在セリ。腫瘍増殖部ニ隣接セル健康表皮ハ可ナリ著明ナル側性増殖ノ狀ヲ示セリ。然レドモ健康上皮細胞ガ増殖シテ直接腫瘍細胞ニ移行セルガ如キ像ハ認ムルコトヲ得ズ、亦一部ニ於テハ腫瘍細胞ハ主トシテ血管周圍ノ淋巴道ヨリ進入増殖セルガ如キ著明ナル像ヲ認メシム。

腫瘍細胞ノ核分割像ハ核ノ染色性不真ナル爲メ、判然タルモノ、認メラ

## 第十五例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

臨床的關係 不詳。

### 肉眼的所見

陰莖ハ先端ヨリ三・三釐ノ部ヨリ切斷セラル。包皮ハ冠狀溝ノ部ニ於テ後方ニ退縮セリ包莖ノ狀ヲ呈セズ、包皮縁ハ堤狀ニ肥厚シ表面一般ニ平滑ニシテ灰白色ヲ呈セリ。全體トシテ鉢巻狀ヲ示セリ。龜頭表面ハ一般ニ粗糙ニシテ、比較的大ナル凹凸ノ狀ヲ呈シ、其凹面ニ於テ灰白色ノ脆キ物質ヲ附着セリ。又表面ニ於テ所々斑狀ニ淡褐色ヲ呈スル部存セリ。腹側龜頭繫帶ノ部ニ大豆大ノ著明ナル物質欠損部ヲ認メシメ、其ノ部ハ著シク凹陷シ一部掘鑿ノ狀ヲ呈セリ。正中線ニ於テ矢狀斷ヲ施シ、對面ヲ檢スルニ、龜頭上皮ハ所々胞巢ヲ形成シテ乳頭狀ノ増殖ヲ營メリ、包皮縁ノ上皮モ僅ニ胞巢狀ヲ認メシム。上述腹側物質欠損部ニ於テ上皮ノ増殖ノ狀ハ深部ニ向テ顯著ナリ、而シテ其ノ部真皮層中白膜ニ近キ部ニ小豆大ノ帶黃灰白色ノ部ヲ認メシム、其ノ他龜頭深部組織中ニ彌漫性ニ暗褐ノ部存セリ。

### 顯微鏡的所見

本例ニ於ケル腫瘍細胞ハ大小種々ノ胞巢ヲ形成シテ一方ニハ外層ニ向ヘルモ、主トシテ深部組織ニ向テ増殖セリ。カ、ル増殖ノ狀ハ前諸例ニテ屢々記載セシガ如キ、一部乳頭狀ヲ呈シタルモノ一部潰瘍ヲナセル例ノ増殖

ル、ハ少シ。而シテ認メ得ラル、モノニテハ母星期及子星期ノモノ多數ヲ占ム。分割像存在ノ部位ハ主トシテ基底細胞層及ビ其ノ附近ノ棘細胞層ノ上皮細胞ニ在リ。

「メラニン色素」ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中ニハ何所ニモ認ムルコト能ハズ、側性増殖ノ部ニ於テ、上皮細胞中多數ノ色素ヲ含有セリ、此部真皮中甚ダ稀ニ色素細胞ヲ認ム。

ノ像ニ一致セリ。然レドモ胞巢ハ一般ニ少ク、即チ或部ニ於テハ胞巢ハ大ニシテ周圍組織ヲ壓迫シツ、侵入シ一方ニテハ甚ダ小ナル索狀ヲナシテ周圍組織ニ對シ浸潤性ニ進入増殖セリ。大ナル胞巢ヲ作リ周圍ヲ壓迫シツ、増殖セル部ニテハ正當上皮ニ見ルガ如キ各層ヲ有シテ胞巢ノ中央部ニハ癌珠ヲ形成セリ。浸潤性ニ進ハセル部ニ於テハ腫瘍細胞ハ真皮内ノ結締組織ノ間ヲ又ハ主トシテ血管周圍ノ淋巴道ヲ進ミ、縱橫ニ真皮組織ヲ侵襲セリ。カ、ル部ノ胞巢ヲ形成セル細胞ハ主トシテ可染質ニ富饒ニシテ正當上皮層ニ於ケル基底細胞型ノ細胞ノ主トシテ増殖セルガ如シ。然レドモ胞巢ノ中心部ニハ往々癌珠ヲ形成セリ。概シテ大ナル胞巢ヲ形成シテ進入セル部ノ上皮細胞ニ比シテ總テノ点ニ於テ異型ノ像ヲ示セリ。而シテ浸潤性増殖ヲナセル部ノ上皮表層ハ一般ニ壞死像ヲ呈セリ。間質ハ真皮ノ鬆粗結締組織ヨリナリ、此部肉芽性變旺盛ナルヲ認ム。殊ニ血管及神經纖維ノ周圍ニハ小圓形細胞、「ブラスマ」細胞、及白血球等ノ細胞浸淫甚ダ強シ。血管神經纖維ノ周圍ニ多少ノ結締組織ノ増殖セルモノ存ス。血管内ハ一般ニ赤血球ヲ以テ充テリ。而シテ外尿道口ニ近キ部ニ於テ異型ノ増殖ヲ營ミ、且角化傾向強クシテ明ラカニ癌珠ヲ形成セル組織ヲ認メシメ、又尿道周圍ノ結締組織中ニハ所々尿道ニ接近シテ角化傾向ヲ示セル腫瘍細胞胞巢存セリ。然レドモ腫瘍

細胞増殖が深ク尿道内ニ進入セルガ如キ像ハ認ムル事能ハズ。而シテ尿道上皮細胞ハ其ノ數ヲ増加セルガ如シ。一方腫瘍細胞増殖セル部ヨリ遠隔セル部ノ組織中ニハ所々炎性變ヲ認メシメ、而シテ点々ト鹽基性顆粒ヲ有スル遊走細胞出現セリ。此ノ部ニ於テモ亦炎性ノ細胞浸潤ハ血管及神經纖維ノ周圍ニ顯著ナリ。

本例ニ於テ興味ヲ感ジタルハ龜頭部ノ深部組織内腫瘍細胞増殖セル部ヨリ遠隔セル部ニ於テ周圍ハ結締組織ニテ圍繞セラレテ限局シ其部ニ多數ノ多核白血球集簇シ之レノ周圍又ハ一部混ジテ「プラズマ細胞、小圓形細胞等」ノ細胞浸潤ヲ來セル部ニアリ。猶注目スベキハ此ノ電ノ中央部ニ大ナル角化組織片存在シ、角化細胞ヲ明ラカニ認メシム。而シテ亦角化組織破片ヲ所々多數ニ含メリ。カ、ル角化組織ノ周圍又ハ該肉芽竈ノ部ニ二十數個ノ大小種々ノ不正形ノ主トシテラングハンス氏型ノ巨細胞ヲ認ム核ノ數ハ主トシテ數個乃至十數個ヲ有シ胞體ノ周邊部ニ配列シテ存シ可染質ニ富メルモノ多シ核ハ紡錘形或ハ長橢圓形ニシテ核ノ性状ヲ明ラカニセズ、而シ或モノニテハ比較的淡明ニシテ核ノ性状ヲ明ラカニシ、主トシテ胞體ノ中央部ニ集セル核ヲ有スル巨細胞存セリ。此等巨細胞ハ其ノ胞體內ニ「エオジン」ニ染リテ多少光輝アル角質片ヲ抱有セリ。又角化物質ニ密着シテ存セルアリ。而シテ他ノ同場所ノ標本ニテ檢スルニ角質片ハ次第ニ小ト

## 臨床的關係 肉眼的所見

不詳。

陰莖ハ先端ヨリ四割ノ部ニテ切斷セラル、龜頭及包皮縁ノ上皮層ハ増殖肥厚甚ダ強クシテ共ニ一ツノ灰白色ノ塊狀トナリテ存セリ。肉眼上ニ兩者ノ境界冠狀溝ノ部ヲ明ラカニスルヲ得ズ、殊ニ増殖肥厚ノ顯著ナルハ背

原著 和田 陰莖癌ニ就テ

## 第十六例 附屬醫院外科學教室貯藏標本

ナリ、巨細胞ハ數ヲ増加シ巨細胞ニハ殆ンド總テ二角質片ヲ貪食セル像ヲ認ム。其部ニ於テハ腫瘍細胞ハ認メズ。カ、ル竈ハ上述肉眼的ニ背例冠狀溝ノ深部ニ限局シテ存在セシ黄灰色ノ部ニ相當ス。

核分割像ハ全般ニ亘ツテ少シ。就中大ナル胞集ヲナシ壓迫性ニ侵入セル部ハ強ク浸潤性ニ進入セル部ニ比シテ概シテ少シ、認メラル、モノニテハ不規則ノ分割像ハ甚ダ稀ニシテ、多數ナルハ母星期及子星期ノモノナリ。不相對性ノモノヲ稀ニ認ム。其ノ部位の關係ヲ檢スルニ、主トシテ基底細胞中及之レニ近キ棘細胞中ニ認ム。浸潤性増殖セル部ハ多數ナルハ母星期及子星期ノモノナルモ、亦不規則分割及不相對性分割ヲ所々ニ認ム、直接分割モ亦存セリ。

「メラニン色素」狀ヲ觀ルニ腫瘍組織中ニハ何所ニモ色素ヲ認メズ。側性増殖ノ部ニシテ腫瘍組織ニ甚ダ近ク隣接セル部ニハ兩層ニ色素ヲ認メズ、此ノ部ヨリ健康表皮ニ向フニ從ツテ先ヅ上皮細胞間ニ分枝セル色素細胞存在ス、上皮細胞中ニハ認メズ。猶健康表皮ニ向フニ從ツテ、真皮、上皮兩層ニ色素細胞多數ニ存セリ。然レドモ上皮細胞核ノ周圍ニハ色素甚ダ少ナシ。

而シテ側性増殖ノ部ニ於テ、所謂同性傳染アリト認ムベキ像ニ接セズ。

側包皮縁ナリ、龜頭部モ正常ノ像ヲ窺フコトヲ得ズ。外尿道口モ認ムルヲ得ズ。灰白色ノ塊狀ノ部ハ其ノ面甚ダ粗糙ニシテ凹凸不正ナリ。其ノ剖面ニ於テ檢スルニヤ、胞集狀ノ像ヲ認メシム、深部ニ向ツテ可ナリニ強キ増殖ヲ認メシメ一部海綿體ノ部ニ及ベルガ如シ。

鼠蹊淋巴腺 小指頭大ノモノ一個脂肪織ノ中ニ包マル剖面一般ニ異狀

無キモ所々白色纖維ノ走行ヲ認メシメ、其表面凸面ニ近ク一個ノ帶褐黃色ノ粟粒大ノ部存セリ。

## 顯微鏡的所見

本例ニ於ケル腫瘍細胞ノ性狀及ビ核ノ形態性狀モ亦前例屢々記載セシ乳嘴型ナセルモノト殆ンド同様ナリ。然ルニ核ハヤ、可染質ニ富メリ。核小體モ明ラカニ認メラレ、主トシテ一個又ハ二個ヲ存セリ。斯クノ如キ腫瘍細胞ハ多クハ大ナル胞集ヲ形成シ胞集ノ中央部ニハ所謂癌珠ヲ認メシム。或ルモノニテハ胞集ノ中央部ニ白血球ノ集簇ヲ來シ、其部破壊セラレ、數個ノ角化細胞ハ白血球中ニ混在セリ。此ノ如キ胞集ハ一部表層ニ向ヒ、又一部深部組織内ニ周圍ヲ壓迫シツ、増殖進入セリ。深部組織侵入ノ狀ハ甚ダ顯著ニシテ一部海綿體ノ部ヲ侵蝕シ遂ニ尿道ノ部ニ接近シテ、尿道ノ一部ヲ侵蝕セリ。間質組織ニ於テハ肉芽性變旺盛ニシテ結締組織ノ増殖ト共ニ新生血管ヲ伴ヘリ。又炎性ノ細胞浸潤顯著ナリ。カ、ル肉芽性變ハ腫瘍増殖部ノ周邊ノ間質ノ部ニ強シ、腫瘍細胞ノ盛ニ増殖アル部ニ於ケル間質ハ結締組織ヨリナリ、其ノ中ニ圓形細胞、幼稚結締組織細胞、「プラズマ細胞、白血球、」エオジン嗜好性細胞等ヲ交エ、所々白血球ノ組織内流出ヲ認ム、間質中ニ存スル血管ハ其ノ周圍ニ炎性ノ細胞浸潤強ク、又一部周圍ニ結締組織ノ増殖ニヨリテ壁ノ肥厚ヲ呈セルモノ存スルモ、壁ノ侵蝕セラレタルモノ少ク、腫瘍細胞ノ血管内増殖ハ認ムルコトヲ得ズ。然レドモ腔ハ其ノ壓迫ノ爲メニ種々變形ヲ呈シ、腔内ハ主トシテ赤白血球ヲ以テ充テリ、腫瘍細胞ノ未ダ増殖侵入セザル周圍組織ニ於テ肉芽性變ハ彌蔓性ニ或ハ集簇性ニ甚ダ強ク、強剛ナル結締組織束ハ爲メニ鬆粗トナリ束ハ大小ニ斷裂セラレタル部アリ。而シテ尿道附近組織中ニハ圓形細胞ノ浸潤強ク、尿道上皮ハ一般ニ細胞ノ數ヲ増加セリ、一部ニ於テハ腫瘍胞集ノ接近ノ爲メニ壓迫セラレ其ノ腔ハ狹小トナリ、上皮層モ多少壓縮セラレタル狀ニアリ、亦圓形細胞

胞浸潤ノ強ク尿道附近ノ組織中ニハ所々數個ノ腫瘍細胞胞集存セリ。胞集ハ主トシテ角質層ヨリ成リ其ノ外層ニ於テ少數ノ未角化腫瘍細胞ノ配列ヲ認ム、又角質層ノミヨリナレルモノモ存ス。而シテ角化層中ニハ核ノ破壊セルガ如キ顆粒狀物及多核白血球ノ集在セルアリ、又胞集ノ或モノニテハ、其ノ一側ニノミ未角化腫瘍細胞ヲ認ムルモノアリ、カ、ル胞集ノ周圍ニ及肉芽性組織中ニ大小種々ノ圓形、卵圓形、長橢圓形、不正形等種々形ヲ示セル巨體細胞二十數個存セリ。巨體細胞ハ隔離セル角化物質ニ密着シテ又角質片ニ交リテ或ハ角化物質ニ接近シテ又ハ周圍肉芽變中ニ存在セリ。胞體ハ一般ニ赤色又ハ淡赤色ニ染マレリ。胞體内ニハ角質片及角化細胞ヲ抱ケルモノ或ハ顆粒狀核ノ破片ヲ含メルモノ、淋巴球又ハ空胞ヲ有スルモノアリ。核ノ性狀ヨリシテ二種ニ區別ス。即チ核ハ圓形或ハ卵圓形ニシテ淡明ニシテヤ、胞狀ヲ呈セルモノ、一ツハ長橢圓形又ハ紡錘形ニシテ可染質ニ富ミ、核ノ性狀分明ナラザルモノナリ。前者ハ細胞ノ形ハ一般ニ圓形又ハ長橢圓形ニシテ後者ハ紡錘形或ハ不正形ナリ又二個ノ巨體細胞ノ融合セル如ク、一個ノ大ナル巨體細胞ニシテ二種ノ核ノ性狀ヲ有スルモノ存ス、胞體内核ノ配列ノ狀モ一定セズ、周邊部ニ圓陣ヲ形成セルアリ、一極ニノミ集在セルアリ。中央部ニ集在セルアリ、又胞體内ニ彌蔓性ニ存在セルモノアリ。核ノ數ハ四個乃至十數個ヲ算ス、多數ノ巨體細胞ノ核ニテハ分割像ハ殆ンド認メザレドモ、只一個ニ於テ二個ニ分レントセル直接核分割像ヲ認ム(第二圖)。又巨體細胞ノ核ハ周圍ニ存在セル結締組織細胞、上皮細胞、白血球、淋巴球等ノ何レノ核トモ密接ナル關係ヲ存セズ、肉芽性變中ニ出現セル或一種ノ細胞ノ核ト相類似セリ。而シテ尿道周圍ノ腺組織ハ腺細胞ノ數ヲ増加シ、分泌機ハ亢進セル狀ニアリ又腔ノ擴大セル部存ス。

核分割像ハ本例ニ於テハ甚ダ多數ニ認ム、而シテ最多數ヲ占ムルハ母星期及子星期ノモノナリ。其他不相對性ノモノ三極性ノモノ又多極性ノモノ

其他ノ不規則ナル分割像可ナリ多數ニ存ス。又準備期ノモノ、完成期ノモノモ認ム。此レ等核分割像ヲ主トシテ基底細胞中ニ認メ、又其ノ近クノ棘細胞ニモ往々認メラル。直接核分割像モ可ナリ多數ニ存在セリ、之レハ胞巢ノ中心部ニ近キ部ニ屢々認メラル。

本例ニ於テモ亦腫瘍増殖周邊部表皮ニ於テ著明ナル側性増殖ノ像ヲ認メシム。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中何所ニモ認ムルコトヲ得ズ。側性増殖ノ部ニ於テハ他ノ健康部ニ比シテ稀レニ色素ヲ認ム。即チ最初異型増殖部ニ甚ダ隣接セル上皮索ニ於テ可ナリ大ナル分枝セル色素細胞ヲ上皮細胞間ニ認ム。此ノ部真皮中色素細胞存セズ、而シテ健康部ニ向フニ從ツテ上皮細胞間ニ分枝セル色素細胞ハ多數ニ存セリ。又此ノ部真皮中ニモ色素細胞ヲ認ム、上皮内ノ色素及ビ真皮中ノ色素細胞ハ健康部ニ向フニ從ツテ、其ノ量及數ヲ増加ス、正常上皮中ノ色素ハ甚ダ多量ニシテ、主トシテ基底細胞中ニ存在スルモ亦淺層ノ上皮細胞中、又角化傾向ヲ呈セル部ニ於

## 臨床的關係 不詳。

## 第十七例 常病理學教室貯藏標本

陰莖ハ先端ヨリ四・五種ノ部ニテ切斷セラル包莖ノ狀ニ非ズ、包皮縁ハ冠狀溝ノ部ニ於テ一汎ニ灰白色ヲ呈シ多少堤狀ニ肥厚セリ、表面ハ龜頭表面ト共ニ一般ニ平滑ナリ、龜頭表面ハ皺襞狀ヲ示セリ、右側冠狀溝ノ中央ノ部ニ指頭大ノヤ、外方ニ隆起セル可ナリ限局セル腫瘤部存ス、其ノ表皮ハ粗糙ニシテ一部物質欠損ヲ示セリ、色ハ一般ニ淡紅色ニシテ其ノ部包皮縁ハ多少堤狀ニ肥厚セリ。該腫瘤狀部ヲ通リ割テ施シテ檢スルニ、一般ニ平滑ニシテ龜頭部真皮組織ハ褐色ヲ呈セリ。腫瘤部ノ剖面ハ上皮ハ主トシテ

テモ所々色素ヲ認メシム。尿道上皮ニ於ケル「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍胞巢ノ甚ダ接近セル部又侵襲ヲ蒙ル部ノ尿道上皮、真皮中ニ色素ヲ認メズ、ソノ部ヨリ少シ隔タリ、尿道周圍ニ炎症細胞浸潤顯著ナル部ノ上皮主トシテ基底細胞ノ核ノ周圍ニ多量ノ色素ヲ有ス。然レドモ此ノ部真皮組織中ニ色素ヲ毫モ証明セズ、又對側ノ上皮中ニ色素存スルモ真皮中ニハ色素ヲ証明セズ。

鼠蹊淋巴腺 轉移シ來レル腫瘍細胞群ヲ認メズ、唯被膜ハ多少肥厚セリ。而シテ淋巴腺組織ニ於テ結締組織ハ所々束狀ヲナシテ増殖セリ、其他炎症ノ細胞浸潤及ルツセル氏小體ヲ認ム。又凸面ニ近ク皮質ノ主トシテ竇ノ部ニ帶褐黃色又黃色ノ色素ノ存在ヲ認メシメ鐵反應陰性ニシテ、顆粒狀又ハ小塊狀ヲ呈シ、厚形質ノ多キ且核ノ大ニシ淡明ナル細胞中ニ含有セラリ、又淋巴小管ノ周圍ニ多數存セリ。又淋巴小管ノ壁ノ細胞中ニモ所々存セリ。

深部ニ向カツテ増殖シ、割合ニ限局シテ周圍ハ結締組織ニテ圍繞セラレタル觀ヲ呈セリ。其ノ部一汎ニ淡紅色ヲ呈シ胞巢狀ヲ認メシム。

## 顯微鏡的所見

腫瘍細胞ハ胞巢ヲ形成シテ真皮ノ深部組織内ニ不羈ノ増殖ヲ營メリ。該胞巢ヲ成セル細胞ハ正常表皮ノ各上皮細胞ノ型ヲ具備セリ、殊ニ數多キハ棘細胞型ノ細胞ナリ。核及ビ細胞ノ性狀ニ就キテハ諸例ニテ屢々記載セシガ如キ狀ニアリ、本例ハ各細胞ノ染色性ハ佳良ナラズ、角化變性甚ダ強ク棘細胞型ノ細胞ノ大部分ハ角化傾向ヲ有セリ。故ニ殆ンド大半ノ胞巢ニ癌珠ノ形成ヲ見ル、角化變性甚ダ強キ胞巢ニ於テハ外層ノ基底層ノ細胞ハ屢

々壓迫セラレ扁平トナレル部存セリ、胞巢中白血球ノ竄入ハ少シ、然レドモ所ニヨリテハ瘰癧ノ部ニ白血球集簇シ其ノ増大ト共ニ胞巢ハ漲狀ニ擴大セルモノ存シ、外層ノ腫瘍細胞ハ甚ダ壓平セラレタル狀ヲ呈セル部存ス、カ、ル部ハ増殖ノ周邊部結締組織ト相接セル部ニ於テ認ム、一部ニアリテハ胞巢内白血球集簇ノ代リニ「エオジン嗜好性白血球」ノ集簇ニヨリテ同様ノ變ヲ來セリ、病變部上皮表層ノ欠損セル部ハ肉眼のニ物質欠損ヲ示セル部ニ相當ス。本腫瘍ノ間質ハ眞皮結締組織ノレチナシ、此部ニ結締組織ノ新生、及新生血管ヲ伴ヒ炎症細胞ノ浸潤ヲ來セリ、又ルツセル氏小體ヲ多數ニ認メシム。間質ニ於ケル血管ハ主トシテ赤血球ヲ以テ充テリ、而シ腫瘍細胞増殖ノ爲メ、壓迫セラレ腔ハ狹小トナリ又變形セリ。侵蝕セラレタル血管ヲ認メズ、間質ニ於テ腫瘍細胞ノ爲メニ侵襲セラレタル神經纖維ヲ認ム、腫瘍細胞ハ神經纖維ニ沿フテ増殖シ、遂ニ之レヲ全ク圍繞セリ、即チ纖維周圍ノ淋巴道ヨリ進ミ、此レヲ圍繞セルガ如シ、而シテ増殖周邊部ノ間質ニ於テ腫瘍増殖部ヨリ離レタル神經纖維ノ周圍ニ早クモ之レヲ圍繞セル腫瘍細胞ヲ認ム、腫瘍細胞ハ主トシテ胞巢ヲ形成シテ深部ニ向ツテ一部細索ヲナシテ浸潤性ニ、一部大ナル胞巢ヲナシテ周圍ヲ壓迫シツ、侵入セリ。然レドモ周圍ニ向ツテ著シク不羈ノ狀ヲ呈セズ、割合ニ限局性ナリ。健康上皮トノ境界部ノ表皮ニテ側性増殖ノ像ヲ呈セリ。然レドモ龜頭部ノ増殖

## 臨床的關係

不詳。

## 肉眼の所見

陰莖ハ外見上殆ンド其ノ正常ノ像ヲ認ムルコトヲ得ズ、即チ龜頭包皮内、包皮外板及其ノ周圍ノ皮膚ハ其ノ上皮層著明ニ外方ニ向ツテ乳嘴狀ニ増殖ヲ營ミ腫瘤狀ニ隆マレリ。陰莖ヲ中心トシテ花椰菜狀ヲ呈セリ。冠狀溝ニ

## 第十八例

## 當病理學教室貯藏標本

部ハ健康表皮トノ境界部ノ表皮ニ於テ上皮索ハ甚ダシク狹小トナリ、樹枝狀ヲ呈シ可ナリ深部ニ進ミテ増殖セルモ異型ニ非ズ。此ノ部ニ相等セル眞皮組織ハ健康部ニ亘リテ硝子樣變性ノ像ヲ呈セリ、此ノ部ノ表皮ハ各層共ニ著シク萎小シ、上皮細胞ノ核ノ染色性ハ弱ク、細胞ノ配列モ不規則ニシテ細胞間ニハ所々間隙ヲ生ゼリ。

核分割像ハ甚ダ少シ、存在セルモノ、多クハ母星期及子星期ノモノナリ、不規則ナル分割ハ稀ニ認メラル、核分割ノ部位ヲ檢スルニ基底細胞ニ多數ナリ。

「メラニン色素」ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中ニハ何所ニモ色素存在セズ、側性増殖著明ナル上皮索ノ一部ニ於テ、基底細胞中ニ色素ヲ認ム。此部眞皮中ニ色素細胞ヲ認メズ、此レヨリ健康部ニ向ヒテ一部眞皮中ニ多數ノ色素細胞存在セルモ、其部上皮中ニ色素ヲ含マズ。正常上皮層ニ於テハ主トシテ基底細胞核ノ周圍ニ一部マルビギ層ノ細胞及最淺層ノ細胞核ノ周圍ニ色素ヲ認ム、此部眞皮中ニ色素細胞、殆ンド存セズ、龜頭部ニ於ケル側性増殖ノ部即チ其部眞皮ハ硝子樣變性ヲ來セル部ニ所々點々ト上皮細胞中基底細胞中ニ色素ヲ認ム、又健康部ニテハ、少キモ色素ヲ可ナリ認ム、此ノ部眞皮中ニハ全ク色素ヲ認メズ。

一致スル部ハ深部ニ向ツテ其ノ増殖ヲ遅クシ、龜頭ハ冠狀溝ニヨリ境セラレテ明ラカニ認メ得、其ノ面甚ダ大小ノ凹凸不平等ヲ示シ一般ニ灰白黃色ヲ呈スルモ一部ハ淡紫紅色ナリ、而シテ上皮ノ増殖ハ周圍ノ皮膚ニモ及ビ其部ハ褐黑色ヲ呈セリ。此ノ部ニ所ニヨリ灰白色ヲ呈シテ乳嘴狀ニ隆マレル部存ス、之レ原發部ト相連絡セリ。腫瘤狀部ノ正中線ニ於テ大矢狀斷ヲ施



シ其ノ剖面ヲ檢スルニ、各部ノ上皮層ハ強ク増殖ヲ示シ、外方ニ向ツテ旺盛ニシテ深部ニ向テ弱ク増殖セリ。其部ニ於テ胞巢狀ヲ明ラカニ認メシム。病變部ハ一般ニ灰白色ヲ呈セリ、最表層ニ於テ赤色部存ス、此ノ部ハ上述表面ノ紫紅色ヲ呈セシ部ニ一致セリ、冠狀溝ノ部ハ深部ニ増殖ヲナセルモ未ダ海綿體ノ部ニ侵襲セズ。

### 顯微鏡の所見

本例ニ於テ増殖セル細胞ハ棘細胞及基底細胞型ヲ有シ、胞巢ヲ形成シテ乳頭狀ニ主トシテ外方ニ向ツテ増殖ヲ營メリ、索ハ其ノ大サ甚大ナラズト雖モ長ク分歧シ、樹枝狀ヲ呈シ、或部ニテハ索ハ網狀ヲ形成セリ。所謂乳頭癌ノ像ヲ呈セリ、棘細胞型ノ細胞ノ核ハ一般ニ圓形或ハ橢圓形ニシテ淡明ナリ一個又ハ二個ノ核小體ヲ有セリ、胞體ハ一般ニ一エオジン色ヲ採リテ角化變性ノ傾向ヲ示セリ、著明ニ非ザルモ所々胞間ニ細棘ヲ認ム。基底細胞型ノ細胞ノ核ハ圓柱狀ニシテ可染質ニ富ミ、其ノ配列比較的正常ナリ。角化傾向ハ一般ニ強ク所々瘤珠ヲ形成セリ、胞巢ノ細胞間ニ多數ノ多核白血球及「エオジン嗜好性細胞」ヲ認ム、間質ハ鬆粗結締組織ヨリナリ其ノ部ニ小圓形細胞、「プラスマ細胞」、「エオジン嗜好性細胞」、多核白血球、幼弱結締組織細胞等相混ジテ存セリ、所々新生血管ヲ伴ヘリ。新舊血管ハ主トシテ赤血球ヲ以テ充テリ。間質ニ於ケル血管神經纖維ノ周圍ニハ圓形細胞ノ浸潤甚ダ強ク、其ノ周圍ノ結締組織ノ增生セルモノ存セリ。神經纖維ノ周圍ニ間隙ヲ認メシム、間質及ビ増殖周圍ノ組織中ニ圓形細胞ノ浸潤強クシテ此ノ部ニ存在セル鞏固結締組織ヲ侵蝕セリ、カ、ル肉芽性變旺盛ナル間質ニ二、三個ノ主トシテ圓形ナル可染質ニ富饒ナル核ヲ有スル巨細胞ヲ認ム、核ハ一汎ニ中心部ニ集在セリ。

本例ニ於テ興味ヲ感ジタルハ腫瘍細胞増殖ノ周邊部ニ於テ鞏固ナル結締組織ニ接近セル部ノ胞巢ノ變化ナリトス。此ノ胞巢ノ變ニ二度ニ區別シ得

原 著 和田 陰莖癌ニ就テ

ベシ、第一度ハ胞巢中心ノ角化部ニ白血球及「エオジン嗜好性細胞」、小圓形細胞ノ集簇、浸潤ヲ來シ爲メニ角化質ヨリナル胞巢中心ハ粗糙トナリ、角化細胞ハ個々連絡離レ白血球集簇中ニ混在セリ。第二度ハ胞巢ノ中心癌珠ノ部ニ於テ白血球ノ集簇著明ニ現レ其ノ中ニ少數ノ角化細胞ヲ交エ、白血球ノ集簇ノ増大ト共ニ胞巢モ痙攣ニ擴大シ最外層ノ上皮細胞ハ基底細胞層ノミトナリ其ノ部ノ細胞モ配列ヲ亂シ扁平トナリ、遂ニ胞巢ハ一部破レ未角化上皮細胞モ、白血球中ニ所々混在セリ。カ、ル時ハ胞巢ノ破レタル部ヨリ周圍ニ存在スル肉芽性變進入シ、結締組織ノ増殖ヲ伴ヒ、全ク胞巢ハ肉芽性變ニ置換セラル、ニ至ル。此ノ如クシテ胞巢ノ狀ハ全ク見ラレザルモ、肉芽性變旺盛ナル部ニ角化細胞角質片ノ存在ニヨリテ胞巢ノ存在セシヲ知ラシムルノミ。而シテ該肉芽性變中ニハ強キ結締組織ノ增生ヲ伴ヘリ。而シテカ、ル部ノ角化細胞、角質片ノ近クニ又密接シテ前諸例屢々記載セシ如キ、巨細胞數個出現セリ、巨細胞ノ核ハ周圍肉芽性變中ニ存在セル一種ノ組織球性細胞ノ核ニ酷似セリ、而シテ巨細胞ノ細胞中ニ角化上皮細胞ヲ含メルモノ、角質片ヲ抱ケルモノ又多核白血球、「エオジン嗜好性細胞」ヲ容ル、モノ存ス、亦核ノ破片ヲ容ル、モノアリ。腫瘍細胞増殖ノ像ヲ觀ルニ、大小種々ノ分歧セル胞巢ヲ形成シテ主トシテ外方ニ向ツテ強ク乳頭狀ニ増殖ヲ營メリ。然シテ深部ニ向ツテノ増殖ハ甚ダ弱ク、且上來記載セシガ如キ深部ニ向ツテノ増殖ハ甚ダ弱ク、像ヲ示シ、又増殖周邊部ニテハ盛ニ結締組織ノ新生ヲナシ既存結締組織ト共ニ甚ダ厚キ結締組織ノ層ヲ形成シ、腫瘍細胞ノ増殖ニ向ツテ之ヲ阻止スルガ如キ結果ヲ來セリ、側性増殖ノ像ハ之レヲ窺ハシム。

核分割像ハ割合ニ少數ニシテ、且ツ不規則ナル核分割ハ甚ダ少シ、然レドモ相對性ノモノヲ認メ得。核分割像ノ多數ハ母星期ノモノニシテ、子星期ノモノヲ多シ、核分割像ノ存在ノ部位ハ主トシテ基底細胞層ニ多數

ニシテ、次テ棘細胞層ノ下層ノ部ニ多シ。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腸腸組織中ニハ一般ニ認ムルコトヲ得ザレドモ、唯一ク所間質組織中肉芽性變旺盛ナル部ニ所々「クロマトフォーレン

## 第十九例 附屬醫院皮膚科教室貯藏標本

山本 某、年齡四十八歲、農業。

### 臨床的記載

這傳的關係不明、二十年前淋疾ニ罹リシコトアリ、下疳、橫痃ヲ知ラズ。四十日程以前何等誘因ナクシテ陰莖冠狀溝ノ部ハ發赤腫脹ヲ來シ、疼痛ヲ覺エ、次テ潰瘍ヲ生ジ、血液ヲ混ジタル膿ヲ出セリ。組織的検査ニヨリ陰莖癌ナル診斷ノモトニ大正九年十二月十七日切斷セリ。患者ハ榮養不良ニシテ皮膚ハ一般ニ乾燥セリ、生來包莖ニシテ大正九年四月包莖ノ手術ヲナセリ。

### 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ四・二釐ノ部ニテ切斷セラル、包皮緣ハ冠狀溝ノ部ニ於テ土堤狀ニヤ、肥厚シ、緣ハ一般ニ甚ダ凹凸不平ナリ、背側正中線ニ於テ冠狀溝ノ部ニ一部ハ包皮ニ一部ハ龜頭表面ニ亘リテ物質欠損部存セリ。其ノ面甚ダ凹凸不平ナリ、其他右側包皮緣ニ一個ノ大豆大ノ物質欠損部存セリ、兩物質欠損部ハ一部ニ於テ掘鑿セリ、又腹側ニ於テモ一部肥厚セル部存セリ。龜頭面ハ一般ニ灰白色ヲ呈シテ凹凸不平ニシテ粗糙ナリ、尿道口ノ部ハ一部淡褐色ヲ示セリ上述大ナル物質欠損部通リテ矢狀斷ヲ施シ其ノ割面ニ於テ檢スルニ、龜頭緣ハ輕キ大ナル凹凸アリテ不平ナルモ物質欠損部ノ緣ハ小ナル凹凸ナルモ不平強シ。上皮増殖部ハ灰白色ヲ呈シテ周圍組織ト境界セラル、冠狀溝ノ部ニ於テ深ク組織内ニ進入セリ、龜頭部ニテモ比較的深部ニ向ツテ浸入セリ、此ノ部ノ上皮ノ増殖ハ尿道外口ノ部ニ及ベルガ

ン」ヲ認ム側性増殖ノ部ニハ上皮眞皮層中ニ「メラニン色素及「クロマトフォーレン」ヲ認ムルモ正常ニ比シテ甚ダ少シ、此ノ部ノ上皮細胞中ノ色素ハ棘細胞ノ上層ノ部ノ細胞中ニモ認メラル。

### 顯微鏡的所見

本例腫瘍ヲ形成セル細胞ハ主トシテ棘細胞及基底細胞型ヲ有スル上皮細胞ナリ、太キ胞集ヲ形成セル部ニ於テハ兩細胞型ノ細胞ハ形態學的ニ區別シ得ルモ縱橫ニ不調ノ増殖ヲ營メル部ニ於テハ兩細胞ノ形態學的性質甚ダ不定ニシテ區別困難ナリ。棘細胞層ノ部ハ一般ニ「エオジン」ニ淡紅色ニ染マレルモノ多ク明ラカニ細棘ヲ認メシムルモノアリ。核ハ一般ニ圓形或ハ橢圓形或ハ多角形ニシテ可染質ハ可ナリ富饒ナリ。基底細胞層ニ一致スル上皮細胞ハ胞集ノ形ノ亂レザルモノニテハ配列甚ダシク不整ナラザルモ、一般ニハ亂レタリ。不整ナラザル部ニテハ主トシテ紡錘形ヲ呈シ、亂レタル部ニテハ圓形或ハ橢圓形等種々變形セリ、而シテ可染質ハ甚ダ富饒ナリ。核小體ハ一個又ハ二個ヲ存セリ。然レドモ可染質ニ富メル爲メニ核小體ノ分明ナラザルモノアリ。角化傾向ハ著明ニ非ザルモ、所々瘤珠ヲ認ム。上述ノ如キ腫瘍細胞ハ胞集ヲ形成シテ主トシテ深部組織ニ向ツテ強ク増殖ヲ營メリ。上皮細胞胞集内ニ多核白血球及「エオジン」嗜好性細胞ノ竄入ヲ認メ、増殖周邊部ノ胞集ニハ前例屢々記載セシ如キ、白血球ノ集簇ニヨリテ種々ノ變化ヲ呈セリ。カ、ル部ニ數個ノ核ヲ有セル主トシテ圓形ノ巨惡細

如シ、龜頭深部組織中ニハ褐色色素ノ沈着アリ、然レドモ上皮増殖ハ未ダ海綿體ノ部ニ及バズ、尿道内面ハ一般ニ平滑ナリ。

鼠蹊淋巴腺 腫大セルモノ數個、大ナルハ拇指頭大、小ナルハ豌豆大ニシテ、割面灰白色異狀ヲ認メズ。

胞ヲ認ム、核ハ可染質ニ甚ダ富ミ、紡錘形或ハ橢圓形ニシテ核ノ性狀ヲ明  
ラカニセザルモノト亦比較的淡明ニシテ其ノ性狀明ラカナルモノト存ス。  
而シ巨態細胞ノ胞體中ニ白血球及空胞體物ヲ抱含セルモノ又大ナル角質  
片、角化細胞ヲ有スルモノ存ス、其ノ他胞巢ノ未ダ角化傾向ヲ有セザル部  
ニ於テ亦巨態細胞出現セリ。又胞巢中ノ間質ニ近キ部ニ占居セルアリ、猶  
間質中ニモ胞巢ニ接近シテラングハンス氏型ノ巨態細胞存セリ。而シテ腫  
瘍細胞旺盛ニ不羈ノ増殖ヲ營メル周邊部ノ大ナル血管腔中ニ血管壁ニ接近  
シテ二個ノ圓形ノ巨態細胞ヲ認ム。核ハ三個又ハ四個ヲ藏ス、核ハ主トシ  
テ圓形或ハ橢圓形ニシテ可染質ニ乏シク核小體等核ノ性狀ヲ明ラカニセシ  
ム。核ハ胞體内瀰漫性ニ存セリ。該血管ハ外方ヨリ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ蒙リ  
腫瘍細胞ハ浸潤性ニ壁ヲ侵蝕シ、血管腔ニ迫リ一部壁ヲ破壞セルモ腫瘍細  
胞ノ血管内増殖ハ認メズ、壁ニ於テ一部内皮細胞ノ可ナリニ増殖セルヲ認  
ム。上述巨態細胞ヲ有スル胞巢ハ主トシテ深部結締組織ニ増殖進入セルモノ  
ニシテ、周圍ニハ結締組織ニヨリテ圍繞セラル。多キモノハ一胞巢中ニ四個  
ノ巨態細胞ヲ藏セリ。然レドモ未角化腫瘍細胞ヲ食セル如キ所見ニ接セ  
ズ。腫瘍組織ノ間質ハ真皮結締組織ナリ。間質ハ比較的少ク胞巢ハ相互ニ接  
近シ、其ノ間ニ極少量ノ結締組織存セリ。間質ニハ炎症ノ細胞浸潤ヲ來シ、  
血管及結締組織ノ新生ヲ伴ヘリ。間質ニ於ケル血管ハ其ノ周圍ニ結締組織ノ増  
生セルモノアリ、一般ニ赤血球ヲ以テ充ツ、血管内腫瘍細胞ノ増殖ヲ認メ  
ズ、腫瘍細胞増殖ノ周邊ニ於テ間質組織ニハ炎症ノ細胞浸潤及集簇顯著ニ  
シテ、殊ニ血管神經纖維ノ周圍ニ強シ、一部ニ於テハ圓形細胞ノ浸潤ニヨ  
リテ鞏固ナル結締組織ヲ鬆粗ナラシムルガ如キ像ヲ認ム。又間質中所々  
ルツセル氏小體ヲ認ム。腫瘍細胞増殖ノ狀ヲ觀ルニ、深部ニ向ツテ旺盛ニ  
シテ外表ニ向ツテハ弱ク、外表ノ部ノ一部壞死像ヲ示セリ、又健康表皮ニ  
近キ部ニアリテモ所々表皮層ヲ欠除シ、之レニ代ルニ肉芽性變旺盛ナリ。

然レドモ該部深部組織ニハ腫瘍細胞ノ増殖強シ、腫瘍細胞ハ主トシテ血管  
周圍ノ淋巴道ヨリ侵入セリ、鞏固ナル結締組織ノ部ニテハ腫瘍細胞胞巢ハ甚  
ダ狹小トナリ、線狀トナリ、又細胞個々浸潤性ニ進入シ抵抗弱キ部ニ於テ  
ハ大ナル胞巢ヲ形成セリ。カ、ル部ハ肉眼上物質欠損強キ部ニ相當シ、角  
化傾向ハ何所ニモ認ムルコトヲ得ズ。殆ンド基底細胞ヨリ由來セル腫瘍ノ  
像ヲ呈セリ。健康表皮トノ隣接部ニアリテハ側性増殖ノ像ヲ呈シ、龜頭表  
面ノ部ノ健康表皮トノ隣接部ニ於ケル側性増殖ノ部ニテハ腫瘍細胞群ト健  
康上皮細胞群トノ間ニハ境界ナク、健康上皮細胞群中ニ腫瘍細胞ハ個々存  
セリ。然レドモ兩者ノ間ニハ移行型ハ認ムルコトヲ得ズ。一方ノ側性増殖  
ノ部ニ於テハ腫瘍細胞ハ健康表皮ニ相接シテ強ク深部組織中ニ増殖シ、爲  
メニ健康上皮層ハ壓迫セラレ非薄トナレリ、此ノ部ニアリテモ同性傳染ヲ  
承認スベキ所見ニ接セズ。

核分割像ハ甚ダ多數ニシテ準備期、分裂期、完成期ノ各期ヲ認ム。殊ニ  
多數ナルハ母星期及子星期ニ屬スルモノニシテ其他不相對性ノモノモ多數  
ニ認メラレ、又多極性就中、三極性ノモノ其他不規則ノ分割モ所々存セリ。  
核分割像ノ存在部位ハ主トシテ基底層ニシテ直接核分割像ハ淺層ニ近キ棘  
細胞中ニ存セリ。

「メラニン色素」狀ヲ檢スルニ、腫瘍組織中ニハ全ク色素ヲ認メズ、側性  
増殖ノ部ニテハ上皮層ニハ色素ハ減少セルモノ存スルモノアリ。此ノ真皮中  
ニハ全ク認メズ、上皮細胞既ニ異型ヲ呈セル部ニ上皮細胞間ニ色素細胞存セ  
リ、稀ニハ上皮細胞核ノ周圍ニ存セリ。此ノ色素存在ノ部位ハ淺層ノ細胞  
中ナリ。此レヨリ健康部ニ向テ上皮中又ハ上皮細胞間ニ色素及色素細胞ヲ  
認ム、此ノ部真皮中ニ色素細胞全ク存セズ、健康部ニ於テハ上皮基底部ニ  
色素ヲ存セルモ真皮中ニハ存セザルアリ、又一部ニ於テハ真皮中色素細胞  
ヲ認ムルモ表皮内色素ヲ有セザルアリ。

原著 和田陰莖癌ニ就テ

鼠蹊淋巴腺 腫瘍細胞ノ轉移ハ之レヲ認ムルコトヲ得ズ、實質組織ハ甚ダ少ク所々増殖セル結締組織ノ間ニ島嶼狀ニ實質組織ヲ認ム、被膜及索ノ

## 第二十例 附屬醫院皮膚科教室貯藏標本

齊藤 某、年齢三十六歳、農業。

### 臨床的記載

遺傳的關係不詳、六年位以前ヨリ陰莖ハ腫脹シ疼痛アリ其レ以來放置セシニ近時某醫ノ治療ヲ受ケタルモ輕快セズ、現今ニテハ排尿困難ニシテ疼痛アリ、化膿ナシ、患者ハ十八歳ノ時淋疾ニ罹リ左側副辜丸炎ヲ經過セリト。

### 肉眼の所見

陰莖ハ高度ノ包莖ノ狀ニアリ、先端ヨリ八種ノ部ニテ切斷セラル。一般ニ強ク腫脹シ、包皮外板皮膚ノ色ハ淡灰白色ヲ呈シ皺襞著明ナリ。背側正中線ニ於テヤ、横ニ長キ横徑二・九釐、縱徑一・三釐ノ周圍ト銳利ナル境界ヲ示セル物質欠損部ヲ生ズ。縁ハ僅ニ肥厚シ擱鑿ヲ呈セリ。其ノ底ニ於テ一部強ク腫大セル内板組織ヲ現ハシ、其ノ面ニ於テ帶綠灰白色ノ脆キ物質ヲ附着セリ。亦其ノ他ノ底ニ於テ帶綠灰白色ノ物質ヲ附セリ、又陰莖先端ニ於テ少シク右ニ偏シテ大豆大ノ表面灰白色ヲ呈シ、粗糙ナル腫瘤狀ニ隆起セル部存ス。上述物質欠損部ノ中央ヲ通り割テ施シ割面ニ於テ檢スルニ、包皮縁殊ニ腹側ニ於テ腫脹強ク組織ハ水腫狀ヲ呈セリ、其部上皮下ハ乳嚢狀ニ増殖セルヲ認メシム。龜頭表面及ビ包皮内板ノ接合部ニ於テ兩組織ニ亘レル小指頭面大ノ帶綠灰白色ヲ呈シテ周圍ヨリ境界セル部存ス、此ノ部ハ組織崩壞シ質甚ダ脆シ、且此部ニ於ケル内板部上皮膚層ノ増殖ヲ認メズ、而シテ冠狀溝ニ一致セル部ハ上皮下ハ乳嚢狀ニ増殖ヲ示セリ。

### 鼠蹊淋巴腺

腫大セルモノ拇指頭大、小指頭大、大豆大ニシテ割面灰

結締組織ハ強ク肥厚セリ、殊ニ髓質部ニ於テハ結締組織ノ増殖強シ。

一三二一

### 顯微鏡的所見

白色ヲ呈シ異狀ヲ認メズ。

本腫瘍ヲ構成セル上皮細胞ハ上述諸例ニ於テ記載セシ乳嚢狀ニ増殖セル腫瘍ヲ構成セル上皮細胞ト殆ンド同様ニシテ、正常表皮ニテ見ル各層ノ上皮細胞ノ型ヲ有セリ。各上皮細胞ノ形態學的性質モ同様ナリ。一般ニ角化傾向強ク基底細胞ヲ除ク外ハ各層ノ上皮細胞ハ一般ニ角化變性ヲ有セリ。一部ニ於テ腫瘍細胞ハ胞集ヲ形成シテ乳嚢狀ニ増殖ヲ營メリ。然レドモ本例ニ於テ腫瘍表面ニ於テ壞死像強ク現ハレ、深部ニアリテ白血球ノ集簇及肉芽性變強ク爲メニ割面ヨリ得タル組織板ヨリ製作セル數枚ノ標本中ニテ周邊部ノ包皮縁及冠狀溝ノ一部ニテ腫瘍細胞ノ胞集ヲ認ムルノミニシテ其ノ他ノ部ニテハ所々極メテ僅ニ胞集ノ痕跡ヲ認ムルノミ。カ、ル壞死ノ狀ニアル部ニ於テハ細胞核ノ崩壞シテ顆粒狀トナリ、又所々微生物ノ集落ト認ム可キ「ヘマトキシリン」ニ濃染セル部ヲ存セリ。胞集ノ存在セル部ニテ檢スルニ、胞集ハ正常表皮ヲ構成セル各層ノ上皮細胞ヨリナリ、殆ンド總テニ癌球ヲ認ム、又胞集中心角化變性部ニ於テ其ノ角化細胞ハ連續性ヲ失ヒ個々トナリテ存在シ、其部ニ白血球ノ集簇ヲ存セリ。該部ニ於テ肉芽性變旺盛ナル部ニ於テ多數ノ角化片及角化細胞ノ存在セル部ニ其ノ角化片又角化細胞ヲ其ノ胞體內ニ攝取シ、又之レニ相密着シテ多數ノ大小種々、形態多種多様ノ巨態細胞數十個出現セリ。核ノ數ハ二個乃至十數個ニシテ、核ハ胞體ノ一極ニ集セルアリ胞體內瀰漫性ナルアリ、核ノ數ハ橢圓形或ハ圓形或ハ紡錘形ニシテ核ノ形狀比較的分明ナリ、又突起ヲ有シテ角

化物質中ニ其ノ突起ヲ突キ入レタルガ如キ巨態細胞アリ。猶胞體內ニハ白血球又空胞ヲ擁セルモノ、帶黃褐色ノ色素顆粒ヲ抱ケルモノアリ。冠狀溝ノ部ニ於テ腫瘍細胞ノ胞巢狀ニ増殖セル部ニアリテハ角化傾向亦強ク、其ノ部ニ白血球ノ集簇アリテ前諸例ニテ記載セシ如キ胞巢ノ變ヲ來セリ。此ノ部ノ表層モ壞死像ヲ呈シ、白血球ノ浸潤角質片ノ遺殘セルモノ又核ノ崩壞セルモノ存シ、所々細菌ノ集團ヲ認ム。間質ハ鬆粗結締組織ヨリナリ、其ノ部ニコラーサマ細胞、小圓形細胞、「エオジン嗜好性細胞」ノ浸潤ヲ認メ、多少ノ度ニ於テ結締組織ノ新生及新生血管ニ伴ヘリ。カ、ル變ハ増殖圍邊部ニ於テ顯著ニ認ム。間質ニ於ケル血管、神經纖維ハ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ蒙ムレルモノ無ク、其等ノ周圍ニハ圓形細胞ノ浸潤強ク、血管及神經周圍ノ結締組織ノ多少肥厚セルモノ存ス。斯ノ如ク本例ニテハ極小部分ニテ腫瘍細胞ノ増殖ノ像ヲ呈スルノミニテ、殆ンド大半ハ表面壞死ニ陥リ、淺部ハ肉芽性變旺盛ナリ。腫瘍細胞ノ増殖ハ一般ニ周圍ヲ壓迫シテ、進入シ、健康表

## 第二十一例 附屬醫院皮膚科教室貯藏標本

森下 某、年齡三十六歲、使丁。

### 臨床的記載

父ハ健存シ、母ハ心臟疾患ニテ死亡、同胞五人ノ中四人健存ス、長姉ハ心臟疾患ニテ死亡セリ。患者ノ妻ハ健存セリ。舉子一人健存セリ。大正九年十月十六日頃ヨリ陰莖包皮内面ニ小豆大ノ腫瘍狀物ヲ生ジ、同年十一月六日頃ヨリ漸時増大シ遂ニ包皮外板ノ部ニ破壞セリ。此ノ頃ヨリ惡臭ヲ放ツ分泌物ヲ出ス。十二月十二日某醫ニヨリ惡性癌ナル診斷ヲ受ク、同二十五日病竈ヨリ小組織片ヲ採リ(當病理學教室ニテ検査)扁平上皮癌ノ診斷ノモトニ同日根部ヨリ切斷セリ、患者ハ生來包莖ナリ。

鼠蹊淋巴腺 腫大セルモノ數個大豆大乃至豌豆大ナリ。

原著 和田ニ陰莖癌ニ就テ

皮ニ於テハ腫瘍化セル部ト隣接セル部ニ側性増殖ヲ認ム。此部ニ於テ健康上皮細胞ガ直チニ腫瘍細胞ニ移行スル像ノ如キハ之レヲ認ムルコトヲ得ズ。

核分割像ハ比較的少ク一部浸潤性ニ増殖セル部ニテハ可ナリニ之レヲ認ム、母星期ニ屬スルモノ最多數ニシテ次ニ子星期ノモノ多シ、不相對性ノモノ、三極性ノモノヲ僅ニ認ム、其ノ他不規則ノ分割像ハ認ムルコトヲ得ズ。核部分分割像存在ノ部位ハ主トシテ基底細胞層ニシテ、直接核分割像ハ棘細胞層ノ外層ノ部ニ之レヲ認メシム。

「メラニン色素」狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中ニハ何所ニモ認メズ、又側性増殖ノ部ニ於テモ兩層ニ全ク色素存セズ。

鼠蹊淋巴腺 被膜ハ輕度ノ肥厚ヲ呈シ、淋巴組織中ニハ炎性變ヲ認ムルト共ニ所々結締組織ノ増殖ヲ來シ、腫瘍組織ハ何所ニモ認メズ。

### 肉眼の所見

陰莖ハ先端ヨリ五釐ノ部ニテ切斷セラル。高度ノ包莖ノ狀ニアリ、外板皮膚ハ一般ニ帶褐灰白色ヲ呈セリ。外尿道口ノ部ハ指頭大ニ噴火口狀ヲ呈シ、其ノ部皮膚ハ腫脹シ灰白色ヲ呈セリ。正中線ヨリ右ニ偏シテ根部ニ近ク小兒手掌面大ニ表面ヨリ隆起シテ上皮ノ乳嘴狀ニ増殖セルヲ認メシム。其ノ表面凹凸不平ニシテ灰白色ヲ呈シ、硬度鞏ナリ。該部ニ接シテ指頭面大ノ同様ノ性狀ヲ有スル部存セリ。猶正中線ニ於テ豌豆大ノ同様ノ性狀ヲ有スル部存セリ、上述大ナル腫瘍狀ニ隆起セル部ノ中央ヲ通り割テ施シ割面ニ於テ檢スルニ、龜頭面ハ侵蝕セラレ粗糙トナリ全體トシテ壓縮セラレタル狀ニアリ。包皮内板ノ部ハ白色ヲ呈シ此ノ部上皮ノ増殖甚ダ強ク、胞

巢狀ヲ示シ主トシテ外板部ニ向ツテ侵入セリ。上述外面ノ増殖部ト相連絡セリ、即チ内板上皮増殖旺盛ノ爲メ外板ノ部ニ破出セルナリ、尿道外口ノ部ニアリテ内板上皮増殖旺盛ニシテ外板上皮ヲ侵蝕セリ、其ノ部灰白色ヲ呈セリ。

**鼠蹊淋巴腺** 腫大セルモノ三個現存シ、豌豆大及大豆大ニシテ剖面ニ於テ異狀ヲ認メズ。

### 顯微鏡的所見

本例腫瘍ヲ構成セル上皮細胞ハ正常上皮ニテ見ルガ如キ各層ノ上皮細胞型ヲ具備セリ、殊ニ著明ニ増殖セルハ棘細胞型ノモノトス。増殖ト共ニ細胞ハ増大シ正常ノ細胞ノ約二倍又ハ三倍トナレルモノ存ス。棘ハ屢々著明ニ認メラル、核ハ主トシテ類圓形或ハ橢圓形ニシテ、可染質比較的ニ乏シク核小體ハ一個又ハ二個存セリ。基底層ノ細胞モ其ノ形ハ種々ニシテ配列ノ狀モ亂レタリ、核ハ可染質ニ富ム。カ、ル上皮細胞ヨリナル腫瘍細胞ハ大ナル胞漿ヲ形成シテ周圍ヲ壓迫シツ、組織内ニ不羈ノ増殖ヲ營メリ。角化傾向モ比較的強クシテ所々所謂癌珠ヲ形成セリ胞巢内白血球ノ竄入ハ強カラザルモ、可ナリノ度ニ於テ認ム。間質ハ真皮組織ヨリナリ炎症細胞ノ浸潤著明ニハ非ザルモ存セリ。殊ニ「プラスマ細胞」甚ダ多數ヲ占ム。又結締組織ノ増殖及新生血管ヲ伴ヘリ、而シテルツセル氏小體ハ所々集リテ存セリ。血管ノ腫瘍細胞ニ侵襲セラレタルモノヲ認メズ、腔ハ廣マリ、周圍結締組織ハ多少増殖セルモノ存ス。神經纖維ノ侵襲セラレタルモノヲ認メザルモ、腫瘍細胞増殖ノ周邊部ノ組織中ニ存スルモノハ其ノ周圍ニ細胞ノ集簇著明ニシテ周圍結締組織ハ或モノハ増殖セルガ如シ。腫瘍細胞ハ大ナル胞巢ヲ形成シテ周圍ヲ壓迫シツ、進入セルモノ、一部ニ於テハ不規則トナレル胞巢ハ強ク浸潤性進入ノ像ヲ呈セリ。健康表皮トノ隣接部ノ表皮層ハ側性ノ増殖ヲ認ム。然レドモ此ノ部ニテハ健康上皮層ハ壓迫セラレ、菲薄トナ

レリ。本例ニ於テ興味ヲ感ジタルハ内板上皮増殖ノ外板部ニ正ニ破レントセル部ノ外板上皮ノ態度ナリトス。外板上皮ハ一般ニ反應性ニ強ク増殖ヲ營メルモ、未ダ異型ノ像ヲ呈セズ、又細胞自巳モ異型ヲ呈セズ、腫瘍組織ノ外板上皮ニ甚ダ接近セル部ニアリテハ其ノ部分ノ局限シテ外板上皮乳頭ハ甚ダシク壓平セラレ、且ツ索ハ萎小ノ狀ニアリ、其ノ部ノ上皮細胞ハ一般ニ「ヘマトキシリン」ノ色ヲ濃ク採リ染色ノ調甚ダ一定セズ、細胞個々ハ甚ダ不鮮明ナリ。異型ノ像ヲ呈セズ、核分割像ハ認ムルコトヲ得ズ、所謂同性傳染ヲ認ム可キガ如キ像ニ接セズ。カ、ル部ニアリテハ外板上皮細胞中又ハ其ノ真皮組織何所ニモ「メラニン色素」ヲ認メズ。然レドモ其ノ部ニ隣接セル反應性増殖ヲ營メル外板上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞ヲ認ム、主トシテ基底層ニ占居セルモノ多數ニ非ズ、該部真皮組織中ニハ多數ニ非ザルモ色素細胞ヲ認ム、而シテ真皮中色素存在セル部ニ相當セル上皮中ニハ色素ヲ有セズ、之レヨリ健康上皮ニ向ツテ上皮内主トシテ基底部ハ核ノ周圍ニ「メラニン色素」ヲ認ム。此ノ部真皮部ニハ色素細胞甚ダ稀ナリ、正常表皮ニ於テ色素ハ存スルモ量ハ少ク、此部真皮中色素細胞ハ殆ンド認メラレズ。而シテ側性増殖部及ビ腫瘍組織中ニハ何所ニモ色素ヲ認ムルコトヲ得ズ。

核分割像ハ甚少ク、存スルモノハ主トシテ子星期及母星期ノモノニシテ、不相對性ノモノモ稀ニ認ムルモ、其ノ他ノ不規則ノ分割像ハ認ムルコトヲ得ズ。其ノ部位ハ主トシテ基底細胞中ニアリ。直接核分割像ハ比較的多數ニ存シ棘細胞層ノ上部細胞ニ多シ。

**鼠蹊淋巴腺** 腫瘍細胞ノ轉移ヲ認メズ、唯多少ノ結締組織ノ増殖ヲ認メシメ血管ハ主トシテ赤血球ヲ以テ充ツ、顯著ニ非ザルモ炎症性ノ細胞浸潤アリ。

臨牀的記載

林 某、年六十七歳、雇人。

妻ハ十七年前肺ノ疾患ニテ死亡、舉子三人ノ中一人ハ幼時死亡、一人ハ卵巢腫瘍ニテ死亡。初診ハ大正十年十月二十九日ナリ。本年九月初メ頃ヨリ尿道ヨリ膿ヲ出シ、十月十七日陰莖腫脹發赤シ、同月二十一日自開シ排泄シ、其後少シク輕快セルモ全治セズ、既往症トシテハ五年前陰莖ノ包皮腫脹シ難轉不能トナリ其ノ當時先端ニ小硬結ヲ殘セリト。某醫ニヨリ癌ノ診斷ヲ受ケ、二十九日當科ヲ訪ヒ組織的検査ニヨリ扁平上皮癌ナル診斷ノモトニ直ニ根部ヨリ切斷セリ。

肉眼の所見

高度ノ包莖ノ狀ニアリ、陰莖ハ各部共ニ一般ニ腫脹肥大セリ殊ニ包皮縁ノ部ニ著シ。其ノ周圍最大ナル部ハ一・三・五釐アリ、背側正中線ニ一致シテ先端ニ近ク小兒手掌面大ノ菱形ノ物質欠損部存セリ。中央部ハ表面粗糙ニシテ凹凸不平灰白色ノ汚穢脆キ物質ヲ附着セリ。而シテヤ、萎縮ノ狀ニアリ龜頭ヲ露出セリ。又其ノ周圍ニ於テ包皮深部組織ヲ現セリ、包皮部ハ一般ニ帶紫暗赤色ヲ呈シ、強ク腫脹シ、浮腫狀ヲ呈セリ。硬度ハ一般ニ鞏ナリ。猶腹側ニ於テ二個ノ豌豆大及小豆大ノ淺キ物質欠損部アリ、其ノ面ハ灰白色ヲ呈シ粗糙ナリ。上述大ナル菱形ノ物質欠損部ヲ通リ矢狀斷ヲ施シ、割面ニ於テ檢スルニ、腹側包皮縁ハ僅ニ上皮増殖セルガ如キ灰白色ヲ呈シ、深部組織迄浮腫狀ヲ呈セリ。龜頭表面凹凸不平ナルモ上皮ノ増殖ノ像ハ顯著ナラズ、背側冠狀溝ノ部ハ甚ダ強ク掘鑿ヲ示シ其部上皮ノ増殖強ク殊ニ深部ニ向ツテ不羈ノ増殖ヲ營メリ。肥巢狀像ヲ認メシム。白膜ノ部ニテハ之レヲ壓迫セリ。猶腹側真皮組織中ニ大サ小指頭面大ノ限局セル電ヲ認ム、

原 著 和田ニ陰莖癌ニ就テ

其ノ周圍ハ暗褐色ノ暈ヲ存シ、其ノ内容ハ灰白色脆キ軟ナル物質ナリ、此ノ部肉眼のニ上皮増殖部ト連絡セザルモ甚ダ接近セリ。

顯微鏡的所見

割面ヨリ採取セル組織板ヨリ製作セル標本ナリ。全般ニ通ジテ檢スルニ病變最モ強キハ冠狀溝ノ部ナリ、此部ハ肉眼のニ物質欠損大ナリシ部ニ相當セリ。該部ニアリテハ上皮細胞ハ胞巢ヲ形成シテ異型ノ増殖ヲ營メリ。胞巢ヲ成セル上皮細胞ハ甚ダ一定セズ、其ノ核ノ性狀大サ配列ノ狀ハ不整ニシテ異型ニ富メリ。正當上皮ニテ見ルガ如キ性狀ハ唯一部ニテ認ムルノミ、細胞原形質甚ダ淡染セルアリ、「エオジン」ニ染マレルアリ、核モ亦圓形或ハ橢圓形或ハ紡錘形ニシテ可染質ノ多寡モ不平等ニシテ其ノ配列ノ狀ハ甚ダ亂サル。故ニ一部ヲ除ク他ハ基底棘ノ兩細胞型ヲ區別スルコト能ハズ、核小體ハ一個又ハ二個存セリ、角化層モ可ナリニ存シ此ノ部ニテハ主トシテ多數ノ白血球集在セリ。胞巢ノ或モノニテハ其ノ中央部ニ白血球ノ集在ヲ來シ、角質部ハ破壞セラレカ、胞巢ハ遂ニ囊狀ニ擴ガリ各上皮層ハ壓迫セラレ、細胞ハ壓平セラレタリ。遂ニハ胞巢ノ一部ハ破レ(第三圖)、其ノ形ヲ亂シ肉芽性變ニテ置換セラレ。猶其部ニ多數ノ大小種々ノ不正形ノ巨態細胞出現シ、破壞セル角化片、角化細胞等ヲ貪食セリ。カ、ル部ノ周圍ハ多クハ結構織ニテ圍繞セラレ、肉眼的ニ記載セシガ如キ背側真皮組織中ニ見シ灰白色ノ電ハ鏡下ニテハ明ラカニ腫瘍組織ト連絡セリ。此ノ部ハ多核白血球ノ集簇ニヨリテ成リ、其ノ周圍ヲ圍繞シテ赤血球ノ浸潤アリ。而シ白血球ノ集在セル部ニハ所々點々ト角質片、有核角化細胞ヲ認ム。該部ノ周邊部腫瘍増殖部ト相接近セル部ニ於テ化膿部ノ周邊部ニ腫瘍細胞胞巢ノ破壊セルヲ認ム、而シテ化膿部ノ周圍ニハ肉芽性變旺盛ニシテ、多

數ノ巨細胞出現シ又結締組織ノ新生及新生血管ヲ伴ヘリ。又或胞巢ニテハ全ク壊死ニ陥リ、核ノ染色性ヲ失ヒ、又核ハ破壊シ顆粒狀トナリ、其ノ部多少ノ白血球存在シ猶角質片角化細胞ヲ混在セリ。其ノ周圍ニ於テ大ナル蜂窩狀觀アル細胞多數ニ存在シ、其部ニカ、ル蜂窩狀觀アル細胞核ト同様ノ性狀ヲ有スル數個ノ巨細胞混在セリ。ズダン3ニテ染色シテ檢スルニ兩細胞共多數ノ脂肪滴ヲ有セリ。カ、ル胞巢ノ周圍ハ結締組織ニテ圍繞セラ。該腫瘍組織ノ間質ハ真皮組織ヨリ成リ炎性ノ細胞浸潤強度ニシテ結締組織ノ新生及新生血管ヲ強ク伴ヘリ。ルツセル氏小體モ多少存在セリ。間質ニ於ケル血管ハ腫瘍細胞ニ侵蝕セラレタルモノアルモ、腔内腫瘍細胞増殖ハ認ムルコトヲ得ズ。靜脈管ハ變形セルモノ存スルモ、動脈管ニハ著變無シ猶間質ニ存在セル鞏固ナル結締組織及ヒ筋纖維等ハ肉芽性變ノ爲メニ鬆粗ニセラレタル像ヲ認ム。間質ニ於ケル神經纖維ハ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ蒙ムレルモノヲ認メザルモ周圍ノ圓形細胞ノ浸潤強度ニシテ纖維周圍ノ結締組織ハ多少増殖セルモノ存ス、間質ニ於テ特記スベキハ多數ノ巨細胞ノ出現ナリトス。大小種々ニシテ圓形ナルアリ、不正形ニシテ突起ヲ有セルモノアリ。突起ヲ有セザルモノモ存ス。其ノ位置角化物質ノ周圍ニ又ハ胞巢ニ接著セルアリ。胞巢ノ破壊セル部ニテハ殊ニ多數ニ出現セリ。而シテ巨細胞細胞體中ニハ有核角化細胞、角化物質其他白血球等ヲ保有セリ。核ハ其ノ性狀形態ハ一定セザルモ圓形或ハ橢圓形ニシテ、淡明ニシテ核ノ性狀分明ナルモノト、橢圓形、紡錘形ニシテ核ハ可染ニ富饒ニシテ其ノ性狀ヲ明ラカニセザルモノトアリ。前者ハ一般ニ胞體ノ中央部又ハ胞體中廣ク存在シ、一況ニ大ナリ。又例外無キニ非ザレドモ核ノ數モ多數ナルガ如シ。後者ハ一般ニ胞體ノ周邊部ニ集在セリ。核ノ數ハ多數ナルハ數十個少數ナルハ二個又ハ三個ナリ、核分割像ヲ認ムルコトヲ得ズ。核ノ性狀ハ間質ニ浸潤セル白血球、結締細胞等又ハ上皮細胞ノ核ト其ノ趣ナ異ニシ、間質中ニ多

數ニ出現セル組織球形細胞ノ核ト相類似セリ。上述ノ如キ性狀ヲ有スル腫瘍細胞ハ大小種々ノ胞巢ヲナシテ主トシテ深部ニ向ツテ不羈ノ増殖ヲ營メリ、一般ニ浸潤性ニ組織間隙ニ其ノ進路ヲ採レリ。而シテ周圍ヲ結締組織ニ圍繞セラレタル胞巢ハ其ノ中央部ニ白血球ノ集簇ヲ來シ、種々變ナセリ。海綿體ニ向ツテ進入セル胞巢ハ周圍結締組織ノ強キ抵抗ニ會ヒ、其ノ増殖侵蝕ヲ遲シクスルヲ得ズ多クハ早クヨリ角化變性ニ陥リ、且其ニ白血球ノ集簇及巨細胞ノ出現ヲ來シテ自滅ニ陥レリ、龜頭表面ニテハ肉眼のニ凹凸不平ナル如ク深部ニ向ツテ増殖ハ強大ナラズ、表面ニ沿フテ一般ニ増殖セリ。而シテ此ノ部ノ上皮細胞ハ甚ダ異型ヲ呈セリ。本例ニ於テハ一方ニハ輕度ノ側性増殖ヲ認ムルモ、一方ニテハ認ムルコトヲ得ズ。外板皮膚ト内板表皮トノ境界ニテハ表層ニ於テ壊死像ヲ呈セルモ、深部ニテハ上皮細胞ハ不羈ノ増殖ヲ營ミ、殊ニ腹側ニテハ基底細胞ノ増殖ト認ムベキ胞巢ヲ形成シテ角化傾向ヲ呈セザルモノ浸潤性ニ強ク進入セルヲ見ル。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ腹側包皮外板肉眼上、上皮ノ増殖ヲ認メズ、灰白色ニシテ浮腫狀ヲ呈セル部ハ鏡檢のニハ上皮細胞ノ増殖ハ異型ヲ呈セザルニ、真皮中ニ多數ノ「プラスマ細胞出現セル部」ニ「メラニン色素ヲ認メズ、包皮外板ノ灰白色ヲ呈セズ、浮腫狀ヲ呈セル部」ニ「メラニン色素ヲ認メズ、包皮外板ノ灰白色ヲ呈セズ、浮腫狀ヲ呈セル部」ニ「プラスマ細胞出現セル部」ニ「メラニン色素ヲ認ム。上皮中ノ色素ハ真皮中ノソレヨリモ遙ニ多シ、而シテ背側健康部外板ニハ上皮細胞中多量ノ色素ヲ含有セリ、主トシテ基底細胞中ニ多キモマルビキ一層中ニモ角化層ニ近キ部ニモ核ノ周圍ニ可ナリ多ク色素ヲ含メリ。此ノ部真皮中ニハ色素細胞ハ甚ダ稀ニシテ、含メル量モ甚ダ少シ。上述僅ニ側性増殖ヲ示セル部ニハ、上皮層中各層ノ細胞中ニ(就中基底層ニ多ク)多量ノ色素ヲ含有セリ。此ノ部ニ相當セル真皮中ニハ全ク色素ヲ欠ク、其ノ部ノ一ヶ所ニ上皮層中ニ囊胞ノ存在ヲ認ム、此ノ壁ニ於テ上皮細胞ハ強ク壓縮



セラレ紡錘形トナリ、恰モ内被細胞様ヲ呈セリ。カ、ル上皮細胞中ニモ多量ノ色素ヲ含有セリ。此ノ部真皮中ニハ色素ヲ全ク認メズ。一般ニ腫瘍組織中ニハ何所ニモ色素ヲ認メズ。然レドモ龜頭表面ニ於テ上皮細胞ハ甚ダ異型ニ富ミ、増殖セル腫瘍組織中、腫瘍細胞間ニ小ナル圓形或ハ橢圓形ニシテ比較的淡明ナル核ヲ有シ長キ（メラニン色素ヲ含メル突起ヲ有スル色素細胞ヲ所々ニ多數ニ認ム。色素細胞ハ突起ヲ腫瘍細胞間ニ出セリ。核ハ

## 第二十三例 聖靈病院貯藏標本

石本 某、七十二歳。

### 臨床的記載

遺傳的關係不詳、初診大正六年八月、初診ノ際陰莖ハ既ニ鶏卵大ニ腫大セリ。陰莖癌診斷ノモノニ直チニ根部ヨリ切斷シ、一週間後退院セリ。

### 肉眼の所見

陰莖ハ元形ヲ呈セズ、鶏卵大ノ塊狀ヲ呈セリ、背側ニ一致セル部ニ小兒手掌面大ノ物質欠損部存シ、其ノ部ノ中央ヨリ甚ダ常態ヲ損セル龜頭突出セリ、其ノ面ハ凹凸不平ニシテ粗糙ナリ一部指頭大ニ琥珀色ヲ呈セル石樣ニ硬キ部隆マリテ存セリ。而シテ該物質欠損部ハ全周ニ亘リテ掘鑿セリ。包皮ハ一般ニ腫大セリ、包皮縁部ヨリ腹側ニ亘リテ多數ノ灰白色ノ隆起セル部存シ、其ノ表面ハ噴火口狀ヲ呈セリ。大ナルハ拇指頭大、小ナルハ米粒大ナリ。物質欠損部ヲ通リ割テ施シ、剖面ニ於テ檢スルニ、其ノ縁ハ凹凸ノ度甚ダ強ク、上皮層ハ強ク乳嘴狀ニ胞巢狀ノ像ヲ現シテ深部ニ向ツテ進入セリ。間質ノ部ニ結締組織ノ走行ヲ明ラカニセシム。上皮ノ増殖ハ一部海綿體ノ部ニ及ビ、而シテ組織中ニ不羈ノ増殖ヲ營ミ、外板部ニ存セシ多數ノ腫瘍狀物ト相通セリ。

### 顯微鏡的所見

原著 和田 陰莖癌ニ就テ

明ラカニ上皮細胞ノ核ト區別シ得、而シテ腫瘍細胞中ニハ色素ヲ有セズ。該部ニ相當セル真皮中ニハ色素細胞ヲ何所ニモ認メズ。

核分割像ヲ甚ダ多數認ム、最モ多キハ十星期ノモノナリ、不相對性ノモノ、多極性ノモノ、其他不規則ナル核分割像モ所々存セリ。其ノ存在部位ハ主トシテ基底細胞層ニシテ、棘細胞層ニモ存スルモノアリ、直接核分割像ハ胞巢中心ニ近キ部ニ往々認メラル。

胞巢ヲ形成シテ不羈ノ増殖ヲ營メルハ正常上皮ニテ見ル角化層、棘細胞層、基底細胞層ノ細胞型ヲ有セリ。各上皮層ノ細胞及核ノ性状ハ明ラカニ認メ得ルモノ少ク、多クハ材料舊キ爲メニカ亦固定方法ノ不適ナル爲メニカ、其ノ染色性ハ甚ダシク不真ニシテ、一般ニ萎縮ノ狀ニアリ、極一部ニテ示セル像ニ依レバ上述第十四例、第二十一例等ノ乳嘴型ニテ記載セシ像ト相一致セリ。角化傾向ハ殊ニ強ク、棘細胞型ノ腫瘍細胞ハ胞巢ノ中心部ヨリ外方ニ亘リテ大部分角化傾向ヲ有セリ。基底細胞型ノモノニ於テハ強ク萎縮ニ陥リ、核ノ性状一般ニ不分明ナリ。間質ヲ成セルハ真皮ノ鬆粗結締組織及陰莖深部組織ニシテ、其ノ部ニ新生血管及ビ幼稚結締細胞ヨリナレル肉芽性變強ク現ハレリ、殊ニ「プラスマ細胞」ノ集簇甚ダ強シ、胞巢ハ相互ニ接近シテ間質ハ結締組織ヨリナリ、炎性ノ細胞浸潤ハ弱シ。肉芽性變ハ増殖ノ周邊部於テ顯著ナリ。血管ハ壓迫セラレテ變形シ、動脈管ニハ著變ヲ認メズ。血管ノ破綻及腔内腫瘍細胞ノ進入ヲ認メズ。神經纖維ハ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ蒙ルモノ無ク、其ノ周圍ニ結締組織ノ増殖ヲ見ルモノアリ、周圍ノ圓形細胞ノ浸潤ハ強シ。間質中所々集在性ニルツセル氏小體ノ出現ヲ見ル。一部腫瘍細胞胞巢中ニ白血球ノ集簇ヲ來シ、前諸例屢々記載セシ如キ胞巢ノ變化ヲ認メシムルモ、巨態細胞ハ出現セズ。腫瘍細胞ハ大小種

々ノ胞巢ヲ形成シテ主トシテ周圍ヲ壓迫シツ、増殖チナシ、一部海綿體ノ部ニ及ベリ、此ノ部ニ於テハ胞巢ノ進入ニ先驅シテ鞏固ナル結締組織ノ部ニ強ク圓形細胞ノ浸潤ヲ來セリ。健康表皮トノ隣接部ニ於テ著明ナル側性ノ増殖ヲ認ム。又腫瘍細胞胞巢ノ深部ヨリシテ外方上皮ニ接近セル部ニ於テハ外方上皮ハ一般ニ反應性増殖ヲ營メリ。

核分割像ハ核ノ性狀ヲ認メ得ル部ニテ檢スルニ可ナリ多數ナリ、異型的核分割像ハ甚ダ稀ニシテ、主トシテ母星期及子星期ノモノナリ。存在部位ハ基底細胞型ノモノニ多シ。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中何所ニモ色素ヲ認メズ、正當上皮ニアリテハ多クニ基底細胞核ノ周圍ニ存スルモ亦角化層ニ近キ部上皮細胞中ニモ、棘細胞中ニモ存セリ。此ノ部ノ真皮中色素細胞多數ニ存セリ。而シテ真皮乳頭中色素細胞多數ニ存在セル部ニ相當セル上皮細胞中ニ毫モ

藤野 某、五十七歳。

## 臨床的記載

遺傳的關係不詳、大正六年四月、陰莖冠狀溝ノ部ニ小ナル硬結ヲ生ジ、次テ表面潰瘍トナレリ。硬結ハ龜頭全部ニ廣ガリ六月末ニハ龜頭著シク膨大セリ。大正六年七月陰莖癌診斷ノモトニ根部ヨリ切斷セリ。同時ニ腫大セル鼠蹊淋巴腺全部ヲ摘出セリ。然ルニ九月頃ニ右鼠蹊部ニ硬結ヲ生ジ、其際陰莖ハ何等ノ異狀ヲ認メズ。切斷端ニ癰疽形成ヲ以テ治癒シタリ。右側鼠蹊腺ハ次第二腫大シ、六年末ニ左側ニモ鼠蹊腺腫大ヲ來シ、七年ニ入りテ惡液質ノ爲メニ死ノ轉歸ヲ取レリ。

## 肉眼の所見

陰莖ハ包莖ノ狀ヲ呈シ、色ハ一般ニ帶褐黃色ニシテ浮腫狀ヲ呈シ、硬度

## 第二十四例 聖靈病院貯藏標本

色素ヲ含有セズ。正當上皮ヨリ側性増殖ノ部ニ向フニ從ツテ上皮細胞中ノ色素ハ認メズシテ、上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞出現セルヲ認ム。猶少數ナルモ、上皮細胞中核ノ周圍ニ色素存セルモノアリ。此ノ部ノ真皮中ニハ概シテ色素細胞ヲ認メズ、存スルモ甚ダ稀ナリ。腫瘍組織ニ甚ダ隣接セル部ノ側性増殖ノ部ニハ上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞存セリ、此部真皮中色素細胞全ク欠ク、龜頭表面ニ於テ上皮一部變性ニ陥リ一部異型ニ非ザルモ増殖セル部存ズ。變性ニ陥レル部ハ兩層ニ色素ヲ認メズ、増殖セル部ハ上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞多數ニ認ム。此ノ部真皮中ニ色素細胞ノ存セルチ一部ニ於テ認ム。之レヨリ腫瘍増殖部ニ向フニ從ツテ真皮中ノ色素細胞ハ消失シ、上皮細胞間ノ分歧セル色素細胞ハ猶存スルモ、増殖旺盛ナルバ總テ消失スルニ至ル。外方表皮ノ反應性増殖部ノ色素ノ狀態ハ正當表皮部ニ於ケルト同様ナリ。

軟ニシテ壓ニヨリテ壓痕ヲ殘セリ。右側包皮縁ハ小指頭大ニ甚ダシク鞏ニ觸レ、其ノ面凹凸不平ニシテ甚ダ粗糙ナリ。其ノ他包皮縁ハ浮腫狀ヲ呈シ軟ナリ、猶右側外板皮膚ハ一般ニ少シク膨隆シ、表面緊張シ硬鞏ナリ。此ノ膨隆セル部ノ中央ヲ通り割テ施シ、剖面ニ於テ檢スルニ右側包皮内板ノ部ハ龜頭組織ニ亘リ灰白色ノ周圍ヨリ比較的限局セル部存ス。此ノ部ハ内板上皮ハ強ク増殖ヲ營ミ、深部組織ニ向ヒ一方ニハ包皮縁ニ向ツテ胞巢狀ヲナシテ進入増殖セル像ヲ示セリ。包皮縁ノ部ニテハ上述小指頭大ノ鞏ナル部ニ續ケリ。此ノ部ハ冠狀溝ノ部ニテモ上皮ハ深部ニ向ツテ増殖ノ像ヲ呈セリ、爲メニ龜頭ハ一般ニ左側ニ壓セラレタル位置ニアリ。

## 顯微鏡的所見

本腫瘍ヲ形成セル細胞ハ主トシテ右側包皮内板ヨリ増殖セルモノナリ。

材料甚ダ舊キ爲メカ、固定ノ不適ナリシ爲メニカ、其ノ細胞ノ性狀ヲ明ラカニ認ムルコトヲ得ズ。腫瘍細胞ハ一般ニ異型ニ富ミ、核ノ微細構造ヲ認ムルコトヲ得ザルモ、核ノ大サ、境界ハ認メ得。核ハ一般ニ圓形或ハ橢圓形或ハ富稜形ナリ、一個又ハ二個ノ核小體ヲ有ス。核ノ性狀ヲ明ラカニシ得ルモノニテハ核ハ一般ニ可染質ニ富ミ、可染質ハ網狀ヲ呈セリ。正常上皮ニ於ケルガ如ク明ラカニ各層ヲ區別スルコトヲ得ズ、角化傾向ハ殆ンド無キガ如シ。胞巢ノ狀ハ所ニヨリ認メ得、又核ハ顆粒狀ヲ呈セルモノ細胞ハ空胞變性ヲ來シ爲メニ核ヲ一方ニ壓迫セルアリ。猶細胞體內多數ノ小空胞現ハレ、蜂窩狀ヲ呈セルアリ。又核ノ性狀全ク不明ナルモノモ存ス。胞巢ノ不明ナル部ニアリテモ上述ノ如キ腫瘍細胞ハ相並ンテ存セリ。腫瘍細胞異型ノ増殖ノ爲メニ間質ニハ僅少ノ結締組織束及血管ヲ殘セルノミ、其部圓形細胞ノ浸潤ヲ認ムルモ其ノ性狀ヲ明ラカニセズ。血管内ニハ多少ノ赤血球ヲ容ルモ、腫瘍細胞ハ其ノ壁ニ於テ索ヲ作ラズ主トシテ個々浸入シ壁ヲ甚ダシク鬆粗ナラシメ、又途ニハ之ヲ侵蝕シ腔内腫瘍細胞ノ進入ヲ認ムル事ヲ得。猶間質ノ部ニ多數ノ幼稚結締細胞ノ存在セルヲ認ムル部アリ。腫瘍細胞増殖ノ周邊部ニ存スル眞皮組織ハ多少ノ圓形細胞ノ浸潤ヲ認ムルト共ニ結締組織ノ増殖及新生血管ヲ伴ヘリ、間質ニ於ケル神經纖維ニ於テ鞘内ニ間隙ヲ有スルモノアリ。腫瘍細胞ハ一部ニ於テハ胞巢ノ形ヲナシテ増殖セルモ、一般ニ甚ダ不規則ニシテ腫瘍細胞ハ個々或ハ一列ヲナシテ浸潤性ニ組織間隙ニ進路ヲ取りテ侵入セリ。内板上皮ノ表面ハ一般ニ核ノ染色性ヲ失ヒテ壞死像ヲセリ。龜頭表面ニテハ明ラカニ側性ノ増殖ヲ認

ム。猶又上皮細胞ノ増殖強キ包皮縁ニ於テ之レニ相接近セル包皮縁ニモ多少ノ度ニ於テ上皮細胞増殖ヲ示セリ。何所ニモ正常上皮細胞ガ直チニ腫瘍細胞ニ移行セルガ如キ像ハ認ムル事ヲ得ズ。

「メラニン色素ノ狀ヲ觀ルニ、腫瘍組織中何所ニモ色素ヲ認メズ。側性増殖ノ部ニテハ上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞多數ニ主トシテ基底部ニ占居セリ。此ノ部眞皮中ニ色素細胞全ク認メズ。増殖無キ正常上皮ノ部ニテハ上皮細胞中ニ存セル色素ハ少量ニシテ、上皮細胞間ニ分歧セル色素細胞多數ニ存セリ。健康上皮層ニ於テ一般ニ上皮細胞ハ空胞ヲ有シ、核ハ一方ニ壓迫セラレ猶細胞ノ配列ヲ亂シ、配列粗トナル部ニ於テ眞皮、上皮兩層ニ色素ヲ認メズ。猶上皮細胞異型ノ増殖ヲ呈セル包皮縁ノ對側包皮縁上述記載セシ如キ多少ノ上皮細胞ノ増殖ヲ呈セル部ニ上皮細胞中及細胞間ニ多少ノ色素顆粒及ビ突起ヲ有セル色素細胞ヲ有ス、此ノ部眞皮中ニ色素細胞ヲ認メズ。肉眼的ニ左側皮膚隆マレル部ノ表皮即チ深部ヨリ腫瘍組織ノ接近セル部ノ反應性増殖ヲ示セル部ノ上皮細胞中ニ色素存セルモノアリ。此ノ部眞皮中ニモ所々色素細胞ヲ認ムルモ、其ノ數ハ甚ダ少シ、正常上皮ニアリテハ、一般ニ基底部上皮細胞核ノ周圍ニ多量ノ色素ヲ含有セリ。又マルヒギ層ノ細胞中ニモ多少ノ色素ヲ含メリ、此部眞皮中ニハ多數ノ色素細胞ヲ有ス。

核分割像ハ明ラカニ認メ得ザルモ、認メ得ル部ニテハ甚ダ多數ナリ。母星期ノモノノ子星期ノモノノ多シ。存在部位ハ間質ト相接セル細胞ニ多クアリ。

以上記載セル諸例ニ就キ、其要點ヲ集メ表示スレバ左ノ如シ。

一四〇

第十七例	不詳 不詳	包莖ニ非ズ	右側冠狀溝	限局シテ深部ニ主トシテ増殖セリ。一部壓迫性一部浸潤性、角化強シ。	多シ	基底層ニ	不詳	側性増殖ヲ認ムメズ
第十六例	不詳 不詳	包莖ノ狀ニ非ズ	龜頭表面	主トシテ表面ニ沿ヒテ乳嘴狀増殖一部深部ニ浸潤性ニ侵入セリ、尿道チ壓迫シ尿道上皮一部壓縮セラレ一部増加セリ	多シ	基底層ニ個ノモノ一ス分割亦存ス	鼠蹊淋巴腺指頭大	側性増殖著明ニ同性傳染ヲ認ムメズ
第十五例	不詳 不詳	包莖ノ狀ニ非ズ	繫帶部	主トシテ表面ニ沿ヒテ深部ニ壓迫性ニ増殖シ、一部潰瘍ヲ形成セリ、尿道ニ及ベリ。	多シ	基底層ニ異型分割	不詳	染色認メズ
第十四例	不詳 不詳	包莖ニ非ズ	龜頭表面?	一汎ニ表面ニ沿ヒテ乳嘴狀ニ壓迫性ニ増殖シ、又一部深部ニ及ビ海綿體ノ一部侵蝕ス	多シ	材料舊キ爲メ分明ナラザルモ主トシテ基底層ニ於テ認ム	不詳	染色認メズ
第十三例	不詳 不詳	破壊的増殖カ強ク不明ナリ	明ラカニセズ	廣キ部分ニ巨リ物質欠損ヲ生シ、深型ニ富メル上皮下細胞ハ主トシテ認メズ、基底細網ノ如キ像ヲ呈ス、浸潤性増殖。	多シ	基底層ニ異型分割	鼠蹊淋巴腺指頭大	側性増殖著明ニ同性傳染ヲ認ムメズ
第十二例	不詳 不詳	高度ノ包莖	包皮内板	表面ニ強く又深部ニモ乳嘴狀壓迫性浸潤性ニ増殖セリ。	多シ	基底層ニ異型分割	鼠蹊淋巴腺指頭大	側性増殖著明ニ同性傳染ヲ認ムメズ
第十一例	七十歳 農業	先天性包莖ナリシモ現在包莖ヲ呈セズ	腹側包皮内板	表面ニ沿ヒテ強く又深部ニモ強く乳嘴狀ニ壓迫性ニ増殖セリ一部浸潤性ニ。	多シ	基底層ニ	兩側鼠蹊淋巴腺指頭大	側性増殖著明ニ同性傳染ヲ認ムメズ

第十八例	不詳	包莖ニ非ズ 龜頭表面、包皮内板、	表面ニ沿ヒテ殊ニ外方ニ乳嘴樣増殖著明ナリ。	基底部多シ	不詳	側性増殖著明ナルヲ示メズ 肉芽組織チ示シ巨細胞出現セリ。
第十九例	四十歳	生來包莖ナリシモ癰發生前半年手術ヲ受ケタリ	潰瘍形成セリ、主トシテ深部ニ増殖シ、上皮細胞異型ニ富ム、一部ニ於テ基底細胞癆ノ如キ像ヲ呈セリ。	基底層ニ多シ又異型分割多シ	鼠蹊淋巴腺腫大セルモノ數個、擡指頭大シ、轉移認メズ、轉強ク結締織増加セリ	二十年前淋疾ヲ經過ス、胞巢ノ中心部に間質ニ多量ノ巨細胞出現ニ血管内ニ巨細胞胞現ニ認ム。
第二十例	三十歳	農業 莖高度ノ包	表面ハ一汎ニ壊死ニ陥リ一部ニア上皮細胞ノ増殖強キヲ認ム。乳嘴狀ヲ呈シテ壓迫性に進メリ。	基底部ニ認ム	鼠蹊淋巴腺腫大セルモノ三個、破膜及内結締織增加セリ、轉移認メズ	十七八歳ノ時ニ淋疾ヲ經過シ副睪丸炎ニカレ、胞巢破レテ肉芽組織來リ異物巨細胞多數ニ認ム。
第二十一例	三十歳	使丁 生來高度ノ包莖	主トシテ表面ニ強く乳嘴狀ニ壓迫性増殖セリ。又深部組織モ強く侵蝕セリ。	一汎ニ少シ、基底部ニ認ム	鼠蹊淋巴腺腫大セルモノ三個、豆大、轉移認メズ、結締織増加セリ	
第二十二例	六十歳	雇人 包莖ノ狀ニアリ	深部ニ強く浸潤性ニ増殖セリ、海綿體部ヲ侵蝕セリ、上皮細胞異型強シ。	基底部ニ認ム、異型分割多シ	不詳	息女卵巣腫瘍ニテ死亡
第二十三例	七十歳	包莖ノ狀ニアリ	表面ニ沿ヒテ乳嘴狀ニ壓迫性ニ増殖セリ、深部組織モ破壊セリ、尿道部ニ及ヘリ。	材料舊キタメ不明	側性増殖ヲ認ム	
第二十四例	五十歳七歲	包莖狀ニアリ 右側包皮内板、冠狀溝	主トシテ深部外板眞皮及冠狀溝部ニテ深部ヲ侵蝕セリ、上皮細胞異型ヲ呈セリ。	材料舊キ爲メ不明	側性増殖ヲ認ム	四月冠狀溝部ニ小硬結ヲ生ジ潰瘍面ヲ生ジ龜頭全部硬化シ且膨大著明、七月病診斷ノ下大著切斷、同時二種大ヘル兩側鼠蹊腺別出九月右側鼠蹊腺再腫大硬結年惡液質ヲ來シ死亡。

### 三、考 案

(イ) 頻度 陰莖癌ハ稀有ナルモノニ非ザルガ如シ、全癌患者數ニ對スル統計ノ文獻ニ現ハレタルモノ次ノ如シ。

Paget u. Sibly	一・%	Fischer	二・七%	Küttner	二・二七%
Schick	二・四%	Winiwarter	二・五五%	Jäglmeier	二・六%
Buday	二・六%	Billroth	三・〇一%	(以上茂木 <sup>(58)</sup> 氏ニ據ル)	
山 極 <sup>(102)</sup>	一・二六%	Charité (一九〇四—一九〇八)	〇・二八%	Charité (一九〇九—一九三三)	〇・一七%
Redlich	〇・一%	Feilchenfeld	〇・一%	Riechelmann	〇・三% (以上Bejach <sup>(6)</sup> ニ據ル)
茂 木 <sup>(54)</sup>	二・九八%	飯 塚 <sup>(35)</sup>	三・〇五%	佐 藤 <sup>(77)</sup>	一・六〇%

更ニ男子癌患者數トノ比較ハ左ノ如シ。

Reiche	〇・三四%	Ruglisch	一・八一%	Gurlt	四・〇%
William	四・〇%	Schick	四・五%	Küttner	四・六八%
Jäglmeier	五・一五%	Billroth	五・五二%	(以上茂木氏ニ據ル)	
Kaufmann <sup>(55)</sup>	五・五二%	飯 塚(前出)	五・〇%	茂 木(前出)	四・二八%
三 輪 <sup>(56)</sup>	一・〇・五九%	Redlich (Bejachニ據ル)	〇・三五%	Feilchenfeld (上同)	〇・四%
Riechelmann (上同)	〇・六%				

筒井氏<sup>(85)</sup>ニ據レバ陰莖癌ハ表皮癌中第一位ヲ占メ、即チ七十三例ノ中二十九例ハ陰莖癌ニシテ三九・七%ニ當ルト。

余ガ諸例ハ其ノ出所一定セズ、又記載ノ不充分ノモノアリ爲メニ其ノ統計ヲ舉グルニ由無キヲ遺憾トス。

(ロ) 陰莖癌ト年齢トノ關係

(503)

Ortite 引 用

著者		C r e i t e 引 用								茂木(前出)		坂口(78)
年 齡		Demargay	Kantmann	Viellier	Zhelevitz	Heimann	Küttner	Mauntenffel	Tegtmeyer			
二一三〇	九		五	二	一	四	三	一	一	一	四	
三一四〇	一四		九	九	六	〇	三	三	二	四	三	
四一五〇	一八		三二	二七	一五	二一	一八	九	二	四	二	
五一六〇	二三		四五	二七	一五	四一	一八	一	八	四	六	
六一七〇	二三		二七	二〇	七	三三	一四	三	九	二	一	
七一八〇	一〇		九	九	三	二五	二	三	三	一	一	
八一九〇	一		三	一	一	一	一	一	一	一	一	
總 數	九七	一三〇	九五	四七	一三四	五九	三〇	二四	一六	一五		

十九歲以前ノ者

無  
シ

二十歳—二十九歳ノ者

例

三十歳—三十九歳ノ者

## 二 例

四十歲——四十九

## 四 例

五十歲—五十九歲ノ者 六

六十歲—六十九歲ノ者 八例

七十歳—七十九歳ノ者 二 例

最低年齢二十七歳ニシテ最高年齢七十八歳ナリト。一般ニ癌腫ガ高年者ニ發生スル事ノ屢々ナルガ如ク、陰莖癌モ

亦年少者ニ甚ダ少ク、多クハ中等以後ニ發生スルモノナルヲ知ルベシ。即チ上記ノ表ヲ通覽スレバ四十歳ヨリ七十歳

ニ最モ多數ナルガ如シ。Bufagin (茂木氏(前出)ニヨル)ハ六十歳臺ノ者ニ最モ多シトシ、Barney (茂木氏ニヨル)ハ

百例ノ中最低年齢ハ二十五歳ニシテ最高年齢ハ八十三歳ナリシト。Osteo (前出) ハ二歳ノ小兒ニ發生セル陰莖癌ヲ報

告セルモ、茂木(前出)、岩崎<sup>(37)</sup>氏等ハ之レヲ癌ニ非ストセリ。岩崎氏(前出)ハ十五歳ノ少年ニ發生セル陰莖癌ヲ記載



シ、世界中唯一ノ少年ニ發生セル陰莖癌腫例ナリトセリ。三輪氏(前出)ハ五十歳ヨリ六十歳ノ間ニ最も多ク總數ノ三分ノ二ヲ占ムトナセリ。鈴木氏<sup>(79)</sup>ノ記載ニ據レバ陰莖癌患者ノ平均年齢ハ五〇・七歳ニシテ、最高年齢六十九歳、最低年齢三十二歳ナリト。余ノ例ニ於テハ貯藏標本ヲ用ヒシ爲メ其ノ記載ノ明カナラザリシモノ多ク、年齢ノ明ラカナルモノハ唯八例ニシテ其ノ年齢ハ次ノ如キモ、モトヨリ之レニヨリヒロク其ノ年齢關係ヲ云爲シ得ザルナリ。

三十一歳—四十歳ノ者 三例 四十一歳—五十歳ノ者 一例 五十一歳—六十歳ノ者 一例  
六十一歳—七十歳ノ者 一例 七十一歳—八十歳ノ者 二例  
最高年齢ハ七十四歳ニシテ最低年齢ハ三十六歳ナリ。

#### (ハ、陰莖癌ト職業トノ關係)

或種ノ癌腫ガ其ノ職業ト密接ナル關係ヲ有スルモノナル事ハ屢々認めラル事實ニシテ、陰莖癌ニアリテハ亦局所ヲ不潔ニスル事ガ其ノ發生ヲ促シ、本病ノ發生原因上看過スベカラザル事ナリトス。Kuttner(茂木氏ニヨル)ハ陰莖癌ガ一般下流社會ニ多カルベキ事ヲ揚言セリ。Euljage(茂木氏ニヨル)ハ本病ニ關係アル職業トシテ商人、僧侶、農夫、厨夫ヲ舉ゲタリ。茂木氏(前出)ハ『局所ヲ不潔ニ處置スル事ニヨリ本病ノ發生ヲ促スベキ』ヲ論ゼリ。余ノ例ニアリテハ職業ノ記載セラレ居ルハ唯五例ノミ、其ノ中三例ハ農夫ニシテ、他ハ使丁、雇人ニシテ下流社會ニ屬セシムベキモノナリ。

#### (ニ、陰莖癌ノ臨床的經過)

陰莖癌ハ初メ小硬結トシテ生ジ、又疣贅トシテ、稀ニハ初メヨリ潰瘍ヲナシテ生ジ、漸時増殖蔓延シ或者ハ乳嘴性増殖ヲ營ミ、或ハ潰瘍強く進ミ物質缺損益々深ク終ニ強く陰莖ヲ侵蝕シ惡液質ヲ起シ所々轉移ヲ來シ鬼籍ニ陷ラシムルモノナリ。然レドモ陰莖ノ位置的關係上元來外表ニ存スル臓器ナルヲ以テ其ノ治療の處置他ノ内臓癌ニ比シテハ早ク且ツ容易ニ爲サルルガ爲メ、惡液質ヲ將來シ死ノ轉歸ヲ取ルモノハ少シ。而シテ早期ニ鼠蹊腺及ビ骨盤腔淋巴腺ニ

轉移ヲ來ス事往々之レアルモ、内臟臟器ニ轉移ヲ爲スハ極メテ稀有ノ事ニ屬ス。Barney (茂木氏ニヨル) ハ百例ノ陰莖癌中十五例ニ於テ内臟ニ轉移ヲ爲セルモノヲ記載セリ。Kaufmann<sup>(35)</sup> ハバーゼル教室ニ於テ鼠蹊腺、皮膚、筋肉、肝臟、肺臟、心臟ニ轉移ヲ爲セル陰莖癌ノ例ヲ見タリト。余ガ諸例ニハ淋巴腺ヲ檢シ得タルモノ少ク、亦剖檢ヲ經タルニアラザレバ内臟ノ轉移ヲ否定シ得ザルモ、鼠蹊淋巴腺ニ轉移ヲ爲セルモノ數例ヲ見タリ。唯一例ニ於テ轉移ノ爲メニ鬼籍ニ陷レルモノアリ、即チ陰莖癌診斷ノモトニ陰莖ヲ切斷スルト共ニ腫大セル鼠蹊淋巴腺ヲ全部摘出セリ、其ノ後二ヶ月位シテ右側鼠蹊腺ノ腫大ヲ來シ次第ニ増大シ三ヶ月位シテ左側鼠蹊腺モ亦腫大シ、増大ト共ニ全身惡液質ニ陥リ、遂ニ死ノ轉歸ヲ取レリ。尙ホ余ノ例ニ於テ臨床的記載ノ明ラカナルモノノ中、最初小硬結ヲ生ジテ發生セシモノ三例、初發潰瘍ナリシモノ三例ナリ、一例ハ腫脹發赤ヲ初發トセリ。初發性變ヲ發シタル後癌ノ診斷ノ下サル迄ノ經過ハ甚ダ不規則ナルガ如シ。余ノ例ニ於テハ初發ヨリノ經過時日ハ三例ニ於テ三ヶ月ニシテ、一例ハ四十日、二例ハ五年乃至六年、尙ホ一例ハ三年ヲ經過セリ。此ノ場合經過中ニ生ジタル外傷、其他被害素因ノ高進ニヨリテ其ノ經過ヲ早メルモノナルガ如シ。

### (ホ、陰莖癌ノ發生部位)

Barney, Englisch (茂木氏ニヨル) ハ主トシテ龜頭ニ發生スト、Purtsch (茂木氏ニヨル) ハ龜頭冠狀溝ニ發生スルモノ最モ多シト、Jugmeyer (前出) ハ二十二例ノ中包皮ニ占居セルモノ七例、龜頭及ビ包皮内面ニ亘リテ發生セルモノ五例、陰莖ノ大部分ニ亘レルモノ四例、陰莖全部缺損セルモノ二例ナリシト。茂木氏(前出) ハ龜頭ニ發生セシモノ十六例、包皮ニ發生セシモノ四例、龜頭及ビ包皮ニ亘レルモノ九例ナリシト。余ノ例ニアリテハ

龜頭ニ發生セルモノ	四例	冠狀溝ニ發生セルモノ	六例
龜頭表面及ビ包皮内面ニ亘レルモノ	六例	龜頭及ビ冠狀溝ニ亘レルモノ	一例
包皮内板ニ發生セルモノ	六例	包皮内板及ビ冠狀溝ニ亘レルモノ	一例

## (一) 陰莖癌ノ分類

Kaufmann (前出)ハ陰莖癌ノ經過及ビ其ノ形態ヨリシテ次ノ如ク分類セリ。

### (1) 乳嘴性癌 Papillärer Krebs

### (2) 浸潤性又ハ潰瘍性癌 Infiltrierender od. Ulceröser Krebs.

Waldayer<sup>(8)</sup>ハ乳嘴性癌ヲ Carcinoma granulatum ト名ケ。Kühner (Kaufmann ニヨル)ハ稀有ナル型トシテ nicht papillärer Krebs ヲ區別セリ。Partsch (前出)ハ其ノ發生部位ヨリシテ包皮癌及ビ龜頭癌ト類別セリ。茂木氏(前出)ハ

陰莖癌ノ經過及ビ其ノ形態ニ就キ精細ナル検査ヲ試ミ、乳嘴型、結節型、潰瘍型トニ分類シ、三型ノ間ニハ移行型存シ、判然タル境界ヲ定ムル事能ハズ概シテ第一型ニ屬スルモノハ比較的良性ニシテ、第三型ハ最モ惡性ナルモノトシ、第二型ハ其ノ中間ニ位スルモノナリトセリ。余ハ茂木氏ノ分類セル所ニ從ツテ記載スベシ。

乳嘴型ニ屬スルモノ

十三例

結節型ニ屬スルモノ

二例

潰瘍型ニ屬スルモノ

七例

一部潰瘍型一部乳嘴型ナルモノ

二例

ヲ見タリ。更ニ其ノ發生部位ト比較スルニ、

乳嘴型ニ屬スルモノノ中

包皮内板、龜頭表面ニ發生セルモノ 四例

龜頭及ビ冠狀溝ニ發生セル者 一例

龜頭表面ニ發生セル者 三例

包皮内板ニ發生セル者 五例

結節型ニ屬スル者ノ中

冠狀溝ニ發生セル者 二例

潰瘍型ニ屬スル者ノ中

冠狀溝ニ發生セル者 四例

包皮内板ニ發生セル者 一例

内板及ビ冠狀溝ノ部ニ發生セル者 一例

陰莖ハ強ク破壊セラレ不明ナルモノ 一例

而シテ乳嘴型ニ屬スルモノハ包皮内板ニ最も多ク發生シ、結節型ニ屬スルモノ及ビ潰瘍型ニ屬スルモノハ冠狀溝ニ發生スルコト最も多シ。

### (ト)、癌腫實質細胞

乳嘴型ニ屬スルモノニアリテハ正常上皮ニ於ケルト同様ニ概シテ各上皮細胞層ノ細胞型ヲ有シ、上皮細胞ノ數量的關係及ビ大サ等ニハ差異存スルモ、甚ダシキ異型ヲ呈セズ。潰瘍型ニ屬スルモノニテハ正常上皮ノ像ト甚ダシク趣キヲ異ニシ、甚ダ不規則ニシテ實質細胞自個モ甚ダシク異型ニ富ミ、其ノ増殖モ常ニ破壊性亦ハ浸潤性ナリ。

### (チ)、癌腫細胞ノ増殖

#### (其一)、核分割像

曩ニ[10]ニ(山極氏ニ據ル)ハ癌腫細胞中ニ過元ノ染色質ヲ有スルモノ及ビ染色質ニ乏シキ者ノ存在ニ早クモ着眼シ、且ツ表皮細胞層内ニ白血球ノ迷遊セルヲ認め、癌腫細胞ノ染色質ノ多キハ白血球ノ表皮細胞内侵入ニヨリテ由來セルモノナリトシ、白血球ト表皮細胞トノ關係ヲ精蟲ト卵細胞トノ結合現象ニ比較セリ。斯ノ如キ奇怪ナル假說ハ今ヤ顧ル者無シ。V. Hausmann<sup>(31)</sup><sup>(32)</sup>ハ癌腫細胞ニ於テ染色質ノ多寡ノ存スルハ核ノ間接不相對性分割ニ由來ス、而シテ癌腫細胞ノ多型及ビ大小不同モ不相對性核分割ニテ説明シ得ベシト論ジ、尙ホ不相對性核分割ノ根據ヨリシテ細胞退化說ヲ案出シ、引ヒテ癌腫ノ發生ヲ説明セリ。Struchiner<sup>(33)</sup>ハ不相對性核分割像ヲ癌腫組織ノ外肉腫及ビ角膜炎性再生並ニ増殖組織ニ於テモ認ムルヲ以テ癌腫ニ固有ニ非ズトシ、癌腫組織發生上特殊ノ意味ヲ有スルモノニ非ズト論駁セリ。爾來不相對性核分割ハ病的増生組織殊ニ核分割多數ナル場合ニ出現スルコトアルハ殆ンド諸家ノ是認スル所ナリ。近時池松氏<sup>(34)</sup>ハ不相對性核分割ニ就キ精細ナル検査ヲ爲シ、腫瘍細胞殊ニ惡性強度ノモノニアリテハ眞性不相對性核分割像ヲ多數認め、氏ノ検査セシ非腫瘍組織ニ在リテハ眞性不相對性核分割像ヲ認ムルコト能ハズ、人工的產物ナル假性不相對性核分割像ハ認め、而シテ眞性不相對性核分割ハ生理的細胞ノ退化變遷ニ由來セルモノニシテ、腫瘍發生上大ナ

ル關係ヲ有スルモノナリトセリ。余ノ例ニアリテハ不相對性分割像ハ主トシテ潰瘍型又ハ乳嘴型中惡性ノ態度強ク現ハルル者ニ於テ常ニ多數ニ認ム、乳嘴型ノ良性ナルモノニテハ認メザル事アリ。(Catsaris<sup>(6)</sup>)ハ良性乳嘴性上皮腫ニ於テ核分割ノ關係ヲ檢シ良性乳嘴性上皮腫及ビ尖圭濕疣ニテモ核分割像ヲ認ム、而シテ核分割像ハ主トシテ大部分圓柱狀細胞層ニ存シ、一部ハ棘細胞層ニ於テモ存スト。長與氏<sup>(66)</sup>ハ乳嘴腫及ビ癌腫ニ就キ核分割像ノ部位的關係ニ注意シ、前者ニ於テハ核分割像ハ表皮細胞ノ中層上層ニモ多ク、癌腫ニテハ基底細胞ノ形態變化以外ニ核分割像ガ此ノ部ニ多シト、而シテ腫瘍ノ良惡ノ差別ニ對スル注意トシテ核分割ノ所在モ亦注意スベキ要アリト説ケリ。市川氏<sup>(40)</sup>ハ人工的發生腫瘍ニアリテハ乳嘴腫トナラザル上皮達型の増殖ヲ起ス時ハ核分割像ハ基底細胞ニ多キモ、亦上皮中層ニモ可ナリ多キ時ニ、已ニ角化セントシツアルガ如キ表層近クニモ核ノ分割像ヲ見ルコト少ナカラズ。「バビローム」狀物、小「バビローム」ニテハ尙ホ殆ンド同様ナルモ、豌豆大ノ「バビローム」ニテハ基底細胞ニ核分割像多シトナセリ。余ノ癌腫例ニ於テハ核分割像ハ主トシテ表皮深層ノ基底細胞ニ於テ多數ニ認メ、棘細胞型ヲ有スルモノニ於テハ前者ニ比シテ少ナキガ如ク、長與氏(前出)ノ所説ト一致ス。而シテ核分割像ノ時期的關係ニ就テハ子星期及ビ母星期ニ屬スルモノヲ常ニ諸例ニ於テ多數ニ認ム。多極性其他ノ不規則ナル異型の核分割像ハ腫瘍細胞ノ發育旺盛ニシテ惡性態度強キモノニ多ク認ム。直接核分割像ヲモ亦屢々認メシメ、殊ニ表層ノ角化層ニ近キ部ニ多キガ如シ。尙ホ各例ニヨリテ核分割像ノ多キモノト少キモノト存ス。其ノ多寡ニ就テ、押川氏<sup>(69)</sup>ハ核分割像ノ數ハ其ノ原因ノ何レナルヲ問ハズ剔出後時間ノ經過ニ伴ヒテ其ノ數ヲ減ズルモノナリト論ゼリ。余ノ例ニ於テハ此ノ關係アランカナレドモ確定スルヲ得ズ。

## (其二)、癌腫細胞ノ血管ニ對スル態度

血管ハ腫瘍殊ニ惡性腫瘍組織ノ増殖ニ對シテ特殊ノ意義ヲ有スルモノニシテ、尙ホ腫瘍周邊部ニ屢々存スル血管ノ新生、増殖ノ意義ニ就テハ古來論議ノ存スル所ナリ。Goldmann<sup>(24)</sup>ハ癌腫ニ於ケル血管壁ノ精細ナル檢査ヲナシ、癌腫初期ニ於テ血管壁ニ癌性變化ヲ來シ一般ニ小動脈ノ侵襲セラレザルニ靜脈管ハ已ニ廣汎ナル侵襲ヲ受ケタル狀態ニア

リ、而シテ動脈外膜炎、靜脈內膜炎等ノ變化ヲ來スモノナリト。田中氏<sup>(8)</sup>、菊地氏<sup>(11)</sup>ハ亦之レヲ承認セリ。菊地氏(前出)ハ癌性動靜脈炎ハ畢竟血管ノ外方ヨリ侵襲ヲ受ケタル時ニノミニ適合スト云フ方穩當ナリトセリ。余モ亦第一例、第六例、第十三例ニ於ケル所見ヨリ菊地氏(前出)ト同様ニ考フルモノナリ。癌腫細胞ノ血管內侵入徑路トシテ Goldman<sup>(12)</sup>(前出)ハ主トシテ壁ノ榮養血管ニヨルモノナリトセリ。菊地氏(前出)ハ亦榮養血管ノ外ニ淋巴道ニヨルモノ、組織間隙ニヨルモノ、其他榮養血管周圍ノ鬆粗ナル結締組織ニ沿フテ侵入スルモノ等ノ數路ヲ舉ゲ、其他此等ノ特別ノ道ニヨラズ血管壁ノ周圍ヨリ一樣ニ破壞進入スルモノモ存ス、然レドモ一徑路ニ依ラズ主トシテ數路ヨリ侵入スルモノ多シト。余ノ例ニ於テハ特別ノ徑路ヲ認ムル事ヲ得ズ、周圍ヨリ數路ニ道ヲカリテ進入セリト思惟セラルルモノハ第一例、第十三例、第十九例ニ於テ認ムル所ナリ。而シテ癌性侵蝕ヲ蒙ムラザル間質ノ血管ニ於テハ其ノ周圍ニ圓形細胞ノ浸潤強ク、血管殊ニ動脈壁ニ外膜ノ結締組織ノ增生肥厚ヲ呈セルモノアリ、內膜ニ於テハ概シテ變化無キモ所ニヨリテハ一部內膜ノ肥厚ヲ認ム。カカル像ハ余ノ癌腫例ニ於テ認メタル所ナリ。尙ホ彈力纖維ニ就テハ著明ナル變化ヲ認メズ。菊地氏(前出)ハ外膜ノ結締組織ハ癌腫細胞ノ侵蝕狀態甚ダ著明ナラザル以前ニ於テ増殖肥厚ヲ呈スレドモ、侵蝕高度ニ及ベバ種々ノ變性ニ陷ルモノニシテ、此ノ時反テ內膜ニ於テハ癌腫細胞ノ正ニ血管內ニ進入セントスルモノニアリテハ、他部ニ比シテ著明ナル增生肥厚ヲ認ムト。余ノ第十九例ニ於テ癌腫細胞群ノ大血管壁ニ進入シ一部ハ正ニ內膜モ侵蝕セントセル部及ビ其ノ對側壁ニ於テ多少ノ內被細胞ノ増殖ヲ認メ、且ツ其ノ部ニ巨態細胞存セリ。第十三例ニ於テ腫瘍細胞ノ侵襲ヲ受ケタル血管ニ於テ唯內膜ノミ殘存セル像ヲ認メタリ。田中氏(前出)ハ癌發生ノ初期ニアリテハ動脈ニ於テハ癌性變ヲ示スモノ少ナク、外膜ノ纖維性肥厚ヲ呈スルモノ多シ、而シテ亦內膜ノ肥厚增生ヲ來シテ管腔ノ狹窄閉塞ヲ來セルモノアリト。余ノ例ニアリテハ內膜ノ肥厚増殖ノ爲メニ非ズ、癌腫増殖ノ壓迫ノ爲メニ管腔ノ狹窄變形等ヲ認メタリ。

癌腫増殖周邊部ニ於ケル血管ノ新生、増殖ノ存スルコト、及ビ癌腫組織中血管分布、配列ノ不規則ナルハ諸家ノ等

シク認ムル所ナリ。Ribbert<sup>(2)</sup>ハ癌腫ニ於ケル多數血管ノ構造ノ不完全ト血管分布ノ不規則及ビ周圍組織トノ血管吻合ノ不完全ハ腫瘍組織ノ榮養障礙ニ陷ル原因ナリトシ、「アルコール」組織内注入、砒石ノ内服、細菌毒ニヨリテ腫瘍組織ノ退行性變ニ陷ル事實、Pethica氏ノX線放射ニヨリ、Apollant<sup>(3)</sup>ノ「ラヂウム線放射」等ニヨリ癌腫細胞ノ死滅スルモ生理的上皮細胞ノ依然トシテ生活力ヲ有スル事實ニ鑑ミ、此等癌腫細胞ノ有害作用ニヨリテ死滅スルハ榮養血管トノ關係ノ不完全ニ歸セリ。

Goldmann<sup>(4)</sup> (前出)ハ癌腫ニ於ケル血管ノ新生、血管分布ノ不規則等ノ變化ハ癌腫ニノミ特有ニ非ズ、結核、微毒等ノ慢性傳染病等ニモ來ルモノニシテ、組織生活力ヲ有スル時ハ如何ナル害物ニ對シテモ反應性ニ血管ノ増殖ヲ來スモノナリ、而シテ癌腫肉腫ノ周邊部ニ每常血管ノ新生ヲ呈スルノミナラズ、甚ダ増生ヲ來スハ、單ニ腫瘍ヲ榮養スルノミナラズ其ノ侵害ヲ防禦スルノ作用ヲ存ス、即チ惡性腫瘍ニ於テモ傳染性炎症ニ於テモ血管ノ變化ノ同一ナル事、廣汎ナル癌性變化ノ存スルニカカハラズ轉移ヲ爲ス事ノ少ナキ事實、大多數ノ癌腫細胞ガ血流中ニ入ルモ屢々續發性癌ヲ惹起セザル事、(Goldmann, Schmidt, Borel, Haland, n. a.) 鏡見的ニ血管中ニ入レル癌腫細胞ノ血行中ニテ死滅スル事等ノ事實ハ腫瘍ノ周邊部ニ於ケル血管増殖ノ偶然ノ現象ニ非ザル事ヲ示スモノナリト結論セリ。

田中氏<sup>(5)</sup> (前出)ハ肉腫又ハ癌腫組織ニ於テ血管ノ構造及ビ分布ノ狀態ノ變化ハ目的學的ニ解釋スレバ腫瘍ノ治癒性ト多少ノ因果關係ヲ有スルモノト認ムベク、腫瘍増殖ノ周邊部ノ血管ノ新生、増殖ハ榮養ヲ與フルト云フヨリモ寧ろ細胞ノ侵害作用ヲ抑制停止セントスル自然治癒反應ニ出ルモノナルベシト論ゼリ。

今村氏<sup>(37)</sup>ハ門脉ニ轉移セル肝臓癌ヲ檢シ、血管内ニ栓塞セル腫瘍細胞群ノ毛細管新生ハ大多數ノ場合、舊血管腔壁ヲ覆ヘル内被細胞ガ腫瘍發育ニ隨ツテ同ジク肥大増生シ、常ニ腫瘍細胞群ノ表面ヲ包ミ之レヨリ始マルト論ジ、而シテ新生血管ハ腫瘍細胞ニ榮養液ヲ給スル目的ニ出ル事ハ極メテ明瞭ナル事實ナリトシ、一部官能性血管ナリトセリ。山極氏<sup>(102)</sup>ハ轉移結節ニ於テ腫瘍細胞ハ専ラ轉移地土着ノ血管及ビ結締組織ヲ刺戟シテ間質ヲ生ゼシムト。

而シテ血管新生、増殖ニ就テ藤浪、稻本兩氏<sup>(18)</sup>ノ腫瘍移植ノ實驗ハ其ノ意義ヲ定メル上ニ重要ナルモノナリ。即チ移植腫瘍片ハ發育ノ初メ被移植地ニ於テ體液乃至血液ヲ攝取スルコトニヨリテ増殖ヲ遂グ、サハレ發育セル腫瘍組織内ニ於ケル血管形成ノ度ハ周圍組織ト同一調ニ非ズ、周圍健康組織内ノモノニ比シテ整齊ナラズ乏少ノ觀アリ、而シテ血管移植組織内進入ハ固ヨリ腫瘍組織發育上重要ナルモノナリト雖モ、必ラズシモ旺盛顯著ナル血管形成ヲ待チテ然ル後ニ始メテ移植組織ノ増殖ヲ促スモノナリト謂フベカラズ、尙ホ腫瘍組織ガ種々ノ退行性變化ヲ惹シ易キコトハ亦少ナクトモ幾分此ノ血管形成ノ態度ニ因ルコトト信ズト。藤浪、加藤氏同試驗第五報告<sup>(19)</sup>ニ於テ次ノ如ク論ゼリ。

新生セル血管ハ更ニ増殖シ移植腫瘍内ニ進入シ、此ノ新生血管ハ移植腫瘍ノ發育ヲ助長スルモノナルコトハ疑無シト考察セラル、血管新生ハ固ヨリ意義ヲ有スルモノト認ム。然レドモ血管新生ト直接ニ關係無キ所ニテモ腫瘍細胞ハ亦ヨク増殖スルモノナリト。

Erlich<sup>(13)</sup>ハ移植腫瘍ノ血管ハ間質ト共ニ宿主ヨリ供給セラレ、之レ移植腫瘍細胞ガ宿主組織ノ纖維形成細胞及ビ血管形成細胞ヘ直接積極的「ヘモタクシス」作用ヲ及ボス爲メナリ。此ノ作用ハ即チ移植腫瘍細胞發育ノ要件ナリ、之レ無キ時ハ移植及ビ全體ノ腫瘍ハ發育スルコトヲ得ズト論ゼリ。

清野及ビ川上兩氏<sup>(43)</sup>ハ其ノ腫瘍移植實驗ニ於テ、腫瘍増殖周圍組織ノ反應ハ之レヲ直チニ免疫ノ本態ト見ルコト能ハズシテ、一定度迄ハ却テ腫瘍ノ發生ヲ良好ナラシムルモノナリト論ゼリ。

是レヲ以テ惟ルニ、癌腫組織内ノ已存血管及ビ新生血管ノ癌性變化ニヨリテ腫瘍組織自己ニ於テ新陳代謝ノ障礙ヲ來ス事ハ合理的ノ事實ニシテ、余ノ例ニ於テ屢々經驗セシ腫瘍増殖顯著ナル部ニ於テ新生血管ノ旺盛ナル所見ヨリシテ、田中(前出)、Goldmann(前出)氏等ノ主張セルガ如キ證左ヲ得ズ、却テ Ribbert, Ehrlich, 今村、藤浪、清野、川上氏等(前出)ノ論ゼシ事實及ビ又藤浪氏(前出)ノ研究ニ據ル移植前局所ニ炎症ヲ生ゼシメタル後腫瘍移植ヲ行ヘバ其ノ發育成績良好ナリシ事實ヲ考フル時、余ガ例ニ於ケル事實即チ腫瘍増殖周圍部血管新生及ビ増殖ヲ以テ腫瘍細胞ニ



榮養ヲ供給シ、腫瘍細胞ノ發育増殖ヲ補助スルモノナラント思考スルモノナリ。

### (其三)、癌腫組織ノ末梢神經纖維ニ對スル態度

腫瘍細胞及ビ其ノ増殖ノ周圍組織ニ對スル態度ニ關スル研究ハ腫瘍細胞ノ生物學的性質及ビ腫瘍組織増殖ノ狀態ヲ知ル上ニ甚ダ有意義ナル業ナリ。

曩ニ藤浪氏<sup>(21)</sup>ハ腫瘍組織ト横紋筋組織トノ關係ヲ研究セリ、次デ今氏<sup>(51)</sup><sup>(52)</sup>ノ滑平筋及ビ骨組織ト腫瘍組織トノ研究アリ。更ニGoldmann (前出)、M. B. Schmidt<sup>(53)</sup>、Ribbert (前出)、田中 (前出)、菊地氏 (前出) 等ノ惡性腫瘍ト血管トノ關係ニ就キテノ報告アリ。而シテ生體ニ於テ重要ナル位置ヲ占ムル末梢神經纖維ト惡性腫瘍組織トノ關係の研究ニ至リテハ甚ダ少ナキガ如シ、曩ニTunst<sup>(14)</sup>次デ赤松氏<sup>(5)</sup>ノ研究ノ如キハ甚ダ興味アル研究ニ屬ス、余モ亦陰莖癌ノ組織學的檢索中、癌腫組織ノ末梢神經纖維ニ對スル態度ニ興味ヲ感ジ、多ク注意ヲ拂ヘリ。其ノ所見ヲ綜合セバ、

#### (イ)、未ダ癌腫細胞増殖ノ侵襲ヲ蒙ラザル周圍部組織中及ビ間質組織中ニ於ケル末梢神經纖維ノ所見

該部ニアリテハ各例ニ於テ殆ンド毎常末梢神經纖維ノ縱斷及ビ横斷セラレタル像ヲ認ム、而シテ纖維索周圍ニ於ケル小圓形細胞ノ浸潤、プラスマ細胞ノ集簇ハ殆ンド必發ノ所見ナリ。纖維内小圓形細胞ノ浸潤ハ周圍ニ肉芽性變ノ旺盛ナル部ノ纖維ニ屢々認ム、又強ク圓形細胞浸潤シテBornmann<sup>(6)</sup>ノ小圓形細胞浸潤ハ組織ヲ鬆粗ニナスニヨリ腫瘍細胞ノ進入ヲ容易ナラシムトノ所說ニ一致スル像無キニシモ非ザレドモ、常ニカカル像ヲ認ムルコトヲ得ズ。神經纖維索周圍ニ於ケル結締組織ノ増殖肥厚ハ往々見ラルル像ニシテ、Enst<sup>(4)</sup> (前出) 及ビ赤松氏 (前出) モ之レニ就キテ記載セリ。而シテ之レトモ各神經纖維ニ於テ平等ニ認ムル像ニ非ズ、著明ナルアリ著明ナラザルアリ、纖維束間ノ結締組織ノ増殖ハ一部ニ於テ認メシムルモ一般ニ著明ナラズ。van Gieson 氏染色ニアリテハ一見全ク結締組織ト同様ノ染色スルモノ存ス、是レヲ以テ直チニ結締組織ノ増生ト認ムル事ヲ得ザルハ纖維外鞘ノ部ノミ縱斷セラレタル時ニ現ハレ居ル事ノ存スルヲ考慮ニ置クベキガ故ナリ。其他數々接スル所見ハ纖維索周圍ニ空隙ノ存スル事ナリ。Enst (前出) 及ビ赤

松氏(前出)等ハ之レヲ淋巴腔ノ擴張ニ歸セリ。余モ亦斯々思惟スルモ、一部ニ於テハ組織硬化ニヨル人工的萎縮ニ歸スベキモノ亦モトヨリ之レアルベシ。此ノ空隙モ常ニ纖維索全周ニ存スルニ非ズ其ノ部位ハ一定セズ、尙ホ其他纖維ノ彎曲及ビ波狀ヲ呈スル所見モ數々認ム。神經纖維ノ榮養血管内ニ於テハ何所ニモ腫瘍細胞ノ存在ヲ認メズ、而シテ癌腫組織ニ接近セル纖維ニ於テハ壓迫セラレタル像及ビ變形セルモノヲ認メズ。上條氏<sup>(46)</sup>ノ方法ニヨリ髓鞘染色ヲ行ヒタルニ漏斗ハ殆ンド正常ニ近ク一定ノ間隔、一定ノ方向ニ配列セラル。纖維ノ彎曲波狀ヲ呈セルモノニテハ、不規則ナリ。亦蜂窩狀構造ヲ明ラカニ認メ得ルモノニテハ異狀ヲ認メズ。

#### □、癌腫細胞ノ侵襲ヲ蒙ムレル神經纖維ノ所見

癌腫細胞ノ侵襲ヲ蒙ラザル神經纖維索ノ周圍ニテ數々認メタル肥厚増殖セル結締組織ハ腫瘍細胞増殖ノ爲メニ侵蝕セラレ又壓迫セラレ、萎縮ニ陥レルモノ一部ニアリテハ明ラカニ増殖肥厚ヲ認ムルアリ、亦纖維束間結締組織モ多少ノ増殖ヲ呈セルモノ存ス。而シテ纖維索周圍ノ小圓形細胞ノ浸潤ハ著明ナラザルモノ又著明ナルモノ存ス。然レドモ一般ニ多少ニカカハラズ存セリ。又纖維周圍ノ空隙及ビ彎曲ハ此ノ部ニ於テモ認ムル所見ナリ。纖維自己ガ腫瘍細胞増殖ノ爲メニ壓迫セラレ、變形或ハ萎縮ニ陥リタルガ如キ像ハ認ムル事ヲ得ズシテ、唯腫瘍細胞ノ侵蝕ニマカセタルガ如シ。赤松氏(前出)モ亦斯ノ如キ所見ノ存在ヲ記載セリ。髓鞘ノ所見ニ就キ赤松氏(前出)ハ先ヅ網狀構造ニ變化ヲ來シ網眼ノ大サ不整トナリ且ツ配列極メテ雜然タリ、而シテ變性高度トナレバ髓鞘中ニ「ズダン」ニ好染セル小顆粒ヲ認メ、尙ホ變性ノ進ムニ從ツテ小顆粒ハ増加シ髓鞘ハ節狀ニ斷裂スト。余ハ「ズダン」ノ染色ヲ成サザリシモ、一般ニ漏斗構造ハ分明ナラズシテ甚ダ不規則ナリ。増殖周邊部未ダ侵蝕ヲ蒙ムラザル部ニテ經驗セシ網狀構造ハ認ムル事ヲ得ズ、髓鞘ハ全體トシテ竹ノ節狀ヲ呈シ、或ハ斷裂シ、又細顆粒狀トナリタルモノガ線狀ニ配列セリ。而シテ辛シテ漏斗狀構造ヲ認メシムルモノニテハ一般ニ甚ダシク不規則ニシテ、漏斗ノ間隔モ不定トナリ互ニ相接近セルアリ、又離レタルアリ亦漏斗ノ方向ノ相反對セルガ如キ像モ認メラル、而シテ周圍榮養血管内ニ腫瘍細胞ノ存在ヲ認メズ。

### (ハ)、末梢神經纖維ニ對スル癌腫細胞増殖ノ狀態

余ノ例中腫瘍細胞ガ末梢神經纖維ヲ侵蝕セルハ、實質細胞甚ダシク異型ニ富ミ、且ツ増殖ノ浸潤性及ビ破壊性ナル所謂潰瘍型ノモノニ多ク、乳嘴型ニテハ神經纖維ノ侵蝕セラレタルモノ少シ。然レドモ乳嘴型ニシテ其ノ細胞異型ニ富ミテ増殖不規則ナルモノニアリテハ、數々認ム。癌腫細胞ガ神經纖維侵襲ノ徑路トシテ次ノ數路ヲ考ヘ得ベシ、(一) 淋巴道ニヨルモノ、(二) 組織間隙ニヨルモノ、(三) 榮養血管及ビ周圍鬆粗結締組織ヨリ進ムモノ、(四) 不規則ニ進入シ一定ノ侵入路ニ依ラザルモノ等ナリ。赤松氏(前出)ハ一路ノミニヨリ進入スルハ甚ダ稀ニシテ數路相依テ癌腫細胞進入ノ路ヲ開クモノト主張セリ。Ernst (前出)ハ主トシテ淋巴道ニ依リ進入スト論ゼリ。余ノ例ニアリテハ先ヅ最初腫瘍細胞ハ神經纖維索周圍ノ淋巴道ニ路ヲ求メ、遂ニ纖維ヲ全ク圍繞スルニ至ル、此ノ像ハ第十七例ニ著明ニ認メラレタリ。斯ノ如ク纖維ノ周圍ヲ圍繞セル腫瘍細胞ハ益々増殖ヲ營ミ、纖維索ヲ侵蝕シ鞘内ニ進入シ、一部ハ規則正シク束間結締組織ノ部ヨリ進入シ、全ク纖維ヲ破壊侵蝕スルモ、一方ニ於テハ規則正シキ徑路ニヨラズ外鞘破壊ト共ニ不整ニ浸潤性又ハ破壊的ニ亂入シ、全ク纖維ヲ破壊侵蝕スルニ至ル、カカルモノヲ第九例及ビ第十三例ニ於テ認ム。而シテ第十三例、第十七例ニ於テハ腫瘍細胞ハ好ンデ纖維ヲ侵襲スルガ如キ像ヲ示セルモ、直チニ之レヲ以テ末梢神經纖維ト腫瘍細胞トノ間ニ親和性ヲ云爲スルハ早計ニ失スル恐レ無キニ非ザレドモ、腫瘍増殖及ビ腫瘍細胞ノ生物學的性質上注意スベキ事ニ屬ス。余ハ何所ニテモ腫瘍細胞ノ榮養血管ヨリ進入スト認ムベキ所見ヲ得ザリキ。

### (其四)、陰莖癌ノ轉移形成

惡性腫瘍ハ往々轉移性増殖ヲナシ良性腫瘍ハ轉移ヲ爲サズ、轉移ノ存スル事ガ腫瘍鑑別ノ一重要條件ナル事ハ病理總論ノ教ユル所ナリ。

近時腫瘍發生學上隔世ノ感ヲ爲サシメタル人工的癌發生實驗的研究(Fisher<sup>(105)</sup>) (山極氏ニヨル) (山極及ビ市川氏<sup>(106)</sup>等)ニ於テモ轉移形成ノ有無ハ重大ナル意義ヲ有スルモノノ如ク、數々良性惡性腫瘍ノ論争ノ焦點トナリタルガ如シ。

藤浪氏<sup>(30)</sup>ハ其ノ腫瘍増殖論ニ於テ癌腫増殖ノ態度ハ局所増殖ト共ニ腫瘍細胞ガ遠隔ノ地ニ轉移ヲ形成スルヲ特色トス、而シテ轉移ハ附近ノ淋巴腺又ハ遠隔ノ地ニ之ヲナス者モ、淋巴道ニ於テスルヲ多シトス。尙ホ轉移ノ個所ニ異同アリ、其ノ頻發ト稀有トニ差別アル所以ハ腫瘍細胞ノ生物學的性質ノ外ニ大ニ各臟器若クハ體部ノ素因如何ニヨルト論ゼリ。石橋、鷹津氏<sup>(38)</sup>等ハ癌ノ統計的研究ニ於テ癌ハ淋巴道ニ因リテ轉移スル事多シト論ジ、解屍數八百十二例ノ中四百十六例ニ於テ淋巴腺轉移ヲ見、五三・八%ニ當ルト記載シ、Briday (石橋、鷹津氏<sup>(38)</sup>ニヨル)ハ六六%、Danielsen (石橋、鷹津氏<sup>(38)</sup>ニヨル)ハ九九%ト記載セリ。癌腫轉移ニ關シ淋巴道ニ依ル事ノ重大ナルモノノ外尙ホ血行ニヨリテ轉移ヲ爲ス事モ稀有ナルモノニ非ズ、文獻ニヨレバ M. B. Schmidt (前出)、Goldmann (前出)ハ之レニ關シ夙ニ精細ナル報告ヲナセリ。本邦ニ於テモ藤浪 (前出)、今村 (前出)、菊地 (前出)、竹内<sup>(39)</sup>、高橋<sup>(40)</sup>氏等ニヨリテ研究セラレ、概シテ次ノ如キ結論ニ到着セリ。即チ血行ニ依ル轉移モ數々行ハレ、從來人ノ信ゼシ如ク血行中ニ存在セル癌腫細胞群ハ全ク死滅又ハ退行性變ニ陷ルモノニ非ズト。尙ホ藤浪氏 (前出)ハ癌腫ノ血行ヨリモ淋巴道ニヨリテ轉移形成スル事ノ多キ所以ハ次ノ二項ニ歸セシム可シトテ、イ、癌腫細胞ガ血行ニ進入スルコトハ曾テ想像セラレタルヨリモ頻發ナリ、然レドモ局所性増殖ニ於ケル狀態ニ徵スルモ尙ホ淋巴道ニ於テナス事ガ多數ナル事、ロ、血行中癌腫細胞ノ入り來ル事ガ稀有ナラズトスルモ淋巴道ニ比シテ已ガ生存ニ向ツテ不適ナル事多ク往々分明ニ其ノ廢滅ニ歸スル事ヲ認知セシムル事等ヲ舉ゲタリ。

陰莖癌ニアリテハ轉移ヲ屢々早ク鼠蹊淋巴腺ニ來スモノナル事ハ諸家ノ等シク論ズル所ナリ。而シテ鼠蹊腺轉移ノ有無ハ其ノ臨床的診斷上豫後ヲトスル上ニ重要ナル事ニ屬ス。尙ホ陰莖癌ハ鼠蹊腺ノ他骨盤腔淋巴腺ニ轉移ヲ來ス事稀ナラズ、血行ニヨリテ轉移形成スル事ハ甚ダ稀有ナルコトニシテ、余ノ寡聞ナル Kaufmann (前出)ノ記載セシ例ノミナリ。Kühner (前出)ハ轉移殊ニ淋巴腺轉移ニ就テ研究シ、屢々陰莖根部恥骨縫際前方ノ淋巴腺轉移ニ就テ注意セリ。茂木氏 (前出)ハ淋巴腺ノ轉移ヲ見ズ腫大セシ三個ノ淋巴腺ハ急性淋巴腺炎ノ狀態ニ在リシト。石橋、鷹津兩氏 (前

出)ハ陰莖癌總數七例ノ中五例ハ鼠蹊腺ニ、二例ハ後腹膜腺ニ轉移ヲ形成セリト。余ノ檢セシ癌腫例ニ於テ臨床上腫大セシ淋巴腺ヲ摘出セシモノ八例ナリ、其ノ中二例ハ保存無キ爲メ檢スル事ヲ得ズ。其ノ六例ノ中顯微鏡的ニ轉移ヲ證明セシモノ二例ナリ。而シテ檢スル事能ハザリシ二例ノ中一例ハ確ニ轉移ヲ形成セシコトハ明ラカナリ。即チ腫大セシ淋巴腺ヲ摘出後數ヶ月ヲ經テ亦其ノ部ニ再發シ爲メニ鬼籍ニ陷リシ例ナリ。要スルニ腫大セル淋巴腺ニアリテ檢シ得タル七例ノ中轉移ヲ有セシモノハ三例、即チ四二・八六%ナリ。腫大セルモ轉移ヲ有セズ唯慢性或ハ急性淋巴腺炎ノ狀ニアルモノ四例五七・一四%ナリ。腫大セル淋巴腺ニ於テモ必ラズシモ轉移ヲ有セズ、唯慢性急性淋巴腺炎ノ狀ニ有ルモノ可ナリ存スル事アルハ事實ナリ。Thomson (茂木氏ニヨル)及ビ茂木氏(前出)モ實際轉移セザル腫大モ亦存スベシト言ヘリ。余ノ例中轉移形成ヲ認メタル三例ノ中二例ハ潰瘍型ニ屬シ、一例ハ乳嘴型ニ屬セシムベキモノナルモ、之レトモ腫瘍細胞ハ甚ダシク異型ニ富ミ増殖モ亦破壞的ナルモノナリ。

淋巴腺内ニ於ケル轉移増殖ノ狀態ハ腫瘍原發母地ニ於ケル増殖ノ狀況ト大差無キガ如シ、概シテ一般ニ發生地上皮細胞ノ性狀ヲ具備セルモノニシテ、此部ニ於テモ正常上皮ニ於ケルト同様各層ノ上皮細胞ヲ有セリ。然レドモ多少興味ノ存スルハ陰莖ノ強ク侵蝕セラレタリシ第十三例ニ於テ、淋巴腺ニ轉移ヲ來セル場合ニ、原發部ニアリテハ腫瘍細胞甚ダシク異型ニ富ミ、一部ニ於テハ腫瘍細胞ハ基底細胞型ヲ有シ何所ニモ角化變性部ヲ認メザリシニ、轉移竈ニ於テハ明ラカニ多クノ角化層ヲ形成セシハ、之レ原發部ニ於テハ腫瘍細胞異型の増殖ノ爲メ上皮細胞元來ノ性狀ヲ發揮スル暇無カリシニ、轉移部ニテハ腫瘍細胞ノ發育比較的安定ニシテ、爲メニ上皮細胞固有ノ性狀ヲ發揮セシモノト解スベキカ。第十二例ニアリテハ一個ノ腫大セル淋巴腺ニ於テハ明ラカニ腫瘍細胞ノ増殖旺盛ニシテ、且ツ其ノ周邊部ニ於テ多數ノ異物性巨細胞出現セリ。尙ホ一個ノ腫大セル淋巴腺ニ於テハ腫瘍細胞ノ増殖ヲ認メザルモ、所々乾酪樣變性ニ陥リ、其ノ周圍ニ肉芽性變旺盛ニシテ其ノ部多數ノラングハンス氏型ノ巨細胞ヲ認メ、恰モ吾人が結核竈ニ於テ見ル像ト同様ナリ、然レドモ結核菌ハ遂ニ證明シ得ザリキ。

## (其五)、陰莖癌ノ一般増殖狀態及ビ殊ニ癌腫組織周邊部ニ於ケル増殖蔓延狀態

陰莖癌ハ其ノ型ノ異ナルニ從ツテ増殖ノ方法及ビ狀態ヲ異ニスルモノニシテ、茂木氏(前出)已ニ記載セリ。陰莖癌ニ於テ比較的良好ナル乳嘴型ニ屬スルモノニアリテハ、主トシテ強く浸潤性ヲ示サズ、ヤヤ擴張性増殖ノ態度ヲ示シ、比較的정상上皮ノ性狀ヲ具備セル腫瘍細胞ハ概シテ大ナル細胞索及ビ胞巢ヲ形成シ、周圍組織ヲ壓迫シテ増殖シ、從ツテ破壞的侵蝕ノ像ハ少ナク、唯變形ヲ呈スルニ止マル。若シ強剛ナル結締組織維束、或ハ血管、或ハ神經纖維索等ニ遭遇セバ増殖ハ多少阻止セラルルガ如キ狀ヲ呈シ、藤浪氏(前出)ノ所謂抵抗少ナキ部ヨリ進入ストノ解説ヲ明ラカニ説明シタルガ如キ主トシテ其ノ増殖ノ方向ヲ轉換スルヲ常トス。茂木氏(前出)ハ乳嘴型ハ主トシテ表面ニ沿フテ易々タル増殖ヲ營ムト解キ。Bornmann(前出)ハ表皮癌ハ表皮下ヲ表皮ニ沿フテ増殖スト解ケリ。カカル増殖ノ像モ亦認メラル。而シテ此ノ種ノ増殖ヲ營ム乳嘴型ノモノハ後來記載スルガ如キ所々部分的自然治癒現象ヲ屢々呈スルガ如シ。然レドモ乳嘴型ニ屬スル總テガ擴張性増殖ヲ營ムモノニ非ズシテ、細胞異型ニ富ミ不羈ナル浸潤性増殖ヲ營ムモノアリ。陰莖癌ノ中潰瘍型ニ屬スルモノハ主トシテ浸潤性増殖ノ狀ヲ示セリ。腫瘍細胞已ニ異型ニ富ミ正常上皮細胞ノ性狀ヲ失ヒ大小主トシテ小ナル或ハ分岐セル索狀胞巢ヲ形成シ、亦ハ腫瘍細胞單獨ニ周圍組織内ニ組織間隙ヨリ或ハ淋巴道ヲ介シ或者ハ一定ノ徑路ニヨラズシテ浸潤性又ハ破壞性ニ亂入シ不規則ナル不羈ノ増殖ヲ營ミ、遂ニハ陰莖ノ組織全部ヲ侵蝕スルニ至ルナリ。此ノ種ノモノハ表面ニ沿フテ増殖スルモノ少ナク、主トシテ深部ニ向ツテ亦Bornmann(前出)ノ主張スルガ如ク表皮下ヲ浸潤性ニ増殖侵蝕スルモノナリ。

癌腫細胞増殖ノ隣接已存上皮ニ對スル態度

癌腫組織ニ於テ其ノ隣接上皮ノ多少ノ度ニ於テ増殖ノ狀ヲ示セルハ吾人ノ所謂側性増殖ナル語ヲ以テ名ケタル所ナルモ、此ノ側性増殖ニ對スル諸家ノ解説甚ダ異ナレリ。モト側性増殖ナル語ハ腫瘍ノ持續的周邊發育狀態ニ名ケタルガ如シ、此ノ解説ハ腫瘍ノ傳染性發育ヲ主張セル一派ノ持論ニ由來セルモノナル可ク、之レ癌腫發育原因ヲ特殊ノ寄生

物ニ歸セル寄生論者ノ甚ダ喜ブ所ナル可シ。然レドモ尙ホ寄生説ニ對シ摯實ナル反對ヲ唱フル Marchand (藤浪氏<sup>(20)</sup>)ニ據ルノ如キモ隣接上皮ノ癌變ヲ説ケリ。又 Hanser<sup>(26)</sup>ハ腫瘍成長ニ由テ之レニ接近セル腺ハ常ニ癌腫性變性スベク準備セシメラルルトモ謂フベキ錯誤の循環是レ胃粘膜ノ癌性疾患ニシテ其ノ結果癌ノ際限ナキ周圍ヘノ蔓延ヲ將來スト論ゼリ。山極氏(前出)ハ癌腫發生上單中性發育ノ場合ニモ多數ノ小中心存シ、之等相前後シテ癌腫變性ヲ來ストノ主張ヨリシテ側性増殖ノ語ハ代償再生の増殖ノ意味ニテ用ユル方穩當ナリト論述セリ。曩ニ Recklinghausen (藤浪氏<sup>(20)</sup>ニヨル)ハ癌腫周邊部ニ見ユル上皮細胞増殖ノ像ハ種々ノ意義ヲ有ス可キ者ニシテ直チニ之レヲ以テ悉ク初期ノ癌組織ト見做シ能ハズトセリ。Ribbert<sup>(2)</sup>ハ癌腫細胞ノ自家發展式増殖ノ見地ヨリシテ周邊部癌組織新生ノ如ク見エシハ原發腫瘍組織ノ自家發展式増殖ニ他ナラズト論ジ。Bornmann (前出)初メ門下生及ビ Borst<sup>(3)</sup>、Petersen u. Colmers、Tietert (以上藤浪氏<sup>(20)</sup>ニ據ル)等ハ之レニ賛セリ。藤浪氏(前出)ハ隣接上皮細胞ノ増殖ハ諸種ノ意義ヲ有スルモノナル可キモ、一ツハ癌腫進入ノ爲メニ單ニ其ノ反應トシテ組織増殖ヲ促スト解キ。尙ホ隣接部ニテ元來健康ナル上皮細胞ハ癌腫進入ニ伴ヒ、或ハ單ニ湮滅セラレ或ハ一時反應性増殖ヲ呈スル事アルモ、之レヨリ直チニ癌腫組織ニ變ズルニ非ズ、之レ一般ノ態度ナリトス、若シ果シテ隣接部ニテモ癌腫組織ヲ成ス者アリトスレバ、之レ全ク健康ナリシ細胞ガ癌腫進入ノ結果トシテ卒然傳染ヲ受ケタルガ如ク、其ノ癌腫性變性ヲ爲スニハ非ズ。寧ろ癌腫トナリ得ベキ素因ヲ有スル組織部ガ其ノ力ヲ展開セシナリト論斷ス可キナリト説ケリ。菊地氏<sup>(45)</sup>ハ胃壁ニ存在セル二個ノ副脾ヲ檢シ、其ノ副脾組織ノ隣接胃粘膜上皮ノ著明ニ側性増殖ヲ呈スルヲ認メ、次ノ如ク論ゼリ。即チ此ノ種ノ増殖ハ眞性腫瘍ニアラザル副脾ノ如キ畸形性新生組織ニ對シテモ亦現ハレ得ル事ヲ知ルヲ得ベシ、尙ホ腫瘍ノ接近部ニ於ケル同種類ノ健康組織ノ側方増殖ヲ見テ直チニ腫瘍ガ茲ノ所ニ於テモ亦新ニ發生シツツアリト誤認スル事アリ、斯ノ如キ事ニ對シテ余ガ例ニ於ケル副脾ト胃粘膜トノ關係ノ所見ハ此ノ真相ヲ推知セシメ得ルモノト謂フ可シト。余ノ例ニ於テ之レヲ見レバ癌腫隣接上皮ノ増殖ハ強弱ノ差ハ勿論存スルモ、殆ンド各例ニ於テ認メタル所ナリ。隣接上皮ノ増殖ノ像ニ三種

存スルガ如シ、(1)同一上皮索ニ於テ全ク形態的ニ異ナレル腫瘍細胞ガ生理的上皮細胞ト混在セシモノ、(2)他方ニテハ腫瘍細胞索ト増殖セル生理的上皮細胞索トガ菲薄ナル表皮層ニヨリ結合セラレ互ニ相連絡ヲ保ツモ肉芽性變アル間質ニヨリ境界セラレタルモノ、(3)同一索ニ於テ腫瘍細胞群ト上皮細胞群トガ相接セルモ銳利ナル境界ヲ保テルモノトナリ。第一ハ第十九例ニテ著明ニ認ムル所ニシテ、此部ニテハ壓迫萎縮ノ狀ニアリ且ツ其ノ配列ヲ亂セル上皮細胞群ノ中ニ交リテ明ラカニ區別シ得ル腫瘍細胞ノ點在セルヲ認知セシム、カカル像ハ正常隣接上皮細胞ノ腫瘍化ヲ以テ説明スル事ヲ得ズシテ腫瘍細胞ハ腫瘍細胞ヨリト Ribbert (前出)ノ自家發展式増殖ニテ説明スベキモノニシテ一方ニテハ Borst (前出)ノ説ケル如ク上皮細胞間ニ腫瘍細胞ノ増殖ヲ示セルモノト説クベキカ、又ハ Ribbert (前出) Bornmann (前出)ノ如ク淋巴道ニヨル浸潤性轉移トスベキカ、其ノ決定甚ダ難キモ余ハ前者ノ可能ヲ考フルモノナリ。然ルニ第二ノ場合ニテハ藤浪氏 (前出)ノ如ク反應性増殖トシテ論ズ可キカ、山極氏 (前出)ノ如ク代償再生の増殖ト論斷スベキカ、將タ亦傳染性増殖ト解釋ス可キカ。傳染説ハ余ノ與セザル所ナルモ、之レニ對シテ敢テ解説ヲ試ミンカ、即チカカル狀態ニ存スル癌腫隣接部ノ上皮細胞ノ増殖ハ近接セル癌腫細胞増殖ノ爲メニ一方ニテハ眞皮組織ノ炎症變等ノ刺激ニヨリテ起ルモノトスベク、而モ其ノ度ニハ強弱ノ差ハ存在セリ。其ノ發生機轉ヲ考フレバ一方山極氏ノ唱フル如キ代償再生の増殖ノ意味ヲ有スルモノモ存ス可キモ、亦藤浪氏 (前出)ノ所謂反應性増殖ト認ム可キモノモトヨリ存ス。少ナクトモ増殖ヲ呈セル上皮細胞ハ他ノ生理的上皮細胞ニ比シテ癌腫トナリ易キ素因ヲ與ヘラレタルモノニシテ、若シ Wuldeyer (前出)ノ如ク臓器局所の素因ノ存スルカ亦隣接癌腫細胞ノ増殖ノ爲メニ壓迫湮滅セララル事ノ無カリセバ或ハ癌腫トナリ得ベキモノナランモ、一方ニ於テ内外因ノ小ナル爲メ癌腫變性ニ陥ルヲ得ズシテ遂ニハ隣接癌腫ノ旺盛ナル増殖ノ爲メニ隣接増殖セル上皮細胞ハ壓迫萎縮ニ陥リ湮滅ニ歸ス可キモノナラン。

多中心性發育ニ就テ

Petersen (71)ハ表皮癌ニ於テ多中心性發育ヲ論ジ胃癌ニ於テハ普通殆ンド單中心性發育ナリトセリ。山極氏 (100)ハ胃癌



發生論ニ於テ次ノ如ク論ゼリ。胃癌發生ニハ多發性、複中心性、單中心性發育アリ而シテ所謂單中心性發育ノ純然タルモノハ極メテ少ナルベク、單中心性竈中更ニ小中心ノ多數ニ存在セルナル可ク、原發竈ニ直接スル粘膜ニハ浸潤性轉移ノ外觸接感化性の傳染性ナラザル第一着ト同性ナル第二着癌腫變性ヲ目撃スベシト。茂木氏(前出)亦陰莖癌ニ於テ多中心性發育ヲ認メ、陰莖癌ガ二ヶ所或ハソレ以上ノ原發部ヲ有シ其ノ各個間ニハ全然健康組織ヲ有シ且ツ兩者間ニ又連續的關係無キ者ヲ認メタリ、殊ニ一例ニ於テ一方陰莖腹側ニ他方包莖ナラザル包皮ノ背側ニ於テ全然無關係のニ二種ノ癌腫ヲ發生セルガ如キ者ヨリ恐ラクハ多中心性發育ヲ營メルモノナラント論ゼリ。余ノ第三例包皮縁ノ部ニテ認メタル像モ多中心性發育ヲ說ク上ニ甚ダ興味アル所見ナリト信ズ。肉眼のニ堤狀ニ隆マリテ増殖著明ナル包皮縁ノ部ハ鏡下ニ於テ大ナル癌腫細胞索ニ於テ、兩々相異ナル性狀、形態ヲ有スル二ツノ癌細胞群ノ間ニ一線ヲ劃シテ相接セル部存ス。一方ハ細胞及ビ核ノ性狀並ニ形態ヨリシテ棘細胞型ノ上皮細胞ノ主トシテ増殖セシ如キ像ヲ呈シ、他方ニテハ一般ニ細胞及ビ核ハ小ニシテ可染質ニ甚ダ富饒ニシテ基底細胞ヲ想ハシムル像ヲ呈ス。前者ハ此部ヨリ包皮内板龜頭表面ニ亘リテ増殖セル角化扁平上皮癌ト相連續セリ、後者ハ此部ヨリ包皮外板ノ部ニ増殖セル基底細胞癌ニ連續セリ、角化變性ヲ何所ニモ認ムルヲ得ズ。斯ノ如ク兩々相異リタル細胞種ヨリ形成セラレタル癌ハ彼我ノ間ニ肉眼のニモ、組織のニモ連續的關係無キモノナリ。之レヲ以テ惟ミルニ、兩々癌腫ハ其ノ發生起點ト其ノ發生時期ヲ異ニセルモノニシテ、前者ハ扁平上皮癌ニシテ後者ハ主トシテ基底細胞型ノ細胞ノ増殖セルモノナルベキナリ。兩者ノ間ニ已ニ間質ノ存セシモノガ兩者増殖旺盛ノ爲メニ相接着セシモノト解スベク、而シテ前者ハ先ヅ第一着ニ癌性變化ヲ來シ後者ハソレト無關係ニ前者ヨリ後レテ二着性ニ癌腫性變化ヲ爲セシモノナラン。而シテ第二着性癌ハ第一着性癌ノ爲メニ其ノ索ノ尖端ノ部ニ於テ覆ハレタルガ如キ像ヲ呈セリ、之レ山極氏(前出)ノ第二着性癌ハ極メテ微々タルカ、或ハ第一着性癌ノ爲メニ壓倒セララル事ノ普通ナルヲ信ズト論ジタル所ニ一致スルモノナルガ如シ。要スルニ兩々同性ナラザル二種ノ癌ガ其ノ發生期ヲ前後シ、發生起點ヲ異ニシ、互ニ相接着セル事實ハ周邊部癌腫蔓延狀態及

ビ多中心性發育ヲ論ズル上ニ甚ダ興味アル事ト信ズ。

包皮内板ノ部ニ發生セル癌腫ガ深ク外板ニ向ツテ直角ニ侵入シ外板上皮ニ接近シ之レヲ破壊セル部ニ於ケル外板上皮ノ態度、

カカルモノハ第二十一例ニ於テ著明ニ認ムル所見ナリ。即チ内板上皮細胞ノ異型不羈ノ増殖ハ直角ニ深部ニ向テ進入シ外板眞皮乳頭ヲ内方ヨリ強ク壓迫セリ。此部ノ外板上皮細胞ハ一般ニ強ク反應性増殖ヲ營ミ、未ダ異型ヲ呈セズシテ眞皮内ニ伸長セリ。深部ヨリ進入セル癌腫細胞群ノ甚ダ近ク外板上皮ニ接近セル部ニ於テ此部ニ相當セル外板上皮細胞ハ其ノ細胞索ハ壓迫セラレ、萎縮ノ狀ヲ呈セリ。其ノ上皮細胞索ヲ形成セル細胞自己ニ於テモ、核及ビ原形質ノ染色性ハ正常ノ如ク分明ナラズ、且ツ核ト原形質トノ境界ハ分明ニ非ズ、一般ニ變性ノ狀ヲ示セリ。而シテ上皮細胞ノ配列モ平等ナラズ。此部ニ異型の及ビ定型的核分割像ヲ認ムル事ヲ得ズ。茂木氏(前出)ハ斯ノ如キ部ニ於テ異型的及ビ定型的核分割ヲ認メ以テ腫瘍化ヲ説明セルモ。余ハ上來記載セシ像ヲ根據トシテ外板上皮細胞ノ腫瘍化ヲ何處ニモ認ムル事ヲ得ズ、却テ外板上皮細胞ハ寧ロ被働的狀態ニ置カレ、變性萎縮ニ陥リテ廢滅ニ歸スルモノヲ認ム。

第九例ニ於テ示セル像ハ冠狀溝ニ發生セシ癌腫ガ深部ニ向テ増殖ヲ營ミ、其ノ方向ヲ轉ジ龜頭表皮ニ向テ進入シ遂ニ其部ヲ破壊シテ増殖セルモノナリ。此ノ場合龜頭上皮ハ強ク反應性増殖ヲ呈セルノミニテ、異型ノ調ヲ帶ビズ。而シテ癌腫細胞群ノ龜頭上皮ニ甚ダ接近セル部ニアリテハ龜頭上皮ハ一般ニ被働的ノ位置カレ、壓迫セラル。眞皮内上皮索ノ伸長ノ方向モ幾分轉換セリ。且ツ上皮細胞ノ核及ビ原形質ノ染色性モ、甚ダシク正常ナラズ變性ノ狀ヲ呈セリ。一部ニ於テハ腫瘍細胞ハ龜頭上皮索中ニ所々上皮細胞ト混ジテ點在セリ。又周圍ニ龜頭上皮細胞ノ多數ニ存セル部ニ於テ卒然ト腫瘍細胞ノ存在セルアリ、カカル部ヲ連續切片ニテ檢スルニ、カカル腫瘍細胞ハ原發癌腫竈ト相連絡セリ。カカル部ニ於テハ正常上皮細胞ガ直チニ卒然腫瘍化セリト説明スル事能ハザル所ニシテ、Ribbert(前出)ノ自家發展式増殖ヲ以テ説明スベキモノナリ。

## (其六)、陰莖癌ノ發生原因(內因及ヒ外因的關係)

## (イ)、內因

素因的關係

## (1)、遺傳素因

Cohnheim氏及ビ其ノ系ノ學者ハ腫瘍發生上遺傳ガ重大ナル原因的關係ヲ有スル事ヲ主張セルモ、此ノ說ヲ以テハ一部ノ腫瘍發生ヲ説明シ得ンモ、其ノ全幅ヲ説明シ得ザル所ナリ。山極氏<sup>(101)</sup>ハ個體全身ノ素因ヨリモ臟器ノ遺傳素因ニ重キヲ置ク可キヲ主張シ、陰莖癌ニアリテモ四十一例ノ中唯一例ニ於テ確ニ臟器遺傳ノ存セシヲ記載セリ。飯塚氏(前出)モ個體全身ニ素因存ストノ從來ノ見地ヨリ、陰莖癌二十三例ノ中三例ニ於テ遺傳素因ノ存セシヲ報告セリ。余ガ二十四例ノ中此ノ方面ニ多少ノ關係ヲ有セルハ唯一例ニ於テ其ノ娘ニ卵巢腫瘍ヲ有シタルアルノミ。Waldayer(前出)ハ癌腫發生上臟器局所素因ノ重要ナル事ヲ論ゼリ。

## (2)、被害素因

藤浪氏<sup>(17)</sup>ハ腫瘍素因論ニ於テ局所ニ於ケル組織ノ後天性被害狀態ガ腫瘍殊ニ例ヘバ癌腫形成ニ先驅ヲナシ、此ノ變化先ヅ在リテ其ノ地盤ノ上ニ徐々ニ腫瘍ノ發生シ來ル事アルハ屢々實現スル事實ニシテ、此ノ際此ノ組織變化ガ腫瘍形成ニ對シ一ツノ素因ヲ爲シ得ル事亦疑フベカラズ。勿論此ノ組織變化ガ必ラズ腫瘍ヲ伴フト限ラズ腫瘍ノ實現ニ對シテ尙ホ若干ノ他ノ原因的要約ヲ必要トスルナリト記セリ。是レヲ以テ陰莖癌ノ場合ヲ考フル時ハ、先天性、後天性包莖ノ存シ、且ツ局所ヲ不潔ニスル事ニ因リテ癌ノ先驅的病變ト認ム可キ病變ヲ起ス際、ソガ癌發生ノ上ニ一ツノ素因トナル可キモノナラント思考ス。

## (ロ)、外因

陰莖癌ノ原因的關係上第一位ニ舉グ可キハ包莖トノ關係ナリトス。陰莖癌ト包莖トノ間ニ密接ナル因果關係ノ存スル事ハ古來學者ノ等シク論ズル所ナリ。陰莖癌ノ大多數ハ包莖ノモノニアルトノ事實ニ對シテ、今ヤ論爭無キ所ナリ、Gouraud(茂木氏ニヨル)ハ陰莖癌ハ包莖患者ノミニ來ルト極言セリ、而シテ生後直チニ包皮輪狀切除術ヲ行フ奇習ア

ル人種ニ於テハ陰莖原發癌ノ他ノ人種ニ比シテ稀ナル事ハ亦其ノ間ノ消息ヲ語ルモノナランカ。包莖ノ發生ニ關シ暫ク記載スベシ。Ehrmann<sup>(15)</sup>ハ其ノ著書ニ於テ先天性及ビ後天性包莖ヲ區別シ、前者ハ其ノ原因ヲ胎生期發生關係ニ歸シ、後者ハ生後時々持續性或ハ一時性ニ來ルモノニシテ原因トシテ包皮囊中ノ内容ノ滯留作用ニヨリ病變ヲ將來シ、遂ニ新生物發生ニヨリテ包莖ヲ形成スル事アリ、之レヲ機械的包莖トセリ。其他淋疾、龜頭炎、初期硬結及ビ花柳病性炎症疾患ニ因リテ形成セララルモノヲ炎症性包莖トセリ。余モ亦後天性或ハ先天性ニ包莖ノ存セシモノガ新生物發生ノ爲メニ非包莖ノ狀態ヲ呈スル事又元來非包莖ニアリシモノガ新生物發生ノ爲メニ包莖ノ狀ヲ呈スルコトノ存在ヲ信ズル者ナリ。此ノ邊ノ消息ハ包莖、非包莖ヲ定メル上ニ注意スベキ事項ニ屬ス。次ニ文獻中ヨリ包莖ト陰莖癌トノ關係ヲ記載スベシ。

Martin	八五・四%	Krönlein	七三・三%	Brünig	六〇・〇%
Bruckham	五七・一%	Demarquay	六七・七%	Küttner	五〇・〇%
Schmidt	五〇・〇%	Manteufel	三三・三%	Jägmeyer	二九・二%
Ricord	二〇・七% (以上茂木氏ニヨル)	Kaufmann (前出)	一七・七%		
Barney	先天性包莖八五%以上 (茂木氏ニヨル)	茂木氏 (前出)	二十七例ノ中十四例	五一・八五%	
田島氏 <sup>(87)</sup>	七五%	坂口氏 <sup>(78)</sup>	十二例ノ中八例	六六・六%	
飯塚氏 (前出)	二十三例ノ中二十一例			九一・〇%	

余ノ例二十四例ノ中病歴ニ於テ包莖ナリシモノ、其ノ病變ヨリシテ包莖ヲ確ニ想ハシムルモノ且ツ肉眼的ニ包莖ナルモノ合セテ十五例ニシテ六二・五%ニ當ル。

其他 Simmonds ハ陰莖癌ノ原因トシテ微毒性癰痕ヲ第一位ニ舉ゲ、Demarquay (前出) モ亦微毒ト甚ダ關係アル事ヲ記載セリ。Kaufmann (前出)、Hunter (茂木氏ニヨル)、Ricord (前出)、坂口氏 (前出) 等ハ之レニ反對セリ。外傷ニ關

係アリト論ズルモノハ Partsch (前出) English (茂木氏ニヨル) 等ニシテ岩崎氏 (前出) モ一回ノ外傷ガ陰莖癌發生ニ關係ヲ有セル例ヲ報告セリ。Auche u. W. Binaud (茂木氏ニヨル) 等ハ Leucokeritose u. Poliac (茂木氏ニヨル) ハ Leucoplakie ニ原因ヲ擬セリ。中村氏<sup>(69)</sup> ハ陰莖皮角ニ續發セル癌腫ノ一例ヲ報告セリ。茂木氏 (前出) モ一例ニ於テ皮角ニ續發セシガ如キ例ヲ經驗セリト。永石氏<sup>(68)</sup> モ包皮結石ニ續發ノモノヲ報告シ。坂口氏 (前出) ハ包莖ガ陰莖癌ノ原因ニ重大ナル意義ヲ有スルト共ニ淋疾モ亦關係深シト説ケリ。又茂木氏 (前出) ハ陰莖癌ノ原因トシテ包莖ヲ認ムルト共ニ比較的健康ナル部ニ存スル局所上皮角質層ノ肥厚モ亦癌腫發生上大ナル關係ヲ有スルモノナリト論ゼリ。余ノ例ニアリテハ淋疾ヲ經過セシモノニ例存スル外ニ特殊ノ原因ニ歸セシム可キモノノ存在ヲ認メズ、故ニ陰莖癌ノ原因的要約トシテ大ナル意義ヲ有スルモノハ包莖ナリト思惟ス。又完全ナル包莖ニ非ズトモ包皮過長ニヨル所謂不全包莖ノ存スル時ニ陰莖ヲ不潔ニスル事ニヨリテモ亦其ノ原因ノ一部ヲ爲スモノト信ズ。

包莖ノ存スルヤ屢々分泌物ノ蓄積ヲ來シ、其ノ排泄不十分ノ爲メニ其ノ滯留物ノ分解ノ結果炎症性病機ヲ惹起スル事明ラカナリ、而シテ此ノ如キ炎症性病機ハ包莖ノ存スル限リ頻回反覆シ遂ニハ上皮ノ肥厚増殖ヲ來シ、又ハ癒着ヲ生ジ、硬結ヲ殘スニ至ル。之レ癌ノ先驅的病變トシテ認ム可キモノナリ。斯ノ如ク慢性ニ反覆往來スル炎症性刺激ハ其ノ部上皮ノ缺損剝離ヲ來シ、之レニ對シテ代償性再生現象ヲ來シ、尙ホ不斷反覆シテ此ノ病機ノ行ハルル時ハ遂ニ組織ノ秩序ヲ亂シ、權衡失ハレ遂ニ上皮ノ異狀ノ肥厚増殖ト共ニ強キ代償性、再生ノ行ハレ、正常ノ細胞分殖ヲ營ムニ暇無ク分殖ヲ來シ、盛ニ不規則ナル分殖行ハレ遂ニ癌腫形成セラルルニ至ルモノナラン。尙ホ此時其ノ部ニ臟器局所素因ノ存スル事ハ亦甚ダ肝要ナル條件ナルベシ。斯ノ如キ機轉ハ山極氏 (前出) 及ビ Ribier (山極氏ニヨル) 等ニヨリテ實驗的根據ノ上ニ立論セラレタル事實ナリトス。

### (リ)、所謂部分的自然治癒現象

腫瘍ノ部分的自然治癒現象トシテ Munss<sup>(66)</sup> ハ腫瘍細胞ノ發育及ビ他組織內侵入ガ純器械的ニ組織抵抗ノ爲メニ阻

害セラレ細胞ノ新生機能ノ停止スル事ニ歸シ、O'Brien<sup>(88)</sup>ハ癌腫細胞索及ビ胞巢ノ周圍ニ肉芽組織及ビ巨態細胞アリテ、之等ニ包圍セラレ、遂ニ結締組織ニヨリテ代償セラルト説ケリ。Becher<sup>(89)</sup>ハ癌腫組織内異物性巨態細胞ノ出現ニ由リテ、癌腫細胞巢及ビ胞巢ノ破壊セラレ、其ノ部ニ新生幼弱結締組織ニテ補充セラレ全ク組織化ヲ來スヲ説キ。Schwartz<sup>(90)</sup>ハ炎症性病機ニ由ル腫瘍組織ノ組織化ヲ主要ナルモノトシ、腫瘍組織ノ破壊吸収ニハ必ラズシモ異物性巨態細胞ヲ必要トセズ、肉芽性組織モ亦破壊吸収ニ強キ影響ヲ有スト而シテカカル現象ハ屢々腫瘍組織ノ増殖周邊部ニテ認ムルモノナリト。

木村氏<sup>(45)</sup>ハ乳嘴狀扁平上皮癌ニ於テ強剛ナル結締組織之レガ基礎ヲナシ爲メニ違型的ニ深ク浸潤性成長ヲ爲ス能ハズ腫瘍實質ノ發育ハ爲メニ極メテ緩慢トナリ、結果尙ホ一方ニテハ角質ノ周邊部ニ生ジタル異物性巨態細胞ハ異物タル角質ニ對シテ破壊作用ト吸收作用ヲ營ミ、遂ニ肉芽組織乃至結締組織ヲ以テ補充シ、所謂癌腫部分的自然治癒ヲ將來セシナリト論ゼリ。藤浪氏<sup>(91)</sup>前出<sup>(91)</sup>亦次ノ如ク記載セリ。癌腫ノ如キ惡性腫瘍ガ自然ニ治癒ニ趣ク事ハ之レ有ラズト雖モ、其ノ一部分ニ就キテ之レヲ見レバ、少ナクトモ之レガ傾向ヲ呈スルヲ認メ得可シト。菊地氏<sup>(92)</sup>前出<sup>(92)</sup>之レニ贊セリ。垂水氏<sup>(93)</sup>ハ腫瘍實質内巨態細胞ハ組織球形ニシテ表皮癌ニ對スル部分的自然治癒機轉ノ第一歩ト解シテ不可ナキモノナリト論ゼリ。山極氏ハ市川氏<sup>(94)</sup>前出<sup>(94)</sup>ト共ニ癌腫ノ人工的發生研究ノ際ニ癌腫ノ自然治癒ヲ來セシモノニ遭遇シ、次ノ如ク解釋セリ。即チ一旦癌腫トナリタル場合ニ其ノ治癒スルハ惡性化シタル上皮細胞自身ガ再度良性化シテ生理的上皮細胞ト成ル爲メニハ非ズ、周圍組織ノ壓迫即チ反應性結締組織新生ノ強キニ堪ヘズ其ノ子孫ヲ產出スル事ガ出來ズ萎縮變性消失シテ結締組織ガ之レニ代ルナリト説明セリ。余モ亦陰莖癌研究ノ際上來諸家ノ記載セシ如キ所見ヲ屢々經驗セリ、聊カ項ヲ分テ記載ヲ試ム可シ。

## 一、巨態細胞ノ出現

(1)、巨態細胞ノ出現ノ場所

# (イ)、癌腫組織實質内ニ出現セル巨態細胞

癌腫細胞索及ビ胞巢ノ未ダ著明ナル變化ヲ呈セザル時期ニ於テ出現セル巨態細胞ハ第六例、第七例、第十九例ニ於テ認ム。主トシテ胞巢ノ中心部腫瘍細胞ノ角化傾向ヲ有スル部ニ存在セリ、カカル部ハ多少ノ度ニ於テ腫瘍細胞ノ配列ハ亂サレ白血球及ビ一種ノ圓形或ハ橢圓形ニシテ淡明ナル核ヲ有スル遊走細胞存在セリ。又巨態細胞ハ胞巢ノ中央ヨリモ周邊部ニ偏シテ存スル事アリ。巨態細胞ハ圓形或ハ橢圓形或ハ不正形ニシテ核モ亦圓形、橢圓形、或ハ紡錘形ニシテ可染質ニ富メルアリ、又淡明ナルアリ。核ハ胞體ノ周邊部ニ圓陣ヲ作りテ存セルアリ、又彌蔓性ニ存セルアリ、又胞體ノ一極ニ集在セルアリ。而シテ巨態細胞ハ一般ニ周圍組織ト銳利ニ境界ノ存スルアリ、又境界不分明ノモノアリ、亦二個、三個及ビ數個ノ核ノ集リテ巨態細胞ノ前階級ト認ム可キモノヲ形成セルモノ存ス。核ノ數ハ少ナキモノニアリテハ二個或ハ三個、多キモノニテハ數個乃至十數個又數十個ヲ有スルモノアリ。巨態細胞ノ核ハ上皮細胞ノ核及ビ白血球ノ核トモ明ラカニ區別セラレ、其ノ部ニ存セル一種ノ迷走シ來レル細胞ノ核ト甚ダ相似タリ。而シテ是等ノ相集リテ形成セントシツツアル像ヲ認ム、巨態細胞ノ胞體內ニハ核ノ破片或ハ白血球或ハ空胞等ヲ抱擁セリ。主トシテ角化細胞又角質物ニ密着シテ貪食吸收シ、或者ニテハ胞體內ニ角質ヲ擁セリ。

## (ロ)、間質肉芽性變中ニ出現セル巨態細胞

間質肉芽性變中ニ存在セル巨態細胞ハ余ノ各例ニ於テ屢々認ムル所見ナリ。其ノ存在セル部位ハ主トシテ癌細胞胞巢ニ接近セル部ナリ。胞巢ノ尖端ノ部ニ相接シテ之レヲ抱擁セントセルガ如キモノ存ス。其他胞巢ニ關係無ク、肉芽性變中ニ存在セルモノアリ、此部ニ出現セル巨態細胞ハ其ノ核ノ性狀ヨリシテ又構造ハ實質組織中ニ存在セルモノト大同小異ニシテ、其ノ本態ハ同一ナルヲ想ハシム。而シテ此部ノ巨態細胞ハ内被細胞トノ間ニ親密ナル關係ヲ發見セズ、組織像ニ於テハ結締織ト全ク無關係ナリト謂フヲ得ズ、然レドモ兩者核ノ性狀ハ甚ダ類似セズ。

## (ハ)、破壊セル癌細胞索及ビ胞巢ノ部ニ出現セル巨態細胞

第十、第十一、第十五、第十六、第十八、第二十、第二十二ノ各例ニ於テ著明ニ認ムル所見ナリ。主トシテ癌腫増殖周邊部ニ於ケル胞巢ニハ白血球ノ浸潤ヲ認メ、尙ホ其ノ中心部角化變性部ニハ白血球ノ集簇ヲ來シ、白血球ノ數ヲ増スト共ニ角化部ハ破壊セラレ、角化細胞、角質片ハ白血球中ニ混在セリ。又其ノ部所々ニ細菌ノ聚落ヲ認ムルモノアリ。尙ホ白血球集簇ノ増加ト共ニ胞巢ハ囊狀ニ擴大シ、若シ胞巢ノ周圍ニ結締組織ノ強キ増生存スル時ハ胞巢上皮細胞ハ甚ダシク壓縮セラレ、遂ニハ胞巢ハ一部破壊セラレ、角化細胞、角質片及ビ上皮細胞ハ個々或ハ集リテ白血球中ニ存在シ、カカル部ニ周圍ヨリ肉芽性細胞進入シ來リ、結締組織ノ新生ヲ伴ヒ全ク肉芽性變ニテ置換セラレ、其ノ部結締組織ノ増殖ヲ旺盛ナラシム。未角化腫瘍細胞ハ已ニ退行性變ニ陥リ消失スルニ至ル。カカル部ニ於テ上來屢々記載セシ如キ多數ノ巨態細胞出現セリ。即チ角質片、角化細胞ヲ其ノ體內ニ攝取シ、貪食セリ。又大ナル角質片ニ密着シテ貪食吸收セリ。其他核ノ破片、白血球等ヲ胞體內ニ擁セリ。核ノ性質及ビ細胞ノ構造ハ全ク上述ノ巨態細胞ニ相一致セリ。尙ホ核ノ性狀、形態及ビ周圍ノ狀況ヨリシテ結締組織、淋巴球、白血球、内被細胞、上皮細胞等ト密接ナル關係ヲ認メズ、却テ此部ニ多數存セル組織球性細胞ト認ム可キモノト甚ダ親密ナル關係存セリ。殊ニ第二十二例ニ於テ大ナル胞巢ハ全ク壊死ニ陥レル部ニ、多數ノ大ナル胞體ヲ有シ蜂窩狀ヲ呈セル細胞存シ、又此部ニ多數巨態細胞出現セリ。核ノ性狀ハ兩者甚ダ相似タリ。又蜂窩狀細胞ノ相集リテ巨態細胞ヲ形成セントシツアル像ヲ認メシメ、尙ホ「ズダン」ノ染色ニヨリテ兩者同様ニ多數ノ脂肪顆粒ヲ存セリ。斯クシテ本態ハ同一ナルヲ想ハシム、斯ノ如キ胞巢ノ變化ハ結締組織増強キ部ニ存在セル胞巢ニ於テ屢々認ムル所見ナリ。

## (二)、血管内ニ出現セル巨態細胞

之レ第十九例ニ於テ認メタル所見ナリ。腫瘍細胞増殖ノ周邊部間質中ニ存スル大血管ニ於テ腫瘍細胞増殖ノ爲メニ其ノ壁ノ一方ハ已ニ侵蝕セラレ、腫瘍細胞ハ正ニ血管腔中ニ連入セントセル部ニ於テ、腔内腫瘍細胞群ニ可ナリ接近シテ數個ノ圓形ノ巨態細胞存在セリ。核ハ主トシテ淡明ニシテ構造ヲ明ラカニ見得。核ノ數ハ三個乃至五個ヲ有シ、



一方ニノミ集在セルモノ又胞體內瀰蔓性ニ存スルモノアリ。此部血管内被細胞ハ一部腫瘍細胞ヲ覆ヘルモ、一部ニ於テハ多少増殖シ所々集在セリ。腔内ニ存スル白血球ト巨態細胞トハ核ノ性狀ヲ異ニセリ。

血管内ニ出現セル巨態細胞ニ就テ文獻ヲ探ルニ、林氏<sup>(28)</sup>ハ生體染色ヲ應用セル實驗的研究ヲナシ精細ナル検査ヲ爲シ血管内異物性巨態細胞ノ形成ハ是認シ得可シ、造血臟器ニアリテハ血管内異物性巨態細胞ハ血管内被細胞ヨリ直接ニ又血液中ニ遊離セル組織球ヨリ、非造血臟器ニ於テハ單ニ他ヨリ輸入セラレタル血液中ノ組織球ヨリ發生スト推斷セリ。併シ血管内異物性巨態細胞ニ就キテ造血臟器ノ如キ組織球性内被ノ被覆アル細血管ニ異物栓塞ヲ生ゼシメタル場合ニ、組織球性内被ヨリ生ジタル巨態細胞ノ出現スル事ハ林氏(前出)、清野、村上兩氏<sup>(44)</sup>等共ニ說ノ一致セル所ナリ。清野及ビ村上氏等(前出)ハ一般管壁内被ノ被覆アル部分ニテモ異物ヲ包圍シテ巨態細胞ヲ生ズ、此ノ巨態細胞ノ本態ニ就テ林氏(前出)ト一部說ヲ異ニセリ。即チ血液組織球及ビ血管外層ニ存在セル組織球(「アドベンチチア細胞」)又ハ「クラスマトチーテン」其ノ巨態細胞ノ形成ニ參與スル事ハ疑無キモ、其他尙ホ局所ノ内被細胞ガ組織球性變態ヲ來スコトアル可シト思考スト論ゼリ。余ノ例ニ於テ見タル血管内異物性巨態細胞ノ本ハ果シテ如何ナルモノニ由來スルカ、林氏(前出)ノ如ク推斷ス可キカ、清野氏(前出)ノ如ク論ズ可キカ。余ノ所見ヲ以テシテハ之レヲ闡明スベキ根據ヲ得ズ。要スルニ少ナクトモ陰莖ノ如キ非造血臟器ノ血管ニ於テモ、腫瘍細胞進入ノ爲メニ、異物の刺戟ト爲リ、腔内異物ノ周圍ニ異物性巨態細胞ノ出現スル事ハ可能ナリ。

#### (ホ)、鼠蹊淋巴腺ニ出現セル巨態細胞

第十二例腫瘍細胞轉移著明ナル淋巴腺ニ於テ、腫瘍細胞増殖ノ周邊部ニ胞巢ヲ圍繞シテ又胞巢ノ中央部角化物質ノ破壊セル部ニ多數ノ大小不同ノ不正形又ハ圓形或ハ橢圓形ノ巨態細胞出現セリ。核ノ性狀、大サ、數及ビ異物ニ對スル態度ハ上來記載セシ巨態細胞ト同様ナリ。異物性巨態細胞ト認ム可キモノナリ。尙ホ一個ノ腫大セル淋巴腺ニ於テハ腫瘍細胞ノ轉移ヲ認メズ。然レドモ肉芽性變旺盛ニシテ所々乾酪樣部存シ、其ノ周圍ニ多數ノ異物性巨態細胞出現

セリ、該部ハ吾人ガ結核竈ニテ觀シ所見ト甚ダ類似ス、然レドモ結核菌ハ證明シ得ザリキ。而シテ此等巨態細胞中ニハ網狀織内皮ガ新生セラレ、此ノ新生内皮ハ肥大シ且ツ増殖シ相隣接セルモノト融合シ、且ツ密集シテ明ラカニ巨態細胞ヲ形成セルガ如キ像ヲ認メシメ、而シテ巨態細胞ノ核ハ周圍ニ多數存セル網狀織内皮細胞ノ核ト相類似シ、密接ナル關係ヲ有スルヲ想ハシム。清野氏(前出)モ亦カカル像ニ就キ記載セリ。尙ホ清野氏(前出)ハ造血臓器ノ巨態細胞ニ就キ次ノ如ク論ゼリ。即チ淋巴腺、脾臟等ノ造血臓器ニ於ケル病變ニ際シ巨態細胞ハ主トシテ局所ニ於ケル組織球ヨリ生ズ、而シテ網狀織内皮ハ遊離組織球ヲ生ズルガ故ニ巨態細胞ノ形成ニハ唯間接ニ參與スルノミナリ。サレド時トシテ造血臓器ノ新生組織ニハ網狀織内皮ガ新生セラレ其ノ新生網狀織内皮ハ肥大シ同時ニ多少核ノ増殖ヲ伴ヒテ相隣セル細胞ト癒合シ、不規則ナル固定性巨態細胞ヲ生ズル事アリト。

(へ)、上述各項ニ於テ記載セシ巨態細胞ハ異物性巨態細胞ナリ。

要スルニ上來記載セシ巨態細胞ハ其ノ出現部位、細胞核ノ性狀、尙ホ機能的關係等ヨリシテ從來異物性巨態細胞トシテ認メタルモノト一致ス。故ニ余モ亦異物性巨態細胞ト信ズルモノナリ。異物性巨態細胞出現ニ當リ異物トシテ擧ゲラレタルモノ甚ダ多數ナリ。Meyer (Munasseニ據ル)ハ「コレステリン結晶及ビ死シタル上皮細胞ヲ異物トシテ擧ゲ、尙ホ死シタル有機體及ビ細胞並ニ部分或ハ死シタル有機體自己モ亦異物タリ得ト。Munasse(前出)ハ壞死竈ヲ異物ト認メ、Becher(前出)ハ有機體ノ退行性變(壞死又ハ類壞死)ヲ來シタル體部分又ハ產生物ノミナラズ、亦尙ホ生理的ニ存セザル眞性組織等ハ異物トシテ作用スルモノナリトナセリ。Schwartz(前出)ハ上皮細胞ノ產生物即チ角化細胞又ハ石灰沈着等ヲ異物トシテ認メ、清野氏(前出)ハ異物トシテハ動物體ニ全然附着セザル有機性及ビ無機性固形體ナル場合アリ、又吸收セラレ難キ濃厚滴狀物質ナル事アリ、動物組織ノ一部ナリトテモ之レガ死滅シテ吸收セラレ難キ壞死組織トシテ作用スル場合ニテモ等シク巨態細胞ヲ生ズ、但シ刺戟ノ強サ及ビ其ノ持續時間等ニヨリテ病竈ニ現ハルル巨態細胞ノ大サ、數、存在日數ニ差アリ。亦刺戟ノ種類ニヨリテ巨態細胞ノ生ジ易キモノアリト論ゼリ。余ノ例

ニ於ケル異物性巨態細胞ハ腫瘍細胞群ノ増殖ノ刺激ニヨリ一方ニテハ旺盛ナル肉芽性變ノ爲メニ又上皮細胞ノ變性產物タル角化物質亦吸收セラレ難キ壞死組織ノ爲メニ形成セラレタルモノニシテ、清野氏(前出)ノ主張セシ如ク刺激ノ種類、強サ、持續時間等モ亦關係ヲ有スルモノナル可ク、尙ホ又血管内ニ侵入セル腫瘍組織群ノ刺激ニヨリテモ血管内ニ異物性巨態細胞ヲ生ゼシメ得ベシ。

## (2)、巨態細胞ノ本態

異物性巨態細胞ノ本態ニ就テハ諸家ノ論争ノ存スル所ニシテ、現今全ク一定セリト云フ可カラズ。上皮細胞説ヲ主張セルハ、Kraus, Friedländer, Goldmann, Klebs (Becherニ據ル)ノ諸氏ニシテ、Weiss, Bohm, König (Becherニ據ル)ハ結締織性ノモノナリト論シ、Rindfleisch, Baumgarten, Mureland, Brosch, (Becherニ據ル)ハ其ノ根源ヲ白血球ニ歸セリ。其他種々ノ細胞ヨリ發生スト主張セルモノハ、Rustitzky, Kruckmann, Recklinghausen 門下生 (Becherニ據ル)ノ諸氏ナリ Peterson (Schwarzニ據ル)ハ上皮細胞性ノモノ、結締織性ノモノ、筋纖維性ノモノノ存在ヲ主張シ、Schwarz (前出)、Becher (前出)ハ上皮細胞性及ビ結締織性ノモノノ存在ヲ主張セリ。木村氏(前出)ハ結締織性ノモノ及ビ本態不明ナルモノノ存在ヲ論ジ。垂水氏(前出)ハ清野氏組織球性ノモノヲ主張セリ。林氏(前出)、清野氏(前出)等ノ實驗的研究ハ巨態細胞本態ノ闡明ニ向テ一世期ヲ劃シタル感無キ能ハズ。今清野氏(前出)ノ言ヲカリテ記載スレバ、次ノ如シ。『結締織ノ炎症ニ際シ林氏及ビ余ハ局所ニ存在シ居ル組織球(クラスマトチーテン)ガ組織球性巨態細胞ヲ形成スルニ主要ナルモノナレドモ血液組織球モ遊離シ來リテ之レガ形成ニ參與スベシ』ト。尙ホ清野氏(前出)ハ結核竈ニ於テ特殊ノ形態アルラングハンス氏型巨態細胞ヲ生ズレドモ、之レモ組織球性ノモノナリト。亦同氏ハ結締織ヨリ巨態細胞ノ形成セラルル事ヲ否定シ、次ノ如ク論ゼリ。結締織成形細胞ヨリ巨態細胞ノ形成セラルル事ハ、結締織研究ヲ主トセル近代研究者ハ承認セズ。余等モ、本研究ニ於テモ亦纖維性物質ヲ製造スル特性アル此ノ細胞ヨリ巨態細胞ヲ生ゼシ事ヲ見ザリキト。蓋シ組織ノ炎症性變化ヲ來セル場合其ノ部ニ組織球ノ多數ニ存在セル事ハ已定ノ事

實ナリトス。現今生體染色應用ニ依ル腫瘍研究ニ際シ、腫瘍組織内多數ノ組織球ノ出現スル事ハ藤浪、稻本氏(前出)等、藤浪、加藤氏<sup>(22)</sup>、清野氏(前出)、藤繩氏<sup>(23)</sup>、Goldmann<sup>(24)</sup>(清野氏ニ據ル)、花岡及ヨSchlemm<sup>(25)</sup>等多數諸氏ノ研究ニヨリテ明ラカナル所ナリ。殊ニ花岡及ビSchlemm(前出)紡錘形肉腫ヲ「ラツテ」ニ移植シ、生體「ツリバン青」攝取ニテ檢シ、腫瘍中心部壊死セル部ニ色素顆粒陽性ナル巨大貪食細胞ガ圍繞シテ存シ尙ホ腫瘍細胞間ニモ散在性ニ存セリト報告セリ。是レヲ以テ考フル時ハ、余ノ檢セル癌腫例ニアリテモ間質肉芽組織中ニハ多數ノ「クラスマトチーテン」ノ存在シ、且ツ「クラスマトチーテン」ハ腫瘍實質内ニモ遊走シテ存スル事ハ推斷ニ難カラズ。然ルニ余ノ檢セシ巨態細胞ハ如何ニシテモ結締組織細胞、上皮細胞、血管内被細胞及ビ白血球ヨリ發生セシト認ムベキ所見ヲ得ズ。加フルニ余ノ第二十二例ニテ認メタル如ク、脂肪物質含有組織球ガ多數ノ巨態細胞ヲ形成セル事實ヨリシテ余ノ例ニ於テ認メタル異物性巨態細胞ハ組織球形ノモノナリト思考ス。而シテ貪食性作用ヲ有スル單核組織球ヨリ成リタル巨態細胞ハ亦強キ貪食作用ヲ有スル事ハ清野氏(前出)已ニ揚言セシ所ナリ。

(3)、巨態細胞ノ生成機轉

巨態細胞ノ生成機轉ニ關シテハ古來ニ說アリテ未ダ一定セズ。一ツハ多細胞ノ融合ニヨリテ形成セラルト言ヒ、他ハ一細胞ノ原形質ノ分裂ヲ伴ハザル核分割ナリト云フ。Munisse(前出)ハ多細胞ノ融合ニヨリテ形成セラルト論ジ、然レドモ完成セル巨態細胞ニテハ間接核分割ニ依ル可シト。Beeler(前出)ハ原形質分裂ヲ伴ハザル一細胞ノ間接核分割ニ因ルト共ニ一方ニテハ新生細胞ノ融合ニヨリテ生ズト。木村氏(前出)ハ結締組織細胞ノ融合ニヨリテ形成セラルト説ケリ。生體染色ノ應用ヲ以テスルモ、生成機轉ニ關シテハ一定セズ。林氏(前出)ハ單細胞説ヲ固持シ、清野氏(前出)ハ「直接分割ヲ伴フコトアル可キモ、主トシテ多細胞ノ融合ニヨリテ形成セラル」ト主張セリ。而シテ清野氏ハ其ノ著書ニ於テ兩説ノ比較論ヲ試ミ、次ノ如ク結論セリ。即チ以上ニヨリテ明ラカナル如ク多細胞説モ單細胞説モ動ス可カラザル證據ヲ基礎トシテ立論セラレタルモノニ非ズ、其ノ證據トスル所ハ觀察方法ニヨリテ如何様ニモ考ヘラル

ルモノナリ。而シテ兩説其弱點トスル所ハ多細胞説ニアリテハ此種細胞核ガ全然増殖セズト云フ材料ヲ缺クコト、單細胞説ニアリテハ如何ナル型式ノ核分割アリヤ明言シ得ザルコトナリ。從ツテ兩説ハ今日ニ於テ其ノ正否ヲ分ツニ際シ證據不十分ナル水掛論ノ感アリト。余ノ例ニアリテモ其ノ生成機轉ヲ説明スルニ足ル所見ニハ接セズ。即チ多數ノ例ニ於テ核分割ノ如キハ之レヲ認メズ、然レドモ往々巨態細胞ノ癒合ニヨリテ生ジタルガ如キ所見及ビ巨態細胞ノ前階級ト認ム可キモノハ所々認メ得タル所ナリ。然ルニ余ノ第十六例ニ於テ角化物質ニ接着シテ吸收食作用ヲ營メル巨態細胞ニ於テ、一個明ラカニ直接核分割像ヲ認メタリ。カカル像ハ單細胞論者ノ久シク常ニ探索セシ所ニシテ、多細胞論者ニ一矢ヲ報ヒタル感無キ能ハズ。直接核分割ノ存スルヤ巨態細胞ノ核ニ於テ大小不同、可染質ノ多寡、核ノ形狀ニ差違ノ存スルヤ明ラカナル事實ナリ、亦カカル不規則ナル分割ハ吾人ガ現今ノ如何ナル方法ニヨリテモ屢々見ル事ヲ得ザル速サニテ分割作用ヲ終了シ得ルコトモ亦考ヘ得可シ。然ルニ余ハカカル一ヶ所ノ所見ヲ以テ巨態細胞ノ成生機轉ノ全幅ヲ説明セント欲スル者ニ非ザレ共、一部ニ於テハ確ニ直接核分割ノ方法ニヨリテ核ノ増殖シ得ル事ハ余ノ確信スル所ナリ。

#### (4)、巨態細胞出現ノ意義

Petersen (木村氏<sup>(45)</sup>ニ據ル) Unbunsch (木村氏ニヨル) ハ癌腫ニ於ケル巨態細胞ハ異物性巨態細胞ト見做ス點ニ一致シ、尙ホ Petersen (前出) ハ結締織性巨態細胞ノミガ喰細胞性ヲ有シ、破壊吸收作用ヲ發揮シ癌腫ノ自然治癒ヲ來スト論シ、Denecke (Schwartz<sup>(46)</sup>ニ據ル) ハ吸收作用ヲ有スルモノハ白血球ガ第一位ニシテ次デ肉芽性組織次デ巨態細胞ノ順序ナリト言ヒ、Becher (前出) Schwartz (前出) 結締織細胞性又上皮細胞性巨態細胞ハ其ニ喰細胞性ヲ有シ、攝取シタル物質ヲ胞體內ニテ消化吸収スト解キ而シテ Becher (前出) ハ巨態細胞ノ出現ニテ組織化ノ準備的變化ヲ來シ其ノ部結締織新生シテ自然治癒ヲナサシムト。Schwartz (前出) ハ肉芽性組織モ亦異物ヲ吸收スル作用強ク、異物ノ吸収ニハ必ラズシモ巨態細胞ノ出現ヲ要セズト、木村氏(前出)、垂水氏(前出) ハ巨態細胞ノ出現ヲ自然治癒現象ト見做ス點

ニ一致セリ。清野氏(前出)ハ炎症ニ際シ巨態細胞ノ役目ハ消失シ難キ異物ニ對シテ其ノ強大ナル貪食作用ヲ發揮スルニ在リ、各種ノ異物ヲ體內ニ取り消化吸収シ又一種ノ分泌物ヲ出シテ之レヲ溶解セシム、而シテ單核組織球ニモ吸収貪食作用存スルモ巨態細胞ハ大形ナル爲メ更ニ有力ナリト。

Baltes(清野氏ニヨル)ハ炎症ニ於ケル巨態細胞ガ其ノ一側ニ於テ細血管壁ニ接シ病竈ニ存在セル種々ノ物質ヲ直接血管壁ニ附與スト稱セリ。林氏(清野氏ニヨル)ハカカル位置ニ置カレタル巨態細胞ハ甚ダ稀ナリトセリ。余ハ余ノ實驗セシ異物性巨態細胞ニ就キ次ノ如ク云ハントス。癌腫組織ニ於ケル巨態細胞ハ吸收サレ難キ異物ニ對シテ貪食作用ヲ發揮シ一種ノ分泌物ヲ作用セシメテ之レヲ溶解シ、遂ニ消化吸収セシム。尙ホ亦異種、同種ノ細胞ノ變性セルモノ生活力ノ弱マリタルモノ等モ貪食スル作用ヲ有シテ所謂組織化ヲ容易ナラシムモノナリト考フ。而シテ巨態細胞自己モ亦融合シテ尙ホ大ナル巨態細胞ヲ構成シ、其ノ作用ヲ一層大ナラシムガ如キモノアリ。然ルニ巨態細胞モ早晚死滅スルモノナル事ハ林氏(前出)、清野氏(前出)ノ實驗ニテ明ラカナル所ナリ。Schwartz(前出)ノ解説ノ如ク異物ノ吸収ニ向ツテハ必ラズシモ巨態細胞ノ出現ヲ必要トセズ、肉芽組織亦吸收作用ヲ有スト論ゼシ如ク、余モカカル事ノ存在ヲ所見ヨリシテ信ズルモノナリ。

## 二、癌細胞胞巢内ニ於ケル白血球ノ集簇

腫瘍組織内ニ白血球ノ進入スルコトハ已定ノ事實ナリ。而シテ殊ニ扁平上皮癌ニ於テ屢々著明ナリ。古來癌腫ノ部分的自然治癒現象ヲ論ジタル學者ニシテ、胞巢内白血球ノ集簇ヲ以テ意義アルモノト記載シタルモノ余未ダ之レヲ知ラズ。余ハ胞巢内白血球ノ集簇ノコトガ癌腫胞巢ノ破滅ニ重大ナル關係ヲ有スルモノト信ズ。即チ上來屢々記載セシ如ク、胞巢内白血球ノ集簇ニヨリ胞巢ハ囊狀ニ擴大シ、遂ニ破壊シ、無構造トナリ周圍ヨリ肉芽性組織ノ進入ニヨリテ全ク肉芽性組織ト化シ、遂ニハ組織化ヲ現ハスモノナリ。此ノ場合巨態細胞ノ出現ハ必ラズシモ必發ノ事ニ非ズ、而シテ斯ノ如キ像ハ腫瘍組織増殖ノ周邊部強剛ナル結締組織ニ接セル部ノ胞巢及ビ尿道等ノ抵抗力強キ部ニ接セル胞巢

ニ於テ屢々經驗スル所見ナリ。且ツ此ノ白血球集簇ノ部ニハ細菌ヲ證明シ得ル場合ト、セザル場合トアリ。亦第十七例ニ於テハ多核白血球ノ代ニ「エオジン嗜好性白血球」ニヨリテモ同様ノ變ヲ示セリ。以上ノ事實ヨリシテ扁平上皮癌ニカカル變化ノ存在ハ癌腫増殖上甚ダ注意スベキ事ニシテ、癌腫自己ノ増殖ニ對シテ甚ダ不良ナル變化ナリ。

### 三、細菌ノ感染

胞巢内白血球ノ集簇存スル時ニ多數ノ細菌ノ所在ヲ認ムル事ハ已ニ記載セシ如シ。然ルニ第二十例ニ於テ細菌感染ガ癌腫細胞増殖ノ上ニ甚ダ不良ナル機轉ヲ來スモノナル顯著ナル所見ニ接セリ。即チ肉眼的ニ病變甚ダ強キ部ヨリ製作セル多數ノ標本ニ於テ唯一小部ニ於テ腫瘍細胞群ノ存在ヲ認ムルノミ。之レトモ強ク退行性變ノ像ヲ呈セリ。其他ノ全部ノ標本ニ於テ腫瘍細胞ヲ認メズ。即チ腫瘍細胞巢ハ細菌感染ノ爲メ全部壊死ニ陥リ、一部肉芽性變ヲ呈セリ。余聞ク丹毒球菌ヲ感染セシムル事ニヨリ癌腫細胞ノ廢滅ヲ來セシ事ヲ、然レドモ Wollheim, Willy<sup>(96)</sup>ハ新生組織殊ニ惡性腫瘍ニ丹毒菌ヲ作用セシメタルモ腫瘍組織ヲ廢滅セシムルコトヲ得ザリキト。併シ余ノ例ニ於テ明ラカニ示セル如ク細菌感染ニヨリテ癌腫細胞ノ死滅ヲ來セルハ癌腫細胞ノ生物學的性質闡明上意義ノ存スルモノナルコトハ疑フ可カラズシテ、癌腫細胞ト細菌毒素トノ間ニ關係ノ存スルヤ否ヤ不明ナルモ、之レ亦興味アル問題ノ一ナリ。

### 四、癌腫組織間質ニ於ケル反應性變

癌腫組織ニ於テ角化變性強キモノホド、間質ニ結締組織増殖ノ旺盛ナルモノホド癌腫増殖上甚ダ不良ナル事ハ余ノ說明ヲ要セズトモ學界已定ノ事實ナリ。然ルニ間質ニ於ケル圓形細胞ノ浸潤ノ意義ニ就テ古來說ヲナスモノ甚ダ多キモ、一定セザルガ如シ。圓形細胞ノ起源ニ就テハ一ツハ血管ヨリ由來シ、一ツハ組織中ヨリ發スルモノニシテ、間質ニ於テ強キ浸潤ヲ來シ尙ホ旺盛ナル結締組織ノ増生ヲ來セルモノアリ。而シテ圓形細胞浸潤ノ意義ニ就キ V. Hensenmann (藤浪氏ニヨル)ハ腫瘍細胞ノ増殖侵蝕ニ對シテ防禦作用ヲ有スト説キ、Bornmann (前出)ハ其ノ表皮癌ノ論文中ニ圓形細胞ノ浸潤ハ組織ヲ鬆粗ニシ癌腫細胞ノ増殖ヲ容易ナラシムト解ク可シト主張シ、W. Heidemann<sup>(97)</sup>ハ圓形細胞ノ

浸潤ハ今迄眠リツツアル結締組織ヲ覺醒セシメ、之等ノ増殖ヲ促スト論ゼリ。藤浪氏(前出)ハ之レヲ癌腫増殖ニ對スル組織ノ反應ナリト説明シ、之レヲ以テ直チニ癌腫ノ進行ヲ助勢スルヤ將タ之レニ敵對スルヤ一定スル能ハザルナリトセリ。菊地氏(前出)モ亦之レニ贊セリ。余ノ例ニ於テ之レヲ檢スルニ、陰莖癌殊ニ乳嘴型ニ屬スルモノニアリテハ、圓形細胞ノ浸潤甚ダ高度ニシテ斯ノ如キモノヲ Waldeyer(前出)ハ Carcinoma granulosum ト名ケタル事ハ前述セシ如シ。而シテ余ノ二十四例中八例ニ於テ圓形細胞浸潤強ク、多少ノ「プラスマ細胞」ヲ伴ヒ、周圍組織殊ニ鞏固ナル纖維束及ビ組織中ニ癌瘍細胞ニ先驅シテ浸潤シ、之レヲ鬆粗ナラシメ腫瘍細胞ノ進入ヲ容易ナラシムルモノト認ムベキ像ヲ呈セリ。就中六例ニ於テ著明ナルヲ認ム。亦一例ニ於テハ胞巢周圍又ハ内ニ多數ノ圓形細胞ノ浸潤ヲ來シ、癌腫増殖ニ對シ不良ノ意義ヲ附與セシト見做スベキ部存セリ。

要スルニ圓形細胞ノ浸潤ノ癌腫増殖ニ對スル意義ハ一定ナリトスベカラザルナリ。

## (又)、「メラニン色素」ニ就テ

### 一、顯微鏡的所見ノ總括ト私見

#### (イ) 組織的ニ癌腫ト診斷シ得ル部ニ於ケル色素

上皮細胞已ニ異型ヲ呈シ旺盛ナル増殖ヲ示セル部ニ於テハ概シテ上皮、真皮兩層ニ色素ヲ認メズ。然レドモ第二十二例ニ於テハ腫瘍細胞ノ異型強ク胞巢ハ不規則ニシテ明ラカニ惡性化セル細胞中ニハ色素ヲ認メザルモ、上皮細胞間ニ占居シ上皮細胞ノ核ヨリモ甚ダ小ナル圓形或ハ橢圓形又ハ不正形ノ淡明ナル核ヲ有シ、細胞ノ突起ヲ上皮細胞間ニ出セル色素細胞ガ可ナリニ存セルヲ認メタリ。色素顆粒ヲ多數ニ有スルモノニテハ核ハ分明ナラズ。此部真皮組織中ニハ何所ニモ色素細胞ヲ認メズ、第十九例ニ於テ上皮細胞已ニ異型ヲ呈シ惡性化シ胞巢モ不規則ナル部ニ於テ基底層ニハ色素ヲ認メザルモ、表皮淺層ノ部ノ上皮細胞核ノ周圍ニ所々少量ノ色素ヲ含メルモノアリ。其他上皮層中ニ進入セル小圓形ノ可染質ニ可ナリ富メル核ヲ有スル遊走セル細胞ニ帶褐黃色ノ色素ヲ有セルモノ存ス。



## (ロ)、側性増殖ヲ呈セル部ニ於ケル色素

此部ニ於ケル色素ハ上皮眞皮兩層共ニ認メザルカ、兩層ニ尙ホ現在セルカ、表皮ニノミ存在セルカ、又ハ眞皮ニノミ存在セルカノ四所見ニ接ス。併シ一般ニハ正常皮膚ニ見ル如キ多量ニ非ズ。往々亦多量存セル事アリ、兩層ニ全ク色素ヲ認メザルハ第七例、第九例、第十五例、第二十一例ニシテ此ノ中第七例、第二十一例ハ正常皮膚ニ於テモ全ク色素存在セズ、然ルニ大多數ノ例ニテハ兩層カ何レカ一方ニ色素ヲ認ム。而シテ表皮ニ色素ヲ認ムル場合眞皮中ニ全ク色素ヲ認メザルカ又甚ダ稀ニ認ムルハ第四例、第五例、第十四例、第十六例、第十七例、第十九例、第二十二例、第二十四例ナリトス、上皮中全ク色素ヲ認メズ眞皮中ニ色素細胞存スルモノハ第一例、第五例、第六例、第十例ナリ、然ルニ上皮層中ニ存スル色素ハ其ノ存在部位ニ二種アリ、一ツハ主トシテ基底細胞核ノ周圍稀ニハソレヨリ淺層ノ上皮細胞核ノ周圍ニ顆粒狀ニ存スルモノ、一ツハ上皮細胞間ニ存シ突起ヲ細胞間ニ出セル色素細胞ナリトス、所謂「クロマトフォオーレン」ニ一致セリ。之等二種ノ部位ニ存スル色素ハ混在シテ存スルアリ、又上皮細胞中色素ヲ認メザルニ色素細胞ノミ存スルアリ。

## (ハ)、諸例ニ於ケル増殖ヲ營マザル部ノ上皮、眞皮ニ於ケル色素

諸例ニ於テ増殖ヲ營マザル部ノ上皮、眞皮ノ兩層ニ於テハ必ラズシモ常ニ色素ヲ認メシムルモノニアラズ。兩層ニテ認メザル事アリ、又兩層何カ一方ニ於テ色素ヲ認メザルコトアリ。色素ノ量的關係モ甚ダ不規則ニシテ兩層ニ色素ヲ認メザルカ、又ハ甚ダ減少セルモノハ第十例、第二十二例、第二十四例ニアリ。此中第二十二例ノ肉眼的ニ灰白色ヲ呈シ浮腫狀ヲ爲セル部ニハ色素ヲ全ク認メザルアリ、稀ニ兩層ニ極少量ニ認ムルアリ。第二十四例ニテハ色素ヲ有セザル部ハ上皮細胞ハ概シテ空胞變性ニ陥リ、核ハ一方ニ壓排セラレ、細胞ノ配列モ多少亂レ連絡モ粗ナル部ナリ。兩層ニ於テ色素ヲ認ムルハ第一例、第二例、第十二例、第十三例、第十五例、第十六例、第十八例ナリ、之レトモ上皮ニ色素多ク、眞皮ニ少ナキアリ。亦此ノ反對ナルアリ。而シテ眞皮中ニ色素細胞甚ダ多數ナルニカカハラズ其ノ部ニ相

當セル表皮ニ色素ヲ全ク認メザルアリ、兩層ニ色素ノ存在セル時ニ上皮層内色素ヲ有スル部位ニ二種アリ、一ツハ上皮細胞主トシテ基底細胞ノ核ノ周圍ニ又棘細胞層ノ角化、顆粒細胞層ノ細胞中ニ存スルモノ、一ツハ上皮細胞間ニ殊ニ基底部ノ細胞間ニ分岐セル色素細胞ナリ。又色素細胞ノ真皮ニ突起ヲ出セルアリ。又兩層ニ亘リテ存スルアリ、カカルモノハ第八例、第十一例ニ於テ認ム。上皮層ニノミ色素存シ真皮中ニハ全ク色素細胞ノ存セザルハ第三例、第四例、第五例、第七例、第九例、第十七例、第十九例、第二十一例、第二十二例ノ多數例ニアリ。之等ニ於テモ色素ハ一般ニ上皮細胞核ノ周圍ニ存セリ。唯第十九例ニ於テ上皮細胞間ニ「シロマトフォーレン」ヲ認ム。而シテ色素ハ主トシテ基底部ニ多キモ、淺層ノ部ニモ多少存ス。

#### 尿道上皮ニ於ケル色素

第十六例ニ於テ腫瘍細胞ノ増殖尿道附近ニ進入シ、未ダ一汎ニ尿道ハ侵蝕セラレザルモ、甚ダシク接近シ一部ニ於テハ尿道ヲ侵襲セリ。腫瘍細胞ノ爲メニ壓迫セラレタル尿道ニ於テ腫瘍細胞ノ接近セル部ノ尿道上皮、真皮中ニ色素ヲ認メズ、之レヨリ少シク隔リテ真皮内著明ノ炎症變ノ有セル部及ビ對側上皮層ニ殊ニ基底細胞中核ノ周圍ニ多クノ色素存在セリ。然レドモ此部ニ相當セル真皮中ニハ全ク色素ヲ認メズ。

上來記載セシ組織像ヨリシテ「メラニン色素本源ニ對スル私見ヲ述ブ可シ、一方腫瘍ヲ有スル陰莖皮膚ニ於ケル色素分布ノ狀ハ概シテ次ノ三種ニ分チ得可シ即チ(1)真皮上皮兩層ニ於テ全ク色素ヲ認メザルカ又ハ共ニ少ナキカ、或ハ可ナリニ之レヲ有スル場合、(2)真皮ニノミ色素細胞ヲ認ムル場合、(3)表皮ニノミ色素ヲ認ムル場合之レナリ。殊ニ第三種ハ多數ノ例ニ於テ認ムル事ヲ得。而シテ第十七例ニ於テ真皮組織ハ硝子樣變性ヲ認メ色素ヲ何所ニモ認メザリシニ、上皮細胞殊ニ基底細胞中ニ色素ノ存在スルコト又尿道上皮ニ於テ真皮中何所ニモ色素ヲ認メザルニ上皮基底細胞核ノ周圍ニ多量ノ色素存スル事等ハ「メラニン色素真皮本源論者ノ甚ダ解決ニ苦シム所、且ツ第二種ノ如キハ上皮細胞ノミガ色素ヲ作ルト云フ、上皮本源論者ノ説明ニ甚ダ困難ナル事項タラズンバ非ズ。故ニ余ハカカル組織的根據ヨ

リシテ、色素細胞ハ上皮及ビ真皮組織ニ於テ之レヲ形成セラルル事ヲ承認シ、即チ二元説ヲ探ラントスルモノナリ。

## 二、「メラニン」色素ノ發生ニ關スル諸説

「メラニン」色素發生ニ關シテ種々ノ方面ヨリ種々ノ動物ニ就キテ多數ノ研究アリテ、諸説紛々トシテ定マラザルアリ。

(一) 表皮細胞自個或ハ外胚葉細胞ガ自個ニ色素ヲ形成ストナスモン、Waldeyer (Meirowskyニ據ル) Loeb, Puschkoft, Winkeler, Kodis, Paul Carnot und Cl. Deflandre, Devant. (以上Meirowskyニ據ル) Kaposiニ據ル Mertschingニ據ル Postニ據ル Grundニ據ル Dalla Faveraニ據ル Wietung u. Handlニ據ル Hendorferニ據ル Ribbert (前出)ニ據ル Walter Trenherzニ據ル Meyersonニ據ル Lignacニ據ル 速水氏ニ據ル 竹内氏ニ據ル 及ビ其他諸氏アリ。

(二) 「メラニン」色素ハ真皮結締組織ニテ形成セラレ、表皮ニ運搬セラルルモノト主張スルモノ、Aeby, Riehl, Wild, Unna, Zimmermann (以上Meirowskyニ據ル) Wernann, v. Leidig, H. Müller (以上竹内氏ニ據ル) Köllikerニ據ル Ehrmannニ據ル Kargニ據ル Notnagelニ據ル Renant (Meirowskyニ據ル) Demievilleニ據ル Philippon (Meirowskyニ據ル) Kerbert (Meirowskyニ據ル) Joseph (Meirowskyニ據ル) Kahldenニ據ル M. B. Schwidニ據ル Raymondニ據ル 山極氏ニ據ル 茂木氏 (前出) 等ノ諸氏ナリ。

(三) 上皮本原説及ビ真皮本原説ノ兩々相對セル後ニナリテ表皮ニモ真皮ニモ色素ヲ形成ストノ二元説ヲ唱フル學者次第ニ多數トナリ又 Meirowskyニ據ル Kneibich (Meirowskyニ據ル) Rahlニ據ル Schwalbeニ據ル Casparyニ據ル Rosenstadiニ據ル Kromayer (Meirowskyニ據ル) Borst (前出)ニ據ル 今氏ニ據ル 筒井氏ニ據ル 等ノ諸氏ハ主ニメラニン二元説ヲ主張セリ。

而シテ Virchowニ據ル Unna, Ehrmann, Aeby, Lecker Fuchs (以上竹内氏ニ據ル) List (Rosenstadiニ據ル) Langhansニ據ル 氏等ハ色素ハ血液ニ由ルモノナリト論ゼリ。斯ノ如ク色素發生ニ就キテハ學界年來ノ爭議ニ屬ス。而シテ分歧セル色素細胞ヲ一八一九年ニ Sangiovanni (Meirowskyニ據ル) Chromatophorenト名付ケタリ。Chromatophoren, ヲ表皮膚ニ發見セシム G. Simond (Meirowskyニ據ル) ヲ以テ初メトス。其後 Virchow, Greenhow, Rossbach, Rieseler

(540)

Bunger (以上 Meirowsky ニ據ル) 等ハアデソン氏病ノ真皮中ニ Chromatophoren ヲ證明シ其ノ後之レニ就キテ多數ノ研究者續出シ、此ノ Chromatophoren ノ本源ニ就キテ Grunl (前出)、Post (前出)、Lignac (前出) 及ビ其他ノ諸氏ハ上皮細胞性ノモノト認メ、筒井氏(前出)ハ上皮細胞性ノモノナラント説ケリ。其他 Schwalbe (前出)、Kerbert (Meirowsky ニ據ル) 及ビ眞皮本源論者並ニ二元論者ノ學者ハ結締織性ノモノト認メタリ。又 Lydig (前出)、Ribbert (前出) ハ Chromatophoren ハ運動性ヲ有スト論ゼリ。最近竹内氏<sup>(93)</sup>ハ上皮層ニ於テ Chromatophoren 様ノモノヲ認ムルモ之レ Chromatophoren ニ非ズシテ色素ヲ有スル上皮細胞ノ壓迫セラレ萎縮ニ陷レルモノナリト説明セリ。余ハ上述セシ上皮層中上皮細胞間ニ存在セル所謂 Chromatophoren ニ就キテ其ノ核ノ性状ヨリシテ上皮細胞ノ核ト區別シ得ル點ヨリ又吾人ガ屢々認ムル真皮中ニ於ケル Chromatophoren ト甚ダ相類似セル點ヨリシテ、該細胞ハ運動性ヲ有シ結締織性ノモノニシテ、上皮細胞層ニ遊走セルモノト信ズ。竹内氏所説ニ賛成ス可キ所見ニハ接セズ。又一部ノ學者ハ色素ヲ有スル基底細胞ガ遊離シテ Chromatophoren トナリタルガ如ク説クモ、余亦カカル像ニ接セシ事無シ。然ルニ上皮層中細胞ノ間ニ Chromatophoren ノ外ニ普通ノ Chromatophoren ノ如ク突起ヲ有セザル一種ノ遊走細胞ト見做ス可キモノノ色素ヲ有シテ存在セルヲ認ム。

### 三、扁平上皮癌組織及ビ其ノ周邊部皮膚ニ於ケル「メラニン」色素

カカル部ニ於ケル「メラニン」色素ノ消長ニ關シ記載セシハ茂木氏(前出)ノ陰莖癌研究及ビ片山氏<sup>(64)</sup>ノ癬痕癌ニ就キテノ研究ノ如キアリ。茂木氏(前出)ハ「メラニン」色素ハ腫瘍化セル上皮細胞索内ニ於テ全ク之レヲ認メズ、加之腫瘍附近上皮細胞ガ尙ホ未ダ認ム可キ異型態の増殖ヲ營マザル程度ノ上皮基底細胞中ニ於テモ已ニ色素消失スト。片山氏(前出)ハ癌腫細胞及ビ間質ニハ「メラニン」色素ヲ認メズ、腫瘍ニ最モ接近セル側性増殖ノ狀態ニアル基底細胞ニモ多クハ色素ヲ存セズ、此部ニテ真皮内ニ色素ノ存在セルアリ、而シテ基底細胞ノ色素ハ腫瘍ニ少シク遠ザカリタル所ニ於テ始メテ證明シ得可シ。即チ基底細胞内色素ノ存在セル所ニハ真皮内常ニ Chromatophoren ヲ缺ク事無シト。余ノ

檢セル例ニ於テハ上述二氏ノ記載セシ癌腫及ビ間質ニ於テ色素ヲ缺クトノ事實ニハ概シテ一致セルモ、第十九例、第二十二例ニ於テハ腫瘍化セル上皮細胞内色素ヲ認メザルモ上皮細胞間ニ多數ノ分岐セル色素細胞及ビ一種ノ色素ヲ有スル遊走細胞ヲ認メタリ。其他側性増殖ノ部ニ於ケル所見ハ上述二氏ノ所見トハ唯一部ニ於テハ一致スルモ、大體ニ於テ甚ダ異ナリ、即チ上述セシ如シ。殊ニ片山氏ガ基底細胞内ニ色素存スル時常ニ眞皮中 Chromatophoren ヲ缺ク事無シト記載セシハ、余ノ多クノ例ニ於テハ反對ニシテ、即チ基底細胞中ニ色素ヲ多ク含メル時ニモ甚ダ屢々眞皮内ニ Chromatophoren ヲ認ムル事ヲ得ズ。又茂木氏(前出)ハ側性増殖ノ部ニ於テ基底細胞中色素已ニ消失セリト云フモ余ノ少數ノ例ニテハ認メタリ、而シテ癌腫細胞及ビ間質ニ色素消失スル事實ニ就キ茂木氏(前出)ハ次ノ如ク説明セリ、即チ増殖旺盛ナル癌腫組織ニ於テ全ク色素ヲ認メザルハ元來結締組織ニ屬スベキ Chromatophoren 細胞ノ增生ヲ來サザルガ爲メナリトテ眞皮本源ノ至當ナルヲ論ジ、尙ホ上皮細胞ノ生理的官能ニ失調ヲ來シ色素吸收力ヲ失フ事及ビ上皮過剩増殖ニヨル上皮細胞間已存 Chromatophoren 細胞ノ壓排セラレタル結果ナリトセリ。片山氏(前出)ハ上皮細胞ノ新陳代謝障礙ノ爲メニメラニン色素ヲ攝取セザルト、Chromatophoren ノ驅除セラルトニ因ルト説ケリ。余ハ上述二氏ノ所見ト異ナルヲ以テ腫瘍組織中ニ於ケル色素消失ノ事實ニ向ツテノ解説モ又異ナリ、即チ余ハ色素消失事由ニ就キテ直接腫瘍細胞ニ於ケル機能退化及ビ間接ニ色素形成細胞ノ機能變調ニ歸セントス。

#### 四、淋巴腺ニ出現セル「メラニン」色素

余ノ例第十六例ニ於テ指頭大ニ腫大セル淋巴腺ニ於テ未ダ癌腫細胞ノ轉移ヲ認メズ、慢性淋巴腺炎ノ狀ヲ呈セルモノニ於テ其ノ凸隆面ニ近キ主トシテ皮質濾胞ノ周圍一部ニ於テハ腺柱ノ部及ビ淋巴竇ノ部ニ多數ノ色素顆粒ヲ認ム。其ノ色塊狀ヲナセルモノハ黒褐色ヲ呈ス、其他黃褐色又ハ黃色ノ顆粒狀又ハ不規則ノ塊狀ヲナセル色素ヲ認ム。之等色素塊ニ於テ核ノ判明セルモノ、亦不明ナルモノ存ス。色素ハ一般ニ細胞體内ニ存スルモノノ如シ。而シテ色素ハ淋巴小管ト甚ダ密接ナル關係存スルモノノ如ク屢々小管ノ周圍ニ集在シ、且ツ其ノ壁ニ接着シテ又管ノ壁ニ顆粒狀色素

ヲ認ム、鐵反應陰性ナリ。

淋巴腺ニ出現セル「メラニン色素」ニ就テ文獻ヲ探ルニ KieI (Lignac<sup>87</sup>) ニ據ルハ二例ノアヂソン氏病ニ於テ鼠蹊腺ニ色素ヲ認メ、之レ皮膚ニ本源ヲナスモノナリト論ジ。 Judasohn (Lignac<sup>88</sup>) ハ「メラニン色素」ニ一致スト記載セリ、Schmorl<sup>89</sup> ハ淋巴腺ニ於テ色素ノ存在ヲ認メ之レ皮膚ニ由來セルモノニシテ化學的ニ皮膚色素ニ一致スト記載セリ、Schmorl<sup>89</sup> ハ五例ノアヂソン氏病、二例ノ黒色人種、二例ノ混合兒ノ鼠蹊腺及ビ腋窩淋巴腺ヲ檢シ各例共ニ皮膚ヨリ淋巴道ニヨリ輸送セラレタル皮膚色素ヲ認メ、鐵反應ヲ缺クト。 Wiernig u. Hamdi (前出) モ皮膚ヨリ色素ガ淋巴腺ニ輸送セラルル事ヲ記載セリ。要スルニ病的ニ又ハ生理的ニ亢進セル皮膚色素形成ノ存スル時ニハ、外表ノ淋巴腺ニ色素出現スト云フ事實ハ存ス。然レドモ化學的ニ確ニ「メラニン色素」ナリト確定スルニハ不十分ナリキ。之レニ關シ近時 E. Lignac (前出) ハ Hueck<sup>33</sup> ノ色素鑑別法殊ニ漂白法及ビ銀反應ヲ用ヒテ淋巴腺ニ出現セル色素ハ皮膚色素ト同様「メラニン色素」ナル事ヲ確定セリ。而シテ淋巴腺色素ノ由來ニ就キテ又諸説存ス、Schmorl (前出) ハ皮膚ノ色素顆粒ガ淋巴道ニヨリテ輸送セラレ淋巴竇ノ原形質富饒ナル細胞ガ之レヲ攝取セルモノナリト論ジ、尙ホ Chromatophoren 自身ガ淋巴道ニヨリテ輸送セラルト云フ事又色素顆粒ガ淋巴球ニ宿レルモノトノ可能性ヲ論ゼリ。 Lignac (前出) ハ色素ハ上皮細胞ニ由來セルモノニシテ、上皮性ノ Chromatophoren ガ血行又ハ淋巴道ニヨリテ輸送セラレタルモノナリト説ケリ。

淋巴腺ニ出現セル色素ノ由來ニ就テ考フルニ、組織的ニ淋巴腺ニ於テ淋巴ノ輸入管ノ存在セル凸隆面ノ部而モ(髓質ノ部ニハ常ニ存在セス) 皮質ノ部ニ存シ且ツ淋巴小管ト親密ナル關係ヲ有シ淋巴小管ニ顆粒狀ノ少量ノ色素ヲ認メタルコト及ビ淋巴小管ニ Chromatophoren 様ノモノヲ認メザル等ノ事ヨリシテ、余ハ眞皮組織ニ存在セル色素顆粒ガ淋巴道ニヨリテ淋巴腺ニ輸送セラレ、網狀織内皮細胞ニ攝取セラレ色素ヲ有スル組織球トシテ存在セルモノナリト説カントス。

## 四、結 論

一、本篇ハ陰莖癌二十四例ニ就テ組織學的ニ研究シタルモノノ記載ナリ。

二、其ノ總テハ扁平上皮癌ニ屬セシム可キモノナリ。

三、茂木氏ノ分類ニ從ツテ分類スレバ、乳嘴型十三例、結節型二例、潰瘍型七例、分類不可能ノモノ二例ナリ。

三、其ノ發生部位ヲ檢スルニ、龜頭ニ發生セシモノ四例、冠狀溝ニ發生セシモノ六例、龜頭表面及ビ包皮内板ニ亘リテ發生セシモノ六例、龜頭及ビ冠狀溝ニ亘リテ發生セシモノ一例、包皮内板ニ發生セシモノ六例、内板及ビ冠狀溝ニ亘リテ發生セシモノ一例ナリ。

四、腫瘍細胞ノ増殖蔓延狀態

(イ)、核分割像 各例ヲ通ジテ常ニ多數ニ認ムルハ母星期及ビ子星期ニ屬セシム可キモノニシテ、異型核分割ハ腫瘍ノ惡性ノ度ニ從ツテ差違アリ。殊ニ異型増殖強キモノニハ多數存ス。而シテ間接核分割像ハ主トシテ基底細胞型ヲ有スル細胞ニ多數ニ認メラル。而シテ直接核分割モ亦存シ、棘細胞層ノ上層ノ細胞ニ往々認メラル。

(ロ)、間質組織ニ於ケル血管ハ乳嘴型ニ屬スルモノニテハ侵蝕セラレタルモノ少ク、乳嘴型ニテモ異型ニ富ミ不規則ノ増殖ヲナスモノ、又潰瘍型ニテハ屢々侵蝕セラレ血管内増殖ヲ營メルモノアリ。各型ヲ通ジテ必發ナル所見ハ血管周圍ニ於ケル圓形細胞ノ集簇ニシテ、壁モ多少ノ度ニ於テ肥厚ヲ示セルモノアリ。而シテ腫瘍増殖ノ顯著ナル部ニテハ血管ノ新生増殖ヲ認メ、之レ腫瘍細胞ヲ榮養シ、其ノ増殖ヲ補助スルモノト思考ス。

(ハ)、末梢神經纖維ハ腫瘍細胞ガ異型ニ富ミ不規則ナル増殖ヲ呈スル例ニアリテハ屢々侵蝕セララル。カカル時腫瘍細胞ハ纖維周圍ノ淋巴道ヨリ進入セルアリ。又不規則ニ纖維ヲ侵蝕セルアリ。殆ンド必發ノ所見ハ周圍圓形細胞ノ浸潤及ビ淋巴管ノ擴張ナリ。

- (二)、檢シ得タルモノノ中鼠蹊淋巴腺ニ轉移ヲ有スルモノ四例ニシテ、其ノ一例ハ轉移ニヨリ鬼籍ニ登リシモノナリ。
- (ホ)、腫瘍組織ニ隣接セル表皮ニテハ殆ンド常ニ側性増殖ヲ認ム、又殊ニ包皮内板ノ部ニ發生セシ腫瘍組織ガ外板ノ正常上皮ノ部ニ進ミ破出セル部ニ於テモ正常上皮ノ反應性増殖ヲ認ム、カカル場合同性傳染ヲ承認スベキ像ヲ認メズシテ、自家發展式増殖及ビ上皮細胞間増殖ヲ認ム。側性増殖ノ發生機轉ハ代償再生の増殖ノ意味ヲ有スルモノモ存スルモ、亦所謂反應性増殖ト認ム可キモノモトヨリ存ス。
- (ヘ)、唯一例ニ於テハ甚ダ興味アル多中心性發生ヲ認メタリ。
- (ト)、一般増殖進入ノ狀ハ乳嘴型ニアリテハ周圍組織ヲ壓迫シツツ進入シ、潰瘍型ニテハ主トシテ浸潤性、破壊性ニ進入セリ。

五、發生ノ原因の關係トシテ局所素因ノ外、包莖ハ特ニ注意ヲ要スルモノナリ。其他ニハ特殊ノ原因ヲ認メシメズ。包莖ニ續發セルモノ十五例(六二・五%)ナリ。

六、所謂部分的自然治癒現象ヲ示セルモノヲ屢々認メ、其ノ條件トシテ余ハ、(イ)癌腫組織中殊ニ胞巢中異物性巨態細胞ノ出現、(ロ)癌腫細胞胞巢内ノ白血球ノ集簇、(ハ)癌腫組織ニ細菌ノ感染、(ニ)癌腫間質組織ニ於ケル反應性變等ヲ掲グベシ。

七、余ノ各例ニ出現セル異物性巨態細胞ハ組織球(クラスマトチーテン)性ノモノナリ。而シテ其ノ生成機轉ハ多細胞ノ融合ニヨリテ生ズルモノモ存スト共ニ、一部ニテハ、直接核分割ノ方式ニヨリ生ズルコトアルヲ確信ス。

八、扁平上皮癌組織ニ於テ皮膚「メラニン色素」消失ハ各例ニ於テ認メタル所見ナリ。其ノ事由ニ就キ、余ハ直接腫瘍細胞ニ於ケル機能退化及ビ間接ニ色素形成細胞ノ機能ノ變調ニ歸セントス。

九、「メラニン色素」ハ上皮細胞及ビ真皮組織ニ於テ共ニ形成セラルル事ヲ承認ス、即チ色素二元説ヲ主張セントス。

十、Chromatophoren ハ結締織性ノモノニシテ運動性ヲ有ス。



十一、腫大セルリン巴腺ニ於テ「メラニン色素」存在ヲ認ム、之レ眞皮中ニ存在セシ色素顆粒ガリン巴道ニヨリリン巴腺ニ輸送セラレ、網狀織内皮ニヨリ攝取セラレ、色素ヲ含有セル組織球トシテ存在セルモノナリ。

終ニ茲ニ下平、土肥兩教授及淡中學生ガ貴重ノ標本ト其臨床記載トヲ食與セラレ、此研究ヲ援ケラントル事ニ對シ滿腔ノ謝意ヲ表スルモノナリ。

## 引用書目

- 1) Apolant, Ueber die Einwirkung von Radiumstrahlen auf das Karzinom der Mäuse. Deutsch. med. Wochenschr. No. 13. 1904. S. 454. —
- 2) 赤松信營、惡性腫瘍組織ノ末梢神經纖維ニ對スル態度、癌第十三卷、第二冊、大正八年八月、一〇五頁。 — 3) Aschoff, Pathologische Anatomie Bd. 2 1921 5. Aufl. 中ニ記載。 — 4) Bormann, Die Entstehung und das Wachstum des Haut-Carcinoms, nebst Bemerkungen über die Entstehung der Geschwülste im allgemeinen. (癌第一年記載抄録ニ據マ) — 5) Becker, Über Riesenzellenbildung in Carcinoiden. Virch. Arch. Bd. 156. 1899. S. 62. — 6) Belach, Beiträge zur Statistik des Carcinoms. Zeitschrift f. Krebsforschung, Bd. 16 1917 S. 167. — 7) Borst, Die Lehre von den Geschwülsten. Bd. 1 1902. — 8) Caspary, Pathogenese d. Pigmentierung u. Entpigmentierung der Haut. Centrbl. f. allg. Path. Bd. 1. 1890. S. 639. — 9) Catsaras, Ueber das Verhalten der Mitosen bei den gutartigen papillären Epitheliomen. Virch. Arch. Bd. 204 1911 S. 105. — 10) Crete, Penkrebs bei einem 2 jährigen Kinde. Deutsche Zeitschrift f. Chirurgie, Bd. 79 1905. S. 209. — 11) Dalla Favera, Ein Beitrag zur Kenntnis der Pigmentnaevi. Ziegler's Beiträge, Bd. 43 1908 S. 43. — 12) Deméville, Ueber d. Pigmentfleck d. Haut. Virch. Arch. Bd. 81 1880 S. 333. — 13) Ertlich, Experimentelle Studien an Mäuseturmor. (癌第一年記載抄録ニ據マ) — 14) Ernst, Ueber das Wachstum und die Verbreitung bösartiger Geschwülste, insbesondere des Krebses in den Lymphbahnen der Nerven. Ziegler's Beiträge, Supplement 7. 1905. S. 29. — 15) Ehmman, S., Handbuch der Geschlechtskrankheiten. Bd. 1 1910. S. 225—258. — 16) Ehmman, Pathologie d. Pigmentierung und Entpigmentierung d. Haut. Centrbl. f. allg. Path. Bd. 1 1880 S. 641. — 17) 藤浪鑑、疾病素因殊ニ腫瘍ノ素因ニ就テ、日新醫學第二年、第八號、九九九頁。 — 18) 藤浪鑑、稻本龜五郎、移植シ得可キ鶏腫瘍ニ就テ、癌第六年、第一冊、明治四十五年、一頁。 — 19) 藤浪鑑、加藤竹男、移植シ得可キ鶏腫瘍ニ就テ(第五報告)、癌第九年、第二冊、大正四年、一三七頁。 — 20) 藤浪鑑、癌腫ノ病理(癌腫組織ノ増殖)、東京醫學會雜誌、第十九卷、第十二號、五五七頁。 — 21) 藤浪鑑、Ueber das histologische Verhalten des quergestreiften Muskels an der Grenze bösartiger Geschwülste. Virch. Arch. Bd. 161 1900 S. 115. — 22) 藤浪鑑、加藤竹男、移植シ得可キ鶏腫瘍ニ就テ(第六報告)、日本病理學會々誌、第六卷、大正五年、六五七頁。 — 23) 藤縄喜代藏、鼠肉腫ノ移植及増殖ニ關スル知見補遺、京都醫學雜誌、第十六卷、第九號、一一二頁。 — 24) Goldmann, Allgemeinere Gefäßbau maligner Tumor.

- moren, 及 Die Wandveränderungen an den Gefässen im Bereiche der Neubildung und ihrer Umgebung zu studieren. Deutsch. med. Wochenschr. 1906 No. 41 S. 1683. — 25) **Grund**, Experimentelle Beiträge zur Genese des Epidermispigmentes. Ziegler's Beiträge, Supplement 7. 1905. S. 294. — 26) **Hauser**, Gibt es eine primäre zur Geschwulstbildung führende Epithelerkrankung. Ziegler's Beiträge, Bd. 33. 1903. S. 1. — 27) **Heidemann. W.**, Ueber Entstehung und Bedeutung der kleinzelligen Infiltration bei Karzinom. Virch. Arch. Bd. 129. 1892. S. 77. — 28) **林郁彦**, 巨態細胞ノ實驗的研究, 京都醫學雜誌第十二卷, 第四號拔刷。 — 29) **花岡及 Schlemann**, 動物並ニ人類ノ惡性腫瘍ニ對スル「**カンヤン**」療法ニ就テ, 臨床醫學第三年, 第六號, 大正五年三月。 — 30) **Heudorfer**, Untersuchungen über die Entstehung des Oberhautpigments und dessen Beziehung zur Addison'schen Krankheit. Archiv f. Dermatol. und Syphilis Bd. 134. 1921 S. 339. — 31) **Hanemann**, Ueber die Anaplasie der Geschwulstzellen und die asymmetrische Mitose. Virch. Arch. Bd. 129. 1892 S. 486. — 32) **Hanemann**, Ueber den Begriff und das Wesen der Anaplasie. Virch. Arch. Bd. 162. 1900 S. 549. — 33) **Hueck**, Pigmentstudien. Ziegler's Beiträge, Bd. 54. 1912 S. 68. — 34) **速水猛**, 黒色肉腫ノ色素成生ニ就テ, 京都醫學雜誌第七卷, 第一號, 明治四十三年, 一七頁。 — 35) **飯塚實**, 癌ノ統計的調査, 癌第十年, 第一冊, 大正五年, 一九頁。 — 36) **岩崎徳松**, 十五歳ノ少年ニ來ル陰莖上皮膚癌ノ一例, 福岡醫科大學雜誌 五ノ三。 — 37) **今村卓稻**, 血管内腫瘍細胞群ニ於ケル血管新生, 癌第一年, 第二冊, 明治四十年, 四八七頁。 — 38) **石橋 麗津**, 癌ノ統計的研究, 癌第十一年, 第三冊, 大正四年, 一九六頁。 — 39) **池松武志**, 病的組織増生ノ際ニ現レル細胞核不對分割ノ意義ニ就テ, 京都醫學雜誌第十七卷, 第十二號, 八九頁。 — 40) **市川厚一**, 日本病理學會々誌 第五卷, 六一七頁。 — 41) **菊地武熊**, 惡性腫瘍組織ノ血管ニ對スル態度, 東京醫學會雜誌, 第二十八卷, 第一號拔刷。 — 42) **菊地武熊**, 胃壁ニ於ケル副腺ニ就テ附腫瘍發生ニ關スル知見補遺, 醫事新聞第八三七號別刷。 — 43) **浦野謙次**, 川上漸, 孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ノ實驗的研究, 癌第十年, 第二冊, 大正五年六月, 九九頁。 — 44) **清野謙次**, 生體染色研究ノ現況及其ノ検査術式特ニ生體色素攝取及組織球形細胞説, 大正十年二月。 — 45) **木村敬義**, 部分的自然治愈現象ヲ示セル扁平上皮癌ノ一例, 癌第二年, 第二冊, 五二八頁。 — 46) **上條秀介**, 極メテ簡單ナル神經髓鞘染色ノ一新法ニ就テ, 神經學雜誌, 第二十卷, 第八號, 大正十年, 二〇頁。 — 47) **Kaposi**, Pathogenese d. Pigmentierung und Entpigmentierung der Haut. Centrbl. f. allg. Path. Bd. 1. 1890 S. 640. — 48) **Kölliker**, Gewebelehre. 6. Auflage. 1889. S. 226. — 49) **Kars**, Studien über transplantierte Haut. Jahresberichte der Anatomie u. Physiologie. Anatom. Abthell. 1888 S. 438. — 50) **Kahlden**, Beitrag zur pathol. Anatom. d. Addison'schen Krankheit. Virch. Arch. Bd. 114. 1888 S. 65. — 51) **今裕**, 腸管壁ニ於ケル惡性腫瘍増殖ニ關スル組織學的研究補遺, 東京醫學會雜誌 第十七卷, 第一號, 明治三十六年, 二一頁。 — 52) **今裕**, 惡性腫瘍ノ骨ニ侵入セル關係ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第十九卷, 第二號, 明治三十八年, 一頁。 53) **今裕**, 鳥骨鷄ノ家鷄腫瘍ノ移植試驗附クロマトフォーレンノ意義, 癌第十四年, 第三冊, 大正九年九月, 一四七頁。 — 54) **片山久壽賴**, 癰疽及癰疽肉腫ニ就テ, 東京醫學會雜誌, 第二十九卷, 第二十二號, 大正四年, 一六三九頁。 — 55) **Kaufmann**, Lehrbuch d. speziellen pathol. Anatomie. Bd. I. 6. Aufl. — 56) **Langhans**,

- Manow A. Orner. Virch. Arch. B. 49 1870 S. 117. — 57) **Lignaz**, Über das Vorkommen von Hautpigment in Lymphdrüsen. Centr. f. allg. Path. Bd. 32 1921 S. 201. — 58) **茂木知明**, 陰囊癌に就テ, 癌第七年, 第二册, 大正二年, 一五七頁。 — 59) **三輪徳寛**, 陰囊癌, 醫事新聞, 八六〇—八六一〇。 — 60) **Manasse**, Über Granulationsgeschwülste mit Fremdkörperriesenzellen. Virch. Arch. Bd. 136 1894 S. 245. — 61) **Meinowsky**, Über den Ursprung des melanotischen Pigments der Haut und des Auges. Leipzig. 1908. 2. Ueber Pigmentbildung in vom Körper losgelöster Haut. Sonderdruck aus „Beiträge zur Physiologie und Pathologie“. — 62) **Mertsching**, Histologische Studien über Keratylalin und Pigment. Virch. Arch. Bd. 116 1889 S. 484. — 63) **Myerson**, Zur Pigmentfrage. Virch. Arch. Bd. 118 1889 S. 197. — 64) **Nothnagel**, Zur Pathologie d. Morbus addisonii. (Ref. Centr. f. allg. Path. 1896 S. 498.) — 65) **永田安三郎**, 包皮結石に續發セテ陰室癌, 研究會雜誌, 第九十五號, 明治四十三年, 六頁。 — 66) **長岡又郎**, 日本病理學會雜誌, 第五卷, 六一七頁。 — 67) **中村富治**, 陰室皮角に續發セテ癌腫ノ一例, 中外醫事新報, 第五四〇號, 明治三十五年, 一一二九頁。 — 68) **Orth**, Über Heilungsvorgänge an Epithelomen nebst allgemeinen Bemerkungen über Epitheliome, (癌第一年記載抄録に據テ) — 69) **押川公介**, 副出後ニ於ケル癌腫細胞殊ニ其ノ核分割像ノ變化, 癌第十四年, 第二册, 大正九年, 六九頁。 — 70) **Post**, Über normale und pathologische Pigmentierung der Oberhautgebilde. Virch. Arch. Bd. 135 1894 S. 479. — 71) **Petersen**, Über den Aufbau des Carcinoms und seine plastische Darstellung. Virch. Arch. Bd. 164 1901 S. 570. — 72) **Ribbert**, Über das Gefäßsystem und die Heilbarkeit der Geschwülste. Deutsch. med. Wochenschr. 1904 No. 22 S. 801. — 73) **Ribbert**, Geschwülstlehre. 1904. — 74) **Rabl**, Über die Herkunft des Pigments in der Haut der Frodenen Larve. Anatomischer Anzeiger, Bd. 10 1895 S. 12—17. — 75) **Raymond**, De la pigmentation dans le maladi d. Addison. (Ref. Centr. f. allg. Path. 1896 S. 502) — 76) **Rosenstiel**, Studien über die Abstammung und die Bildung des Hautpigments. Arch. f. mikroskop. Anatom. Bd. 50 1897 S. 350. — 77) **佐藤勤也**, 癌ノ發生部位ニ關ケル統計的調査, 癌第一年, 第一册, 明治四十年, 一頁。 — 78) **坂口勇**, 陰囊癌に就テ, 皮膚科泌尿器科雜誌, 第七卷, 四八一頁。 — 79) **鈴木信義**, 本邦ニ於ケル惡性腫瘍ノ統計的研究, 京都醫學雜誌, 第十五卷, 第六號, 按刷。 — 80) **Schmidt, M. B.**, Die Verbreitungswege der Karzinome und die Beziehung generalisierter Sarcome zu den leukämischen Neubildung. Deutsch. med. Wochenschr. 1904 No. 32 S. 1177. — 81) **Schwarz**, Über ein Epithelioma papillare, ein Beitrag zur partiellen Spontanheilung epithelialer Geschwülste. Virch. Arch. Bd. 175 1904 S. 507. — 82) **Schwalbe**, Über d. Hautfarbe der Menschen und der Säugethiere. Deutsch. med. Wochenschr. 1892 No. 11 S. 242. — 83) **Schmidt, M. B.**, Ueber die Hämoxidin und Melanin. Virch. Arch. Bd. 163 1900 S. 151. — 84) **Strohe**, Über Vorkommen und Bedeutung der asymmetrischen Karyokinese. Ziegler's Beiträge, Bd. 14 1893 S. 154. — 63) **Schnorl**, Über Pigmentverschleppung aus der Haut. Centr. f. allg. Path. Bd. 4 1893 S. 218. — 86) **筒井八百枝**, 日本ニ於ケル皮膚癌ノ部位ニ就テ, 癌第一年, 第二册, 明治四十年, 七三三頁。 — 87) **田島壽十郎**, 陰室癌に就テ, 日本外科學會雜誌, 第十一回,

- 第一號、明治四十四年、五六頁。 — 88) 田中祐吉、惡性腫瘍ノ血管、癌第一年、第一冊、明治四十年、一七頁。 — 89) 竹内節、血管内進入腫瘍ノ運命ニ就テ、癌第十一年、第三冊、大正六年十月、二八三頁。 — 90) 高橋信、腫瘍轉移ニ關スル實驗的研究、癌第十年、第一冊、大正五年三月、四八頁。 — 91) 垂水正保、膀胱ニ發生セル角化扁平上皮癌並ニ癌腫ト結核性病變トノ併發ニ就テ、十全會雜誌第二十五年、第一號、一頁。 — 92) 竹内節、火傷及ビ凍死ノ病理ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究、日新醫學 第十一年、第七號、一〇四六頁。 — 93) 竹内甲平、色素性母斑ノ本態及母斑細胞ノ發生ニ就テ、東京醫學會雜誌 第三十五卷、第十二號別刷。 — 94) 筒井秀二郎、黑色腫瘍ニ就テ、日本病理學會雜誌 第四卷、四八一頁。 — 95) Virchow, Das pathologische Pigment. Virch. Arch. Bd. 1 1847 S. 379. — 96) Wieting und Hamdi, über die physiologische u. pathologische Melanin pigmentierung und den epidermalen Ursprung der Melanoblastome. Ein primäres Melanoblastom der Gallenblase. Ziegler's Beiträge, Bd. 42 1907 S. 23. — 97) Walter Treuherz, Zur Kenntnis der melanotischen Tumoren. Zeitschrift f. Krebsforschung, Bd. 18 1921 S. 73. — 98) Waldeyer, Die Entwicklung d. Carcinome. Virch. Arch. Bd. 41 1867 S. 470. und Bd. 35 1872. S. 67. — 99) Wolfheim, Willy, Ueber den heilenden Einfluss des Erysipels auf Gewebsneubildungen, insbesondere bösartige Tumoren. (Ref. Centrbl. f. allg. Path. Bd. 32 1922 S. 582.) — 100) 山極勝三郎、胃癌發生論、明治三十八年。 — 101) 山極勝三郎、癌腫ト素因、癌第九年、第二冊、大正四年六月、八七頁。 — 102) 山極勝三郎、病理總論、第九版。 — 103) 山極勝三郎、市川厚一、人工的癌腫發生ニ就テ、第四報告、癌第十一年、第二冊、大正六年、一六三頁。 — 104) 山極勝三郎、本邦初生兒尾間骨部青斑ノ發生論、三浦守治先生在職二十五年祝賀論文集、六六七頁。 — 105) 山極勝三郎、腫瘍發生學ノ近況、日新醫學、第十周年記念號、一一一頁。

## 附圖說明

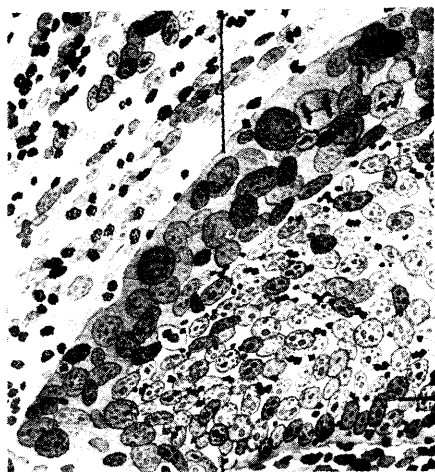
第一圖 第三例(ライツ顯微鏡接眼Ⅰ、接物Ⅶ)、多中心性發生ニヨリ一胞巢中ニ於テ兩々相異ナレル癌腫細胞群ノ相接セル像、イ 扁平上皮癌ノ像ヲ有スルモノ、ロ 基底細胞型ノ細胞ヨリナレルモノ。

第二圖 第十六例(ライツ顯微鏡接眼Ⅰ、接物Ⅶ)、角化セル癌腫細胞群ニ接シテ出現セル巨態細胞、イ 巨態細胞核ノ直接核分割像。

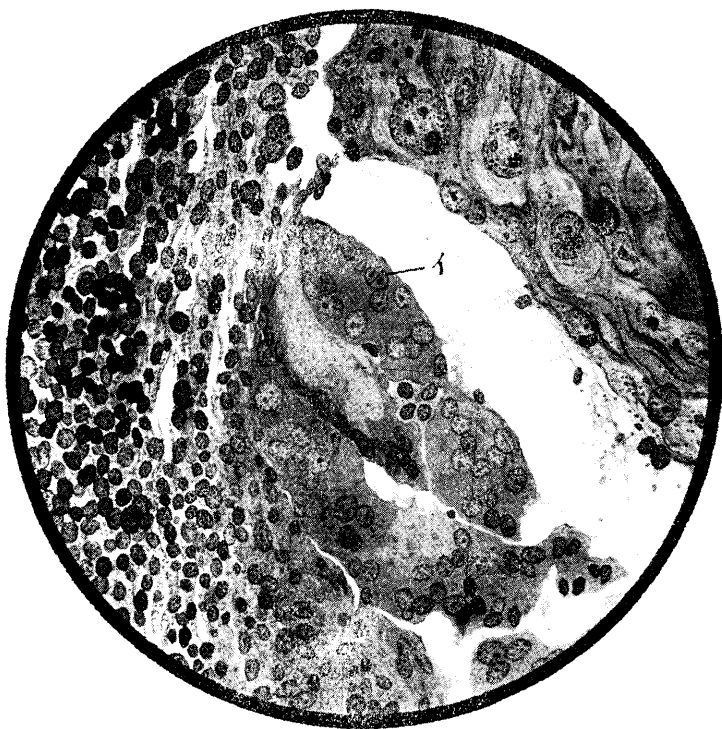
第三圖 第二十二例(ライツ顯微鏡接眼Ⅰ、接物Ⅲ)、癌腫細胞胞巢ガ其ノ中ニ於ケル白血球集簇ニヨリテ破壊セル像、イ 白血球ノ集簇、ロ 破壊セラレ殘レル癌腫組織。

田論文附圖

一圖



第二圖



第三圖

